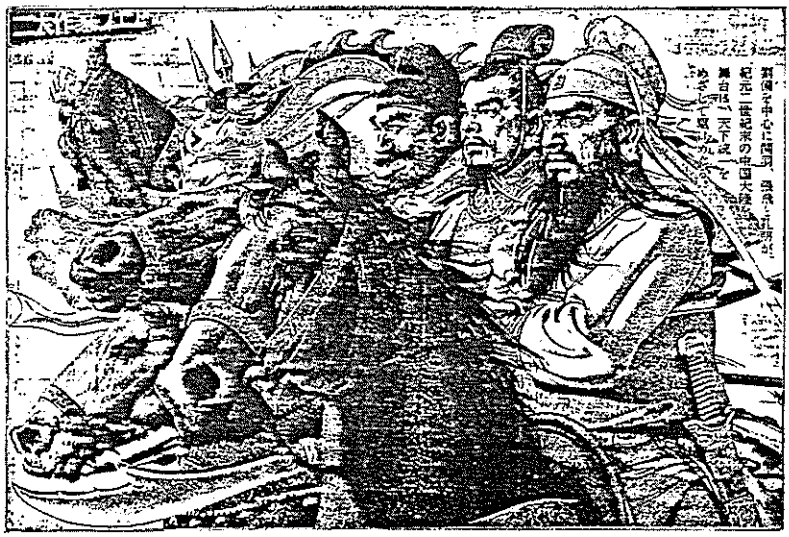
長江三峡下り

三国志の里の旅



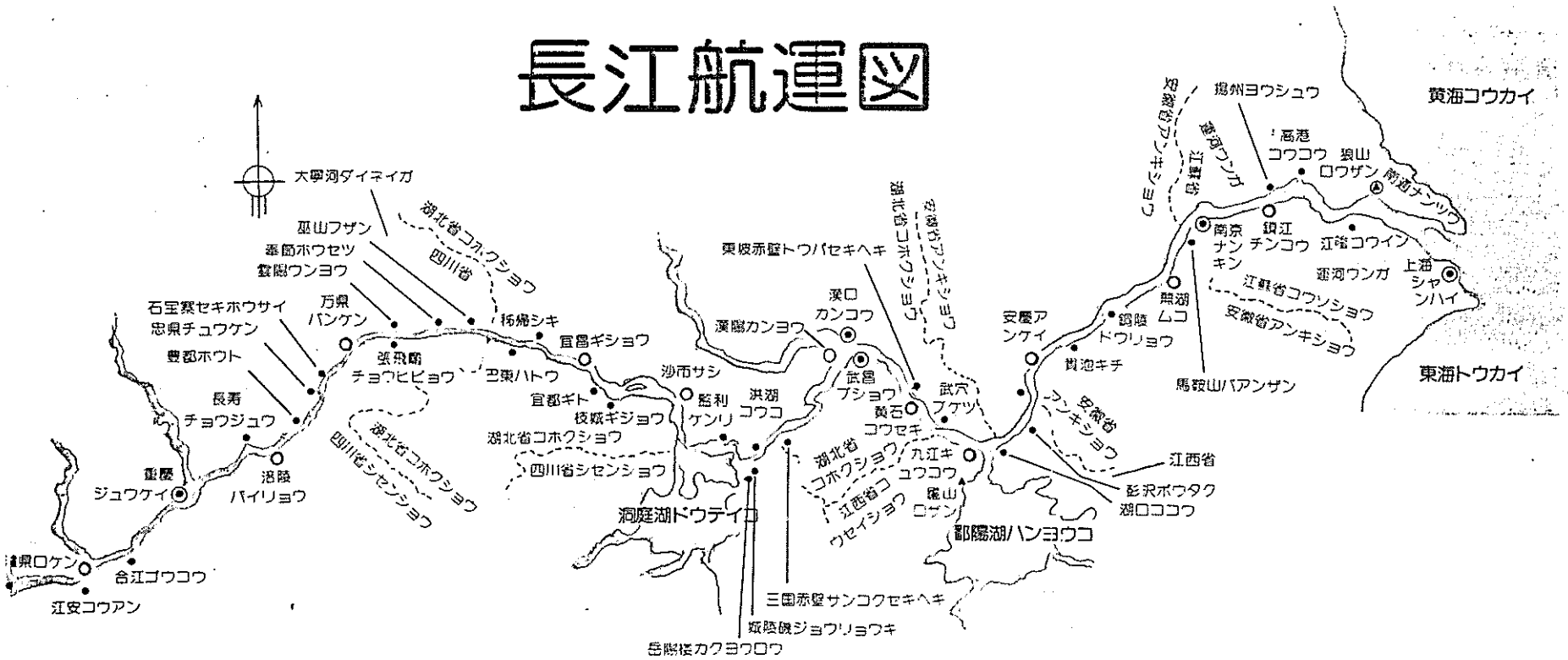
昭和６２年９月１８日～２７日

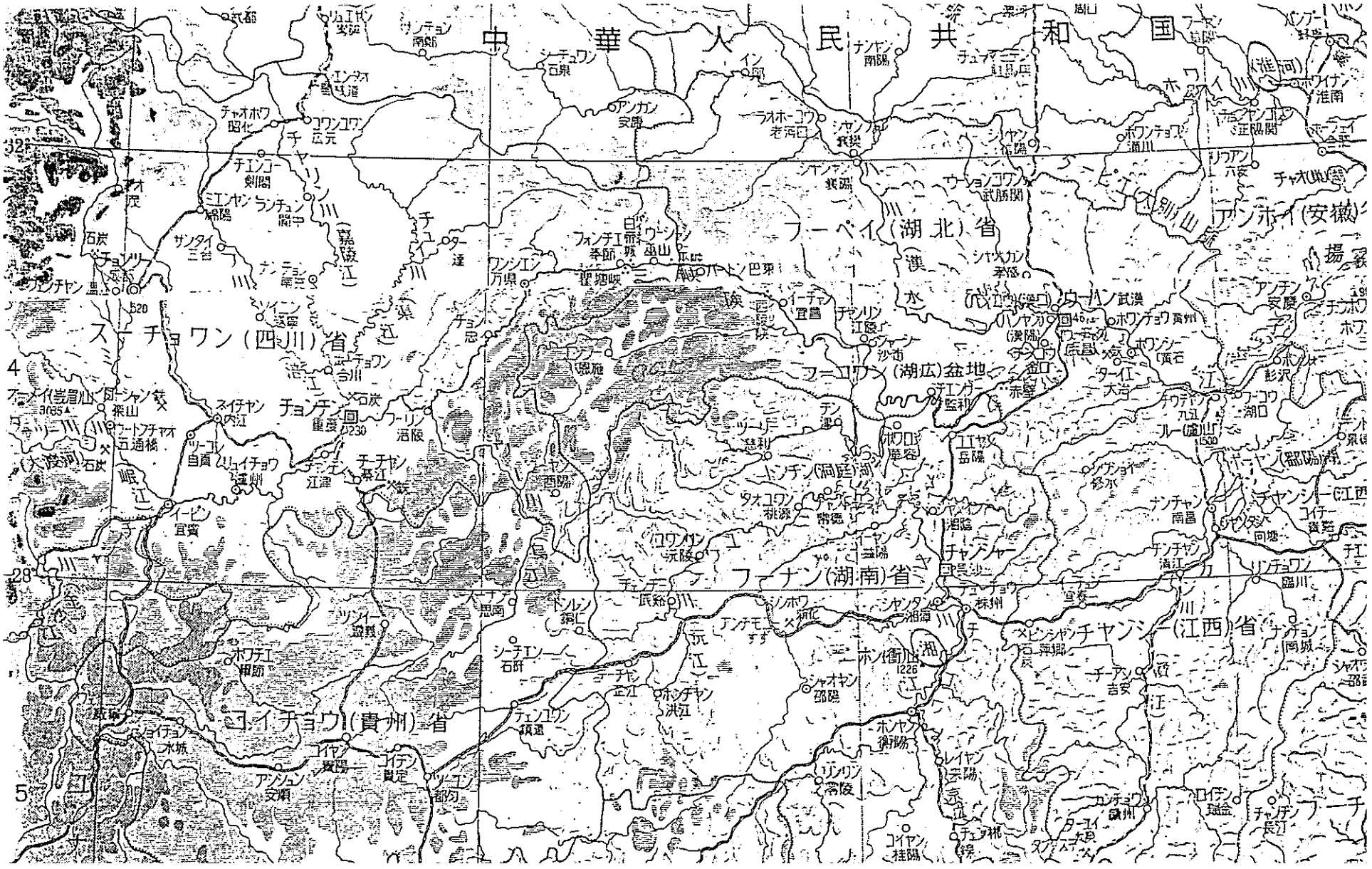
寺 前 信 次

目　　次

はしがき　・・　1
9月18日・9月19日　・・　3
四川省　・・　4
重慶の概要　・・　6
市内見学・重慶市博物館　・・　8
9月20日　・・10
防空壕・画家の家・繁華街　・・11
朝天門・重慶長江大橋　・・12
桂園・人民大礼堂　・・13
重慶との離別・突然の乗船　・・14
長江と三峡下りの概要　・・15
9月21日・長江の船旅　・・17
長寿・涪陵　・・18
豊都　・・19
忠県　・・20
石宝寨　・・21
万県　・・22
9月22日・三峡下り・瞿塘峡　・・23
雲陽・張飛廟　・・24
奉節　・・25
八陣図　・・26
灩　澦　灘　・・27
白帝城　・・28
劉備玄徳の最後　・・29
夔門（夔州）　・・33
孟良梯　・・34
風箱峡・七道門　・・35
黛渓・錯開峡　・・36
巫山県城と小三峡遊覧　・・37
9月23日・巫峡　・・39
神女峰　・・40
孔明碑・無奪橋　・・41
碚石・巴東　・・42
秭帰・屈原沱　・・43
香渓　・・45
西陵峡　・・46
兵書宝剣峡・青灘　・・47
牛肝馬肺峡・崆嶺峡　・・48
黄陵廟・黄牛峡・燈影峡　・・49
南津関　・・50
葛州壩ダム・宜昌　・・51
三遊洞　・・53
9月24日　・・54
夜の長江下り・当陽　・・54
江陵　・・55
沙市・湖北省　・・56
湖南省　・・57
洞庭湖　・・58
岳陽楼　・・59
汨羅　・・61
赤壁の古戦場　・・62
船旅の回顧　・・64
9月25日・武漢の概要・漢口　・・65
漢陽・武昌　・・66
武漢の観光・武漢長江大橋　・・67
東湖　・・68
湖北省博物館　・・69
晴川閣・帰元寺　・・70
黄鶴楼　・・72
禍福は糾える縄の如し（発病）　・・74
9月25日～～9月27日　・・74
中国雑感　・・75
旅のあとに　・・77

長江航運図


大運河ダイネイガ
巫山フザン
垂箇ホウセツ
雲陽ウンヨウ
石宝寨セキホウサイ
忠県チュウケン
万県
バンケン
豊都ホウト
長寿
チョウジュウ
重慶
ジュウケイ
合江ゴウコウ
江安コウアン
湖北省コホクショウ
四川省
扶帰シキ
宜昌ギショウ
張飛廟
チョウヒビョウ
巴東ハトウ
宜都ギト
枝城ギジョウ
沙市サシ
監利
ケンリ
洪湖
コウコ
漢陽カンヨウ
漢口
カンコウ
武昌
ブショウ
黄石
コウセキ
東坡赤壁トウパセキヘキ
武穴
ブケツ
安慶アンケイ
鎮陵
ドウリョウ
貴池キチ
馬鞍山バアンザン
南京
ナンキン
鎮江
チンコウ
江陰コウイン
揚州ヨウシュウ
高港
コウコウ
狼山
ロウザン
南通ナンツウ
上海
シャンハイ
黄海コウカイ
東海トウカイ
江蘇省コウシショウ
安徽省アンキショウ
江西省
彭沢ホウタク
湖口ココウ
九江キ
ユウコウ
廬山
ロザン
鄱陽湖ハンヨウコ
洞庭湖ドウテイコ
四川省シセンショウ
三峡赤壁サンコクセキヘキ
城陵磯ジョウリョウキ
岳陽楼カクヨウロウ


中華人民共和国
フーペイ(湖北)省
スーチョワン(四川)省
フーコワン(湖広)盆地
フーナン(湖南)省
コイチョウ(貴州)省
チャンシー(江西)省
アンホイ(安徽)
ホワイ川
チャリン川
ハン川
ユー川
ツー川
ヤン川
ホン(衡)山
ウー山
ホワ山
ホワイナン
淮南
ホワイチョウ
淮陽関
ホーフェイ
合肥
リウアン
六安
チャオ(巢)湖
ウーチョンコワン
武勝関
ハンヤン
漢陽
ハンコウ
漢口
ウーハン
武漢
ホワチョウ
黄州
ホワシー
黄石
ホー
彭沢
ターイー
大冶
チウチン
九江
フーコウ
湖口
ルー(廬)山
1540
ヤー(鄱陽)湖
チャンシー(江西)
コイチ
貴溪
ナンチャン
南昌
ヤンタン
向塘
チンチャン
清江
リチョワン
臨川
チャンシャ
長沙
チェンチョウ
宜春
チュー
株州
シャンタン
湘潭
ヤンチョウ
揚州
アンチン
安慶
チンホワ
ホフ
ホワイ
ホワ
ホワ
ホワ

はしがき

古今の旅日記を例に引くまでもなく、日本人はもともと旅好きな民族であつたのであろう。伊勢参りを始めとして社寺参拝の風習が庶民の旅情を育んで来た。旅は心、世は情け。未知の土地、見知らぬ人との出会い、発見が人生を豊かにしたのである。

今回の長江上流の重慶から出発した長江（揚子江）の三峡下りは、「三国志」ゆかりの船旅として有名である。三国志は晋の陳寿が著わした正史「三国志」を基に、元末に羅貫中が長編小説の「三国志演義」に纏めたものである。

４００年の栄華を誇った漢王朝は「黄巾の農民蜂起」によって崩壊し、都の洛陽は荒廃した。軍閥であった董卓は最後の皇帝「献帝」をたてて暴政を布いた。人民の怒りは頂点に達し、反董卓の連合軍は袁紹を盟主にして立ち上がった。董卓は献帝を擁して長安に逃れたが、遂に内紛に依って命運は尽きてしまった。

これは三国志の始まりだが、私達の名目に過ぎなかった青春時代に干戈を交えた中国戦線場は、此の主要な舞台地域であり、河南省を中心とした中原の地であった。特に曹操が献帝を迎えて黄河の中・下流の南に広大な地盤を築き、黄河の北に地盤を持つ袁紹との間に「官渡の戦い」が行われたが、其の官渡の地は、懐古の情の最たる開封（当時の河南の省都）の直ぐ近くであった。

このように辛酸をなめ、凄絶壮絶な迅雷轟々と耳をつんざくような激戦地の、濁悪世界に身を投じていた関係と、千変万化に富んだ奇妙奇態の三国志の戦記は私を魅了し、暇のある度に愉々快々に読破したものであつた。

三国志に出てくる陝西省の西安を始めとして、河南省の洛陽、許昌、栄陽、中牟、開封、陳留等ばかりでなく、江蘇省の徐州、山東省（青州）の済南、兗州（曲阜）等は何回となく足跡し、何れも魏の曹操の勢力下の地であった。勿論、劉備玄徳にも関係の深い処でもある。

江東に覇をとなえた呉の孫権の支配下であった南京（建業・秣陵）、蘇州、杭州等も訪れた深い想い出の地であり、三国志の中では諸葛亮孔明の「天下三分の計」の最後の一つの地である蜀（四川省）の劉備の舞台だけが、未踏の地として残っていたのである。僅少ながら戦略戦術を学んだ私としては、千辛万難を排して是が非でも古い歴史に思いを馳せる巴蜀（四川省）の国に、躍起となって渇望したのであった。

実のところ、本夏はチベットを中心にして四川省も併せて紀行したいと、千載一遇の機会として意気軒昂だつたものの、４０００～５５００メートル級の高地は紫外線が強烈で、眼の手術後の事でもあり、医師からチベット紀行を強硬に反対された。

秋になって不要となった扇子のように意気消沈して失意泰然としていた時、虫の知らせというか、合縁奇縁というか、日中旅行社の記事を読み、責任観の重責から死生観を身を以って学んだ中国への憧憬が、強烈に息を吹き返して来たのであった。

特に劉備玄徳が雌雄を決して最後の死戦場となって敗れた宜昌（当時の夷陵）や、漢朝再興の夢半ばのまま、６３年の生涯を閉じた白帝城は、以前より夢にまで見た垂涎の地であった。我々のように剣電弾雨の中に勇猛に戦った者には、彼等諸将の皮裏胸中は、軌を一にするように理解でき、修羅の世界が脳裏に浮かんで来るものである。

また洞庭湖や岳陽、武漢（旧名は漢口を夏口、武昌を江夏と称した）一帯は、赤壁の戦いを始めとして乾坤一擲の古戦場が点在し、興味は誠に津々である。

以上のような想いから、甘い物に蟻が群がるように旅をこよなく愛し、陶然として機を忘れて三国志から処世を学び、歴史は繰り返して明日は明日の風が吹くと、重慶からの長江三峡下りに参加し、「天下三分の計」の地の見学を完うしたのであった。

長江や黄河の流れは永遠に続くものの、われらの人生は至って短くて幻化（まぼろし）の如く、風の吹くままに転がり、根から離れた蓬のような転蓬の人生であった。

勿論、特別に生に対して執着しない積りだが、生きているということは、行楽するに如かずと漢書にも書かれている。軍という旅浪の世界から今日まで、自家撞着の矛盾の性格を恣にして生きて来た私から、旅を捨てさす事は当然出来ないのである。

１月はインドネシア、３月はパプアニューギニア、今回の９月は長江三峡下りへと飄然として雲や水の流れのように暮らし、思うことが一つ叶えばまた一つと満足する時はなく、今日の後には今日はなしとばかり、惚れて通えば千里も一里に過ぎないようになってしまった。

人の心は面のようであり、旅で人生の満足感を味わう私には分相応の風が吹き、旅で足るを知る者にとっては、どのような境遇（今回は病気入院）も仙境であると信じ、烟霞の痼疾というか、病、膏盲の域は一段と昂進するばかりだ。

沈香も焚かず屁もひらずの暮らしの中で、今回もとりとめのない謬悠の説に過ぎない紀行文を記述する事にしたが、春秋に富み懸車の年に近ずくにつれて、よしの髄から天井を覗くような文となった事を、面火が燃えるように赤面している。将に日月の流れる如く老兵に到った証拠であろう。

昭和６２年１０月

石川県加賀市山代温泉神明町７～３　　寺　前　信　次

９月１８日

大阪空港に於いて、同類相求め類は友を呼ぶように、東京よりの出発便の者と合流し、ＣＡ９２２にて滄海を渡って上海に向い、１年半ぶりに上海の土を踏んだ。昨年竣工したという大華賓館セーラトン・ホテルに一泊したが、上海の最高級のホテルであり、今までの旧外国租界から接収したホテルとは雲泥の差である。中国の古語にも「銭なき男は帆のなき舟の如し」とある通り、愈々中国も合弁の外資系ホテルの建設に邁進し始めたようである。

９月１９日

上海発９、００の５４０１便は重慶の天候不良のため遅延するとのアナウンスだったが、約１時間後に離陸した。後記する通りに重慶は霧の町として有名であり、中国第２の曇りの日の多い地である。第１は貴州省の陽機で年間３００日が曇りというから、流石に大陸だ。このような関係から霧の重慶空港は午前中の発着が困難ではないだろうか。約１００人乗りの乗客の大半は中国人で占め、日本人のツアーは我々一行の２３名に過ぎず、長江三峡下りもこれからの観光宣伝コースのようである。

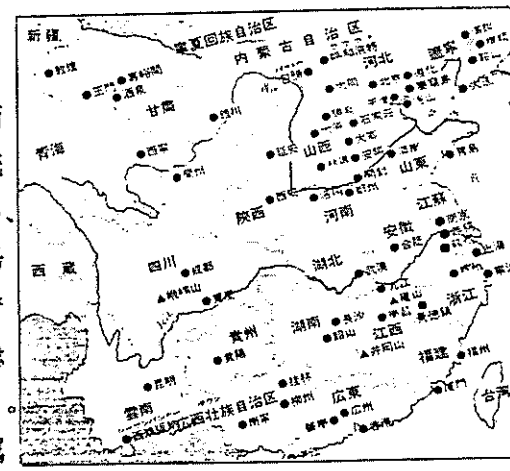
上海～重慶間は船舶では７日間、急行列車では２泊３日を要し、飛行機では２時間半に過ぎないが、雲海の上を飛ぶ機は一粒の粟のようで、宇宙の広大さに比較して我々の生の須臾なることを哀しみ、長江の窮りなきを羨む心境になった。数十回に及ぶ海外旅行で初めて味わった胸中に、一抹の不安を覚えたのであった。

霧も晴れ上がった重慶空港に１２、３０に着陸した。空港は市の西方約２８キロにあり、四周は山岳に囲まれた曲がりくねった山間道のため、所要時間は約４５分である。今日の予想気温は２２°～２８°ということで、晴天ながら山間の街道はもやもやとして視界も狭く、峰の稜線を抜ける空港街道は石垣で積み上げられ、点在する石造りの家屋が特に眼に付いた。

網膜に映る山並みの景観は山口県の秋芳台に似ており、連山は一夫関に当れば万夫も開くことなしと形容する要害堅固の地形だ。地上攻撃に対する竜驤虎視とした防御陣地の構成は容易であり、防空上は霧という自然現象の恵があり、此処に政府を移した蒋介石の炯眼が窺われた事が、重慶の第一印象であった。

紀行文を記述する前に、四川省と重慶の概要を記して知識を博め、紀行文を読む為の参考に供したい。

四　川　省



四川省は長江（揚子江）の上流で中国南西部に位置している。四川とは一般に長江支流の岷江、沱江、嘉陵江、黔江（烏江）をさし、黔江の代りに長江本流または涪江を入れる場合もある。別の説では宋時代の行政区画名であった益州路、梓州路、利州路、夔州路を総じて呼んだ「三峡四路」から発したとも云う。

禹貢時代は梁州と称し、周代には雍州に属し、秦時代には巴蜀二郡となる。四川省を巴蜀の地と称するのは此のためである。宋代に四路に分けて之を四川路と総称し、明代には四川布政使司を置き、清代に四川省となった。

境内は山脈が蜿蜒として丘陵の起伏が多く、至る所に嶺岡崖壁と形容する山地が連なり、中国の他の地方と隔絶した地形である。即ち、西はチベット国境の４０００メートル級の大雪山、北は３０００メートル級の大巴山、東南は武陵山と四周が高く、中央部に至るに従って低くなり、赤色盆地と呼んだ広い四川盆地を形成している。

面積や人口の規模が大きく資源の豊かな事から、物資の自給自足が可能であり、かっては半ば独立した地域であった。其の為に天与の穀倉地帯の「天府の国」と呼ばれ、気候も熱帯に近くて米作も年に２回以上の収穫があり、金、銅、錫、鉛等の鉱産にも富み、中国全土の中で最も富裕な地域の一つであった。

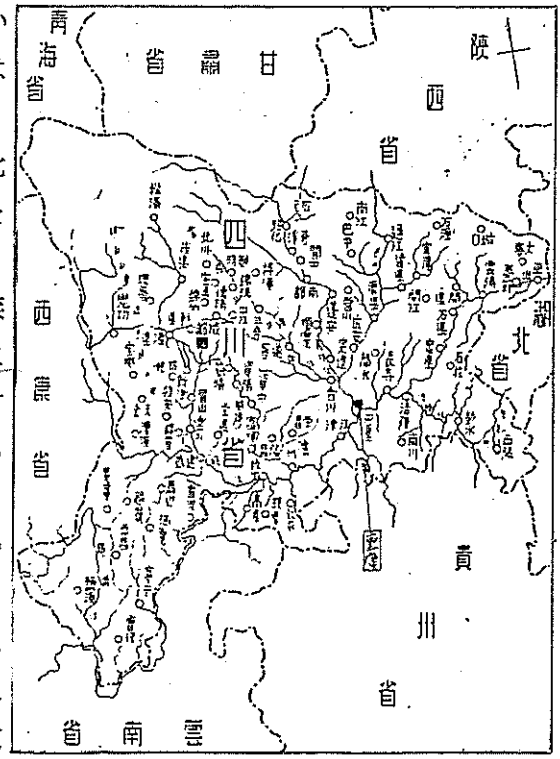
漢民族が黄河流域に定住した頃、タイ系の非漢民族が既に現在の成都や重慶を中心に、それぞれ楚と巴の国をつくっていた。此の非漢民族は紀元前３１６年に北から侵入して来た秦に征服されたが、現在も省内のリーシャンイ族自治州には、先住民の子孫と考えられる少数民族（約３００万）がいる。

漢民族の入植が増大して四川平野に大規模な潅漑用水が作られ、水田を耕し、これらを基礎にして城郭都市が築かれた。三国時代（２２１～２６５）には省都の成都は、古代中国の敏腕な戦略家として名声高い、蜀の丞相「諸葛亮孔明」の本拠地であった。

１７世紀の明朝末期に際して、飢饉を機に陝西省で蜂起した李自成（１６０６～４５）の率いる大流賊団が四川に乱入し、此の地方は殆ど無人の地となったという。李自成は明朝を倒したが、清朝に敗れて自殺した人物である。それ以降も政局は不安で軍閥の相剋から共産軍の蹂躙など、軍閥の苛斂誅求は省民を苦しめたのであった。

１８世紀になって、主として広東地方からの移住者が定着したため、其の子孫達は現在でも広東語を使用していると云う。

近年まで四川省に入る主なルートは、北の陝西省の渭河盆地から峻険な秦嶺山脈を越える所謂「蜀桟道」のみであったため、四川省は米の産地として、西方の非漢民族支配の根拠地に過ぎなかった。即ち、蜀に入る道は千山万水に隔てられて、車も通すことの出来ない険しい山嶽が連なり、馬も轡を並べて通る事も許さない懸崖が続き、到底大軍の攻める事の出来ない土地であつたのである。



日華事変の勃発に伴い此の地方は急速に発展をもたらし、もともと開港場であった重慶は戦時中の国民政府の首都として、政治軍事経済の中心となり、開放後は大都市としての発展も著しく、社会体制の変革を別とすれば、省の大半は農村的である。

長江即ち揚子江（岷江の合流点から上流は金沙江と称す）は、西のチベット高原を深い峡谷をえぐりながら南流し、四川盆地に入って東に向い、盆地内を２５０キロ流れて我々の訪れる万県の下流で、「三峡の険」と呼ばれる峡谷をなして巫山山脈を横断し、湖北省に流れて行く。長江に注ぐ各支流の河川は水量が豊かであり、盆地内での水運は盛んで開港場も各所に設けられている。

秦嶺山脈によって北方からの寒気が遮られる四川盆地一帯では、省内の諸流が南方からの暑気を調節し、年の平均気温は１７°Ｃの温暖な気候に恵まれ、年間降水量は約１０００ミリである。

植物の成育期間は年間１１ケ月といわれる程で、降雪や結氷は極く稀だが、冬期は特に霧の発生が多いという天候である。

重　慶　の　概　要

四川省最大の都市として、長江の河口から約２２００キロ上流にある重要な開港場となっており、三峡下りには最も良好な出発地である。３０００年の歴史を持つ文化の古都・重慶は四川盆地の中南部に位置し、海抜２４０メートル、面積２万２千平方キロ、人口は中心部は約３００万だが、重慶市の総人口は１４００万という世界最大の都市である。市は９０の区と１２の県に分かれ、島のようになっている半島部は約４５万の人口を擁し、政治経済文化の中心地となっている。

其の中心部は長江と支流の嘉陵江の合流する突角の台地上にある。従来、重慶に到るには河川に依るしかなく水運の衝に当っていたが、２つの長江大橋と３つの嘉陵江大橋が完成し、成渝（成都ー重慶）、川黔（重慶ー貴陽）、襄渝（襄樊ー重慶）などの鉄道が、雲南・貴州・陝西等の省に四通発達し、宜賓から重慶を経て武漢・上海までの水路も整備された。

古来、蜀への道は難しと多くの詩人達に詠われたことは今は昔の物語となって、李白の言う「蜀道の難きは青天に上るよりも難し」という光景は最早見る事は出来ない。

紀元前１１世紀の西周時代に此の町は既に「巴国」の首都であり、春秋時代も亦これを継ぎ、巴国の名は、四川を流れる長江の支流・嘉陵江（長さは１０１０キロで長江の６分の一）が巴の紋の様に曲折迂回しているから、名付けられたと言われている。

秦の始皇帝の統一以後、此処に巴郡を設け、漢代になって江州と改められ、隋・唐代には渝州の都があったため渝城という名称もある。嘉陵江の別名・渝水の名に因んで渝州と呼んだのである。唐代の詩人の李白は峨嵋山月歌の中で

峨嵋山月　半輪の秋　　影は平羌に入って江水流る
夜清渓を発して三峡に向かう　　君を思えども見ず渝州に下る

と詠っているが、此の地を詠んだものである。今日、重慶のことを渝と簡称するのは隋代に始まった訳である。

北宋の代になって趙淳が渝州鎮守の恭王に封じられて、一時この地を恭州とも呼んだが、のち彼が帝位に就くと恭州は重慶府に格上げされた。「重慶」とは「喜びが重なる」という意味で、今日まで使われて来たが、重慶市となったのは１９２７年からである。

重慶は古来、中央から離れた根拠地として政治的に重要な地位を占めた。清朝を倒した辛亥革命も、１９１１年９月の重慶における暴動が発端となり、抗日戦中、蒋介石の国民政府が南京から重慶に移り、日本軍の進略に抵抗した事をみても明瞭である。

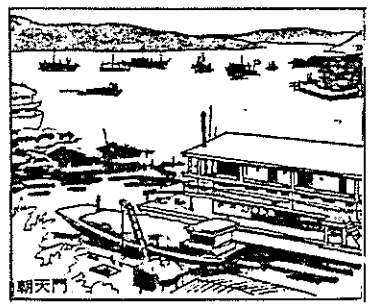
重慶は１８９１年のチーフ条約によって開港場となったが、それだけに中国奥地における重要都市、重要商港として第二次大戦前には、日本、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの各領事館や租界が置かれ、事変前には日本の商館は十余軒もあったという。チーフ条約とは１８７５年、英領事館訳官マーガリー殺害の結果、７６年、英・清間で締結され、治外法権確立などの特権が認められて、重慶、宜昌などの四港が開港されたものである。

抗日戦争中は中国東部海岸地方や揚子江の中・下流域から、多くの工場や労働者たちが移転し、市の人口も急激に増加して４０万から一挙に１００万に膨張した。市の区域も揚子江と嘉陵江の合流点の河岸一帯にまで拡がり、三方は江で囲まれて街は一面に山沿いに横たわっている。

日中事変では日本空軍の大空襲を受けて市街は破壊された。１９４５年の第二次大戦終結後は、延安の毛沢東が重慶の蔣介石と会談を行った国共平和交渉（重慶談判とも云う）の地として世界の視聴を集めたが、国共会談は不調に終わり、それから４年にわたる内線に入った。開放後は周辺の天然資源を利用した重工業が急速に発達し、活気に溢れる大工業都市に生まれ変わったのである。

旧城は三国時代に由来するが、半島状の市街区の東半分に位置し、西の新市街とは開放路や新華路などの大通りによって繋がれている。城内は揚子江沿岸の低い方を下半城、嘉陵江側の高い方を上半城と云い、今日でも石垣が見られるばかりか、抗日戦中の防空壕が石垣の中に随所に残されている。

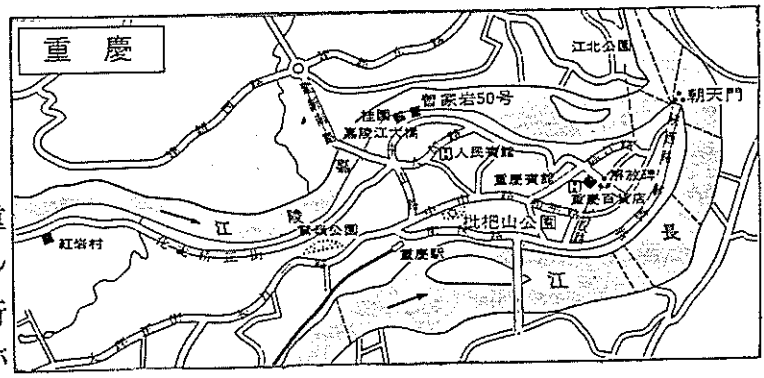
重慶は中国では珍しく自転車やバイクが極端に少なく、それは坂の町のために利用出来ないからである。嘗ては坂の町・重慶の主な交通手段は駕籠であつた。船着場の朝天門埠頭も河岸から１００メートルの坂を登らなければならず、荷揚げ人夫を泣かせた埠頭であった。しかし文化大革命後、この埠頭は紅港と呼ばれるようになり、ケーブルカー、クレーンベルトコンベヤなどで、高所の倉庫に荷揚げされるようになった。勿論、市内にはバスやトロリーバスが運航されている反面、荷車に曳き綱をつないで５、６人で坂道を登る光景も、至る所で見られた。



前記したように重慶は霧の町でもある。四川盆地のほぼ中央に位置し、周囲が山嶽で囲まれている関係から大気が安定し、輻射熱による霧が屡々発生して霧の日は年間１８０日を数え、視界は５メートルになるという。

４～８月が雨期で９～２月が乾期となつているが、殊に日光を必要とする冬に霧が多く発生し、たまたま太陽

が顔を出すと、これを怪しんで犬が太陽に向かって吠えると云う成語「蜀犬吠日」が生まれたほどである。しかし夏は非常に暑く、「道を歩いていたところ焦げた雀が落ちて来た」という笑い話があるほどだ。武漢、南京と共に中国の「三大火炉」（ストーブ）と称されている。



市内見学

半島部の突端に近い重慶飯店は最高級のホテルで、前には中国人民銀行や重慶市信託投資公司があり、大楼と称する高層建築物が林立して陽の光を映して金色に輝き、嘉陵江の赤い流れは街の緑と調和して、山城の雄大な面貌を写し出していた。

重慶飯店に午後１時半に到着した一行は、２時～３時の間の長い昼食時間で休息し、出発は４時と告げられて時間を持て余してしまった。隴を得てまた蜀を望むという古語（望蜀）のように、見学箇所に足ることを知らない私は隔靴掻痒の心境に陥った。考えて見れば北京時間だが、中国の旅では何時も慢慢的に苛々し、氷炭相容れない国柄の相違は、四角な底に丸い蓋というか「方底円蓋」と諦めるより仕方がないのだ。

重慶市博物館

先ず案内された重慶市博物館は、市区の景観を俯瞰できる枇杷山公園内の南側の一角にあり、眼下に長江が東に流れて街の周囲は緑の山々に囲まれ、美しい山城という感じと、四方は要害で堅固不抜の四塞の国という感じを肌に受けた。

高い石段を登って行くと、中間にある右手の広場に古式の大砲が据え付けてあったが、清朝時代の戦乱中の砲身である。対英戦のためか内乱平定のものかは知る由もなく、更に石段を踏んで漸く館内に入った。

玄関の左側に７千万年前の恐竜の骨格が三頭、完全な姿で保存されて展示されていた。此の博物館のシンボルであり、矢張り大陸は広く素晴らしいと強烈に我が脳裏に印象付けたものだ。私の住む石川県の白山麓に、恐竜の下顎の化石が発見されたと大ニュースとなっているが、日を同じくして語る事は出来ない現実である。

恐竜の奥に「大足石窟」の一部と写真が展示されていた。大足石窟は重慶から車で約３時間半（３７３キロ）ところの大足県にあり、これまで敦煌、雲崗、龍門が中国の三大石窟として知られて来たが、この大足石窟が発見されたのは近年のことである

唐代の後半に造営が始まり北宋、南宋のころが最も盛んで、約千年前後の歴史をもつ仏像もある。龍門のような摩崖仏ではないが大足石窟の数は５万体もあり、四川省は中国第一の石窟や石の壁画のある省で、約１５万体にも上るというると云う。

館の二階は陶器や青銅器が多く、紀元前１１世紀の商代（殷代）から明・清代までのものまで陳列され、宋代のものが最も多いようである。中には巴蜀時代の矢尻もあり、珍しく船棺葬の際に使用された大木棺が私の眼を引き付けた。即ち敗戦後のビルマからの復員船中で、私の部下がマラリアによる脳症に因って病死し、水葬に付した辛い過去を想起したからであった。

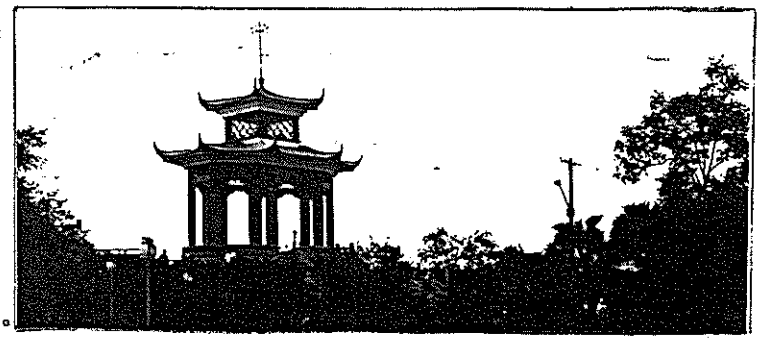
１階の右側は主として陶俑（ハニワ）が展示されていたが、日本の埴輪に比較して数段大きく、西安の秦始皇帝陵の兵馬俑と同じように、大陸には蓋世の気を感じたのであった。約１時間の見学を終えて枇杷山頂に向かう途中に、関羽将軍の銅像が四囲を睥睨する感じで重々しく鎮座していた。

関羽（？～２１９）は蜀の武将で字は雲長と称し、張飛と共に劉備に兄事し、戦功治績ともに顕著であつたが、最後は呉の孫権に謀殺された。のち武運・福禄長寿神として崇拝され、中国各地に関帝廟、老爺廟、武廟（岳飛と合祀）が建立されている。

枇杷山公園は前頁の地図にあるように高台公園となっている。その頂上に建つている六角亭（下の写真）から展望する重慶の全景は素晴らしく、夜になると万家の灯は恰も満天の星の如くに見え、天上から下界を見下ろしている様な幻想にとらわれ、市民が「枇杷山から眺める重慶の夜景は、中国で最も美しい」と自慢するのもうなずけるようだ。

長江と嘉陵江の二つの川は重慶を半月形の半島のような形に挟んで合流し、二匹の巨竜が水上に蜃気楼を載せているように見え、巴山蜀水は天府のような感じに眺められた。六角亭を降りて中国各地から異禽珍獣を集めたという、市民の憩いの場である動物園にバスは移動し、本場の四川省でのパンダに初対面した。

枇杷山に別れを告げて中山路を通過して行くと、瞬間ではあったが重慶市役所が左手に見え、幸いにも好機を捉えてシャッターを切った。実は此の市役所が蔣介石総統の国民党政府の置かれていた場所であり、出征当時の我々の注視の的であつた所である。



重慶飯店に帰館して本場の四川料理に期待した。何分にも四川省は天府の国であって天然の産物は多く、沃野千里、蓄積饒多、地勢形便を天府と云った言葉を思い出して食卓に臨んだものの、戦時中に舌鼓を打った肉山脯林、酒池肉林といったものには、８回の訪中でも出会った事はなく、今夕も亦同じ結果であった。四川料理は麻婆豆腐や小エビの辛味炊めが日本人の口に合い易いと聞いていたが、私の腹中の嚢袋を満足させてはくれなかった。

夕食も終わり、同室の人と夜見世の出ている下町を散策してみたが、何処も同じような中国人相手の薄汚い飲食店ばかりだ。初めてお眼にかかった物の名前や種類を尋ねても、私の中国語はホテルで通用しても重慶の夜見世では、腐り縄に馬をつないだように頼りにならず、成功の望みは全くなくなってしまった。

同室の彼が屋台でビールを注文したところ、ホテルのようにコップはなく、どんぶり茶碗を出して注いだのには呆れて返す言葉もなく、井蛙以って海を語るべからずと云わなければならない事だ。今度は私が帰路、１０元札を出して山栗を求めたところ、怪訝な顔をしたが無理もない事かも知れない。彼等の１ケ月の給料は約４０～６０元に過ぎず、１０元も栗を買う人は開闢以来の思いがけなくやって来た幸福、即ち古語の「母望の福」だったのかも知れない。

ホテルのベッドに仰臥して数分前の事を脳裏に浮かべた。此の浮き世は廻り持ちだ。人間の貴賤、貧富、苦楽は人から人へと移って行って、決して留まってはいない。一人や一家が永久に栄えるという事はなく、勿論、国の場合も例外ではないのである。今日は人の身、明日は我が身、人間万事塞翁が馬であり、人生はあざなえる縄の如しである。中国を愛している私にとっては、彼等夜見世の人たちにも何時かは幸福が招来する事を祈って止まないのであった。

９月２０日

川面から湧き出るのか霧は市街を雲のように覆い、山海数万里も離れた重慶の山城は神秘縹渺とした朝の景観を呈していた。

蜀中山高く霧重し　日を見る時は少なし　日出るに至る毎に　群犬疑ひて之に吠えるなり。これは「蜀犬日に吠ゆ」の詩だが、見識の狭い者が他人の優れた言行に対し、かれこれと言う事にたとえていると考えると、私の胸を衝かれる思いがする。

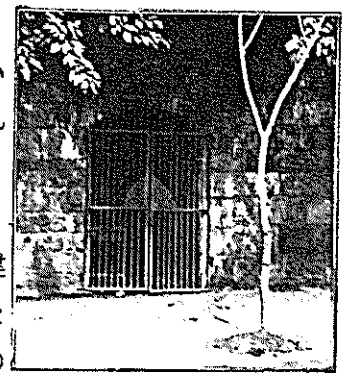
靄々として深山重畳とした厳粛な光景に見惚れていると、霧は我々の旅を慰めている様にも感じられ、今次紀行は霧と水との旅路になるようである。

本日の重慶観光は再び枇杷山を訪れた。園内には花渓河と呼ばれる美しい流れがあり、その中でボートを漕ぐ若者の長閑な姿も散見され、各所に茨竹桃が群生して其の影を流れに映して紅星亭や声楼を引立てていた。

防空壕

昨日も何回となく胸板を圧迫するような感じで防空壕を眺めたが、半島部全般にわたる丘の横腹には今も尚、無数の防空壕が当時のままの完全な形で保存され、市全域が永遠に子孫に伝える生きた戦争博物館のようである。人類に無言の教訓を与える歴然とした歴史の跡は、勿論、会稽の恥をそそぐ積りではないだろうが、今日は熱湯で手を洗うように慌てふためいてシャッターを押した。（下の写真は其の一部）

画家の村



城の堅いこと金の如く、池の熱すること湯の如し、という金城湯池の山城の重慶市内を縦断し、画家の村と云われる洋風の建物の建っている嘉陵江の河岸に着いた。

此の建物は戦時中の国民党の高官の居住した豪邸であり１９４９年に画家の村として開設したものである。三階建の大きな建物が数棟を数え、各個室に一人の画家が雑念を払って黙々と自己の特徴を描き出していた。彼等の無我の境を乱してはと静かに部屋を覗いたが、絵心のない私には判る訳もなく、玄関横の休憩所兼即売場で好みの絵を数枚買い求めて記念とした。

閑静な此処の大庭園もまた奇麗に整備されて、天賦の素質を持つ画家たちの憩いの場に相応しく、十数メートルの断崖の下を流れる赤色の嘉陵江の風致を眺めていると、恰も桃源境の世界の声が聞こえて来る感じさえ覚えるようだ。多分、夜ともなると星が水面に映って、江の水は其の星を流しているのではないだろうか。

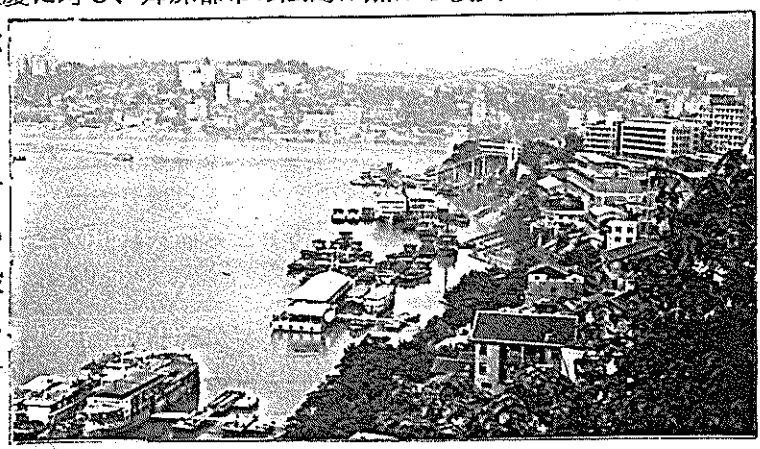
重慶の繁華街

重慶飯店と枇杷山との中間に革命記念碑が聳え建ち、此処を中心にして民権路、民族路、鄒容路などの商店街が碁盤の目のように整然と連なり、今日は晴天の上に日曜日とあって歩行者天国も雑踏を極めていた。戦い止んで平和が招来し、不用になった牛馬を山野に帰した「馬を華山の陽に帰す」という言葉のような感じだが、これは中国戦線に参加した我々しか感じ取れない事かも知れない。

約１時間の自由行動となり、ジャコウウシで知られる四川省の特産である「六神丸」（日本の方が其の名称を真似たのではないだうか）を購入した。旅行中は日本製の高価な六神丸を必ず服用する私にとっては、良い買い物をしたと喜んだ次第である。

朝天門（下の写真は嘉陵江側の埠頭の一部）

繁華街から再び嘉陵江沿岸の滄白路の坂の続く街道を進むと、嘉陵江を渡るケーブルカーの運航しているのが眼に留まった。社稷が廃虚となった中から奮起し、急速に発展を遂げて雄飛した重慶に対し、姉妹都市の広島が無から復興したのと同様に、理屈抜きに慶を重ねて敬意を表したい心境だ。



半島の先端部で長江と嘉陵江との赤い流れの合流点が有名な朝天門であり、両江双方に埠頭が設けられて大楼が群をなし、長江水運の要衝となっている。

長江三峡下りの客船も朝天門から出発しており、我々外国人専用船と中国人用の船とは完全に区別されているのは、中国らしい習慣である。大楼（高層ビル）と共に古い家屋も残した繁華街が周辺に続き、大きな荷物を手にした中国人の乗降客が往来して活気に溢れていた。夏の重慶では夜になると、此の辺りの岸辺は夕涼みの人達で賑うという事であり、記事の一部は７頁に記載した。

重慶長江大橋

昼食の後、長江に沿った開放路を西に向かって走行すると、左手に重慶長江大橋が一直線に江を跨いでいる雄大な光景が展開していた。長江の中瀬となつている珊瑚島は、大橋の無かった蒋介石時代には飛行場として使用したらしく、名前に不相応な赤色をした平坦な島である。片側４車線もある長江大橋を背景にして記念撮影となったが、我々時代の重慶の主人公も今や黄泉の客となってしまった。大きな橋も行き来する車の数は至って少なく、長江の流れのように静寂な感じを与えていた。

橋を眺めていると、論語の「日月逝く、歳、我と与（トモ）ならず」が想い浮かんで来た。戦争が終わって早や４２年を経過し、歴史の流れの速さを此の長江大橋と蒋介石を対象にして振り返って見た時、上記の言葉が痛感されるのであった。光陰は人を待たず、往って再び帰らずだ。

人間は所詮、自然の一部であって、有りの儘に生きれば良く、私はそれを旅に求めており、兵馬倥偬の乱世に生まれた宿命から、老いのわびしさを旅で慰め、ひとしお重慶は１日が１００時間あっても足らないような気がするのであった。

桂　園

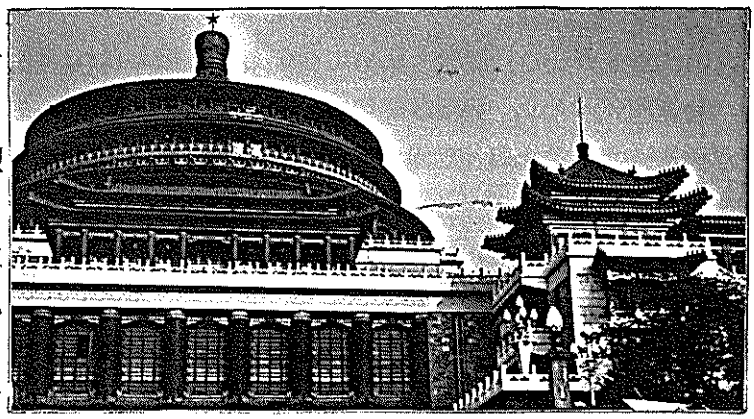
桂の木が玄関の両側に植えられていることから、桂園と呼称されたと云う事である。戦争中は蔣介石の率いる国民党の幹部「張治氏」の私邸であったが、画家の村に比較すれば極く貧弱な建物に過ぎない。しかし戦中を通じて中国共産党の育ての親の一人、周恩来は桂園の近くの周公館に居住し、国民党と接触を保ち交渉を続けていた。

１９４５年８月、日本の敗戦後からこの桂園に於いて、国民党と中国共産党との間で交渉が行われた事で有名であり、四川省政府の重要文化財に指定され、革命遺跡としても名高いようである。

延安から乗り込んだ共産党の毛沢東と国民党の蔣介石総統とが、雲が竜と会い、風と虎が会うように、両党の巨頭が会談した「風雲の会」の談判の場所である。１０月１０日、「国共双方代表会談紀要」が交換され、これによって蔣介石は、表面上は共産党との平和的合作を約束した。一般に双十協定と呼んでいるように記憶している。

見学を許されたのは二階建ての正面玄関のある建物だけだ。左側に中国式の椅子・机を置いた部屋、右側は洋間となっていて、何れも竜虎の会談場としては至って質素である。指呼の間に対決して覇権を争った両雄の心境は、胸に千本の矢が射立つ思いではなかったかと、知能と覇気を想像して桂園を去った。

人民大礼堂（右写真）



嘉陵江大橋から通じている人民路を東に進むと右手に北京の天壇と同型で、其れよりも一回りも大きい絢乱爛豪華な朱塗の建物が天高く聳え、他を睥睨する威容である。中央の天壇式の円型建物は重慶市人民大礼堂として１９５３年に完成し、４０００人を収容できるという。

中国共産党は１９４９年に内線に凱歌を挙げ、蔣介石の本拠地に回天の大業を誇示するように建築したと思うが、其の英姿は斜陽を受けて輝いていた。また両側の建物は人民賓館（ホテル）となっているが、内部が未完成のために明年から営業を開始するという事である。

市民生活と余りにも釣り合わない此の建物から、天下は天下の天下であり、天下は万人のものであって、覇者のものではないとの感想を強く懐いたのであった。

重慶との離別

計画表に記載された通りに実行されることの少ない中国旅行でも、重慶は隔靴掻痒を甚だしく感じた都市である。日程表の筆頭に掲げた南泉公園、北泉公園 は今は温泉の湧出が止まり、温泉の出ない所を訪れても如何なものかと、通訳は説明をしていたが、我々には真実の程は判らない。

南泉公園は市の南方２４キロにあり、飛泉という滝や仙女洞という洞穴などの「南泉十二景」がある。北泉公園は市の北西約５０キロにあって、明・清代に建てられた楼閣や観魚池、鐘乳洞が有名で、温泉を除外して最も期待していた観光地であった。

梅を妻とし鶴を子としたという「梅妻鶴子」の古代中国人の風流の里を案内せず、半島部の中央から東部にかけての狭い地域を、慢々的に時間を浪費した感じしか残らない。また共産党の政権下になって、嘗って中共中央南方局と八路軍の重慶事務所のあった「紅岩村」や、周公館と呼ばれた曽家岩５０号の家を案内しない点も、私には解せない事だ。天下人が変わると此のように下部まで変化するするのだろうか。古代から中国では「英雄人を欺く」という術策を用いたが、未だ踏襲している感じがする。

以上のほかに愁をいえば、若し時間的に余裕が出来れば訪れて見たい「塗山」が長江南岸の地にあった。勿論、この地は初めから無理だとは考えていた所で、中国国際旅行社重慶分社に意見を述べる意志は全くない。

塗山は禹王が此処に諸侯を集めて会同したと伝えられ、禹王の子の「啓」の誕生した「老君洞」があり、眺望は絶佳で山上には老子廟がある。此の附近一帯は山水の景観が佳く、文人墨客の「巴渝十二景」として湖南の「瀟湘八景」と対称して名高い。

突然の乗船

ホテルに帰館すると、本夜も重慶飯店に宿泊の予定が変更になり、夕食後に長江下りの西陵号に乗船する事になったと告げられた。彼等には旅行計画の予定は何処までも予定に過ぎないのだ。小さなことでも疎かにせず信用第一であり、小事は大事だと言わなければならない。

変更になった理由は、乗船した観光船は夜のうちに埠頭を離れて沖に停泊し、明朝出航するからだと云う事だ。我々は「夏の虫が氷を笑う」ような見識の狭い無智な者ではない。無理に「柄のない所に柄をすげる」ような言い訳は理屈に過ぎず、要はホテルの回転を早くして営業成績を上げる事が本音である。

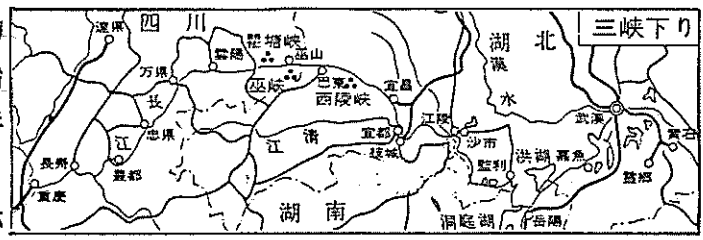
夜９時の乗船が掃除が遅くなったと、埠頭で１時間も待たされて１０時となった。一等船室が１１０室あって、我々以外の日本人ツアーは香港経由の一組だけで、他は総て欧米人であり、約２０００トン級の船内は日本のフエリーよりも数段劣悪である。

長江と三峡下りの概要

長江の水源は青海・チベットの境界沿いに源を発し、全長６３８０キロの中国第一の河川で、世界第二の大河である。中国全土の約２０％を占める広大な流域面積を有し、長・短の支流７００以上が合流している。気候は亜熱帯季節風帯に属して夏期の雨量が多いものの、中・下流には湖沼群があって洪水の調節をなし、水運の便を加えて「南船北馬」の語が昔から定着している。

流域のうち約６６％が山地、約２４％が丘陵地帯、残りの１０％が平野と湖沼で、１０に跨る省・自治区・市を経て上海で東支那海に注いでいる。長江は長いばかりでなく、古来から流域に住む人達を育み、幾千年の輝かしい文化と悠久の歴史を創造して来た。また言い尽くせない物語を秘めている事は我々を楽しませている。

長江は四川省の宜賓（岷江との合流点）までを金沙江と称し、それより下流を長江と呼び、四本の大支流をを合流して三峡に流れ込んでいる。北の黄河が母なる河なら南の長江も優しい母の河であり、古代から天府と云われた豊かな流域を育てて来た。



重慶から長江を下ること約１５００キロ、武漢までの船旅を一般に長江三峡下りと呼び、私が戦陣に在った頃から耳にした「三峡の険」の名称は、脳中に深く刻まれていた憧れの峡谷であった。（上図は三峡下りの要図）

四川の重慶から湖北の宜昌に至る間は、両岸が特に迫って江流は激しく、三峡の険と呼称したと云う。其の間には６０余ケ所の灘があり、古書によると瞿唐峡、巫山大峡、巴峡、柿帰峡、黄牛峡、宜昌峡の六大峡に大別されると記載されている。しかし其の何れを三峡と云うかは古来から定説がなく、今日でも諸説があるようだが、現在は瞿唐・巫山・西陵の三峡の名で有名である。

四川と湖北の省境に聳える巫山山脈を、長江の激流が穿って造った三つの大峡谷の総称が三峡である。三峡の北端の白帝城から湖南省の南津関までの全長１９８キロは、両岸の風景は千変万化、さながら天然の画廊を思わせる船旅であり、世界的に名高い。

長江の流水は逆巻きながら瞿唐峡（全長８キロ、川幅１００メートル）になだれ込むと、両岸の絶壁は門のように切り立ち、峰は天に連なり舟は地底を行くと形容したい景観である。

船はやがて美しい巫峡に入って行く。全長４０キロの両岸には２０００メートル級

の峰々が連なり、曲がりくねり、瞿唐峡より緩やかな流れを進むと突然高い山にぶつかる。「岩出て道無しと疑う、雲開けば別に天有るを」と誰かが詠んだ表現の通りだ。船客は甲板に出て奇峰怪石の連なる巫山１２峰を眺望して、楽しめる峡谷である。

巫峡を去ってゆっくりと香渓を過ぎると、全長約７０キロの三峡最後の西陵峡となり、此処には故事来歴の多い変化に富んだ大小の峡谷が続いている。天に突き出した剣と、積み重なった書物のような絶壁の「兵書宝剣峡」は、諸葛亮孔明が北伐の折りに残した宝剣と兵書だと云われている。また途中通過する秭帰は愛国詩人の屈原の故郷である。西陵峡には昔は険難の暗礁が多く、青灘には落差８メートルの急流が三ケ所もあり、下る船は矢の如く、上る船は梯子をあがるようだと古書に記載されていたが、現在は灘の岩礁を爆破して其の面影も見られない。

三峡を出た長江は手綱をとかれた馬の様にのんびりと、湖北・湖南平野を流れ、岳陽では洞庭湖の水を、九江では鄱陽湖の水を受け、武漢、南京、鎮江を経て上海の北を通って大海に注いでいる。

以上は三峡の概要を記したが、重慶から宜昌までの間に灘と呼ばれる箇所が６０余もあり、昔は遡航する民船は７、８０人から３００人に近い曳夫を使い、エイエイの掛け声をあげ、急灘にかかると銅羅や太鼓を打ち鳴らして曳夫を鼓舞し、その声が山峡に響いて人力と自然の抗争を思わせ、天下の奇観を呈していたと云う。

民船は多く１０月以降３月までの減水期には約１ケ月を要して遡航し、増水期には江水の流れが速く、各所に大渦流や大激湍（早瀬のこと）が生じ、且つ曳夫の通る道が水に没してしまう為に民船の遡航は極めて少なく、重慶～宜昌間に２ケ月を要したと云う。

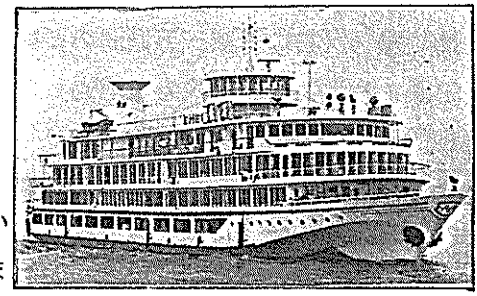
然しながら流れて行く月日は百代永久ではなく、万水千山の航路も今や変わり果て、三峡の船旅も普通は３泊４日の旅となったようである。（吾われは武漢まで５泊６日の船旅であった）

私の長江下りの体験から述べると、長江、其処を訪れる人は名勝古跡を想い、去る人は其の山色水光に後ろ髪を引かれる憶いをされる筈だ。重慶から流れを下ると水上に浮かぶ小舟や、ここかしこに飛び交う水鳥の群れも美しく、沿岸の丘は緑に覆われ、黄昏になると江上の航路標識の紅灯と共に、あやしく照り映える波間の明暗は真珠の輝きにも似ているようだ。

更に魅力あふれる三峡は、神話の世界に誘われるようで、一幅の墨絵の中に佇む人のような、夢幻の詩情にひたる感がするのであった。

9月21日

長江の船旅



長江下りの景観の優れた山河襟帯に期待をかけ、華胥の夢を見ながら早朝の５時に目を覚ました。長江の流れは黄河のように赤く濁り、春秋に富んだ若輩の身でありながら、河南省は中牟県城の橋頭堡死守の重責を背負い、背水の陣を布いて孤軍奮闘しながら、黄河の大自然の水にも苦労した戦闘を想起させくれた。（上は乗船した西陵号）

埠頭には西陵号のほかに他の１隻が接岸しており、昨夜の通訳の言は化けの皮を剥がされた。しかし百川の長である揚子江下りに発つ我々は、今さら何も言う意思はなく、胸中は光風斉月と形容する様に清々としていた。

時間が経過しても朝天門は霧に覆われて旭日の強い光は照らされず、川風の肌寒さを感じながら巴蜀の国の風情を味わっていた。漸く東の空は白ばんで来たものの、江流の濁流も泥水とは見えず、鈍く光る川面には渦が巻き、「美なるかな水、洋々乎たり」と人生の浮沈変転を詠んだ孔子の詩を思い出していた。

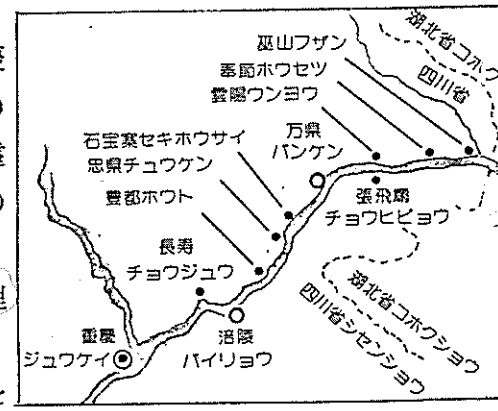
サロンは外国人専用として使用され、久しぶりに持参した海苔と味噌汁で朝食を味ひながら江上に眼をやると、船舶の航行が目立ち始めたものの、大陸的の風景は流暢な長閑さである。入口に掲載されていた西陵号の全長は６８、４５メートル。吃水は８メートル。航速は３０キロ。２年前に建造した国営船で、中国国際旅行社長江分社が経営する２０００トンの客船であり、１１隻中の１隻である。

年間２００日余りも霧が発生し、今朝も其の為に出発が遅れて漸く９時５０分に岸壁を離れた。甲板上からは美しい朝、美しい景観、これを褒める賞心、これを楽しむ心の「四美」は、残念ながら叶わず、総てが薄ぼんやりとしていた。

長江を下ること約１時間を経過する頃から、霧は神秘なように晴れ上がり、重慶市の東端の丘陵の斜面には、一条の白糸の滝がくつきりと網膜に映り、凄寥の気を帯びたように我々を見送っていた。

「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」と云うが、船中の人は甲板に上って広く四方の事を見、四方の人に聞き、自分の知識を博めたいと、「四目を明らかにして四総を達す」と形容するような眼光である。勿論、私も人後に落ちずに四方の志を抱き、鉛筆とメモ帳を手にし、カメラを首に吊るし、地図を見ながら現地の確認に三面六臂の活躍開始だ。これも戦塵に曝されて習い性となったのかも知れない。

長　寿　（右は重慶～万県間の要図）



午後１時半頃に船は長寿を通過した。重慶から７６キロの地に在り、３０００年以上の歴史を持つ古い町にも、現在では大楼も望遠され、５００メートルほどの河幅の流線部の本流は逆巻いていた。

昔は楽温と呼んでいたが、長寿と変名した理由に次ぎのような話が伝えられている。

明朝の宰相であった戴渠亨が、或日ここを通りかかると、一天俄かにかき曇り或る店先を借りて雨宿りをしていた。この時、７、８０歳位の老人が誕生祝の品を買いに来ていた。そばにいた知人が誰の祝かと老人に質ねたところ、祖父の祝いだと答えたので宰相は驚いた。彼が７、８０歳位だから祖父は幾歳かと質ねると、今日丁度１５０歳になったと答え、その時３０歳位の孫が傘を持って迎えに来た。

雨も止み、戴渠亨は祝の品を持って老人の家を訪ねた。戴がどんな身分か判らなかったが、礼を知り書を読む人物と見て、記念に一書を求めたところ、彼は墨痕淋漓大きな字で「花眼偶文」の四文字を書いて与えた。しかし一同は其の意味が判らず、彼に解釈を求めた。四文字は詩四句の頭文字なので、詩の全部を書いたのである。

花甲両輪半　　眼観七代孫　　偶遇風雨阻　　文星拝寿星

中国では還暦を花甲といい、６０歳のことを一輪いうので、第一句はこの家の主人を指す（両輪半で１５０歳）。二句以下は７代にわたる孫達、たまたま風雨に阻まれた文星（戴のこと）が、寿里（此の家の主人）を拝すという意味と思われる。

書き終って「天子門生門生天子戴渠亨題」と署名したので、彼が宰相であり、皇帝の太師と知ったという。戴は此処に長寿の者が多いから長寿と改名させたという事だ。

長寿は山に寄り水に臨み、昔から小山城とも呼ばれ、河畔の市街と山上の県城とはケーブルカーで繋がれ、大化学工場や獅子灘ダムもあり、山紫水明な所と云う。

涪　陵

長江の南岸で烏江との合流点に在り、四川東部と貴州北部の水上交通の咽喉部である。２０００年以上の前は巴国の政治の中心地であり、祖陵のある所でもある。秦代には枳（き）県を置き、隋代には涪陵県と、元代には涪州と称し、１９１３年に涪陵と改名され、産物も豊富で主要な産物には食糧、桐油、生漆、茶、漢方薬の原料がある。

また此処の人達は万里の長征にも参加し、近代革命史上に名を残していると云う。

涪陵も名所古跡の多い所である。長江・烏江の合流点から１キロ上流の長江の中にある巨大な岩礁を白鶴梁と呼び、此の石の側面には１４匹の石魚が彫刻されている。その内三つは水文観測に使用したもので、古代水文観測の基地だったと認められている。これらの石魚は極端に水が渇れた時に水面に現われ、数年或は数十年に一度しか見られない。この他に此の石の表面には唐・宋・元・明・清の歴代にわたる１６４行の文字が刻まれている。これらの文字は１２００年間に７２回も水の涸れた史実を語り、貴重な水文考古学上の資料として文化・芸術の遺跡である。水底碑林と呼ぶ物だ。

涪陵から長江を隔てて向う側にある北山の山腹に人工で造った洞窟があり、これが古来北岩と称される有名な「点易洞」である。宋代の程朱理学の創始者である程頤が左遷されて此処に棲んだ時、この洞の中で易経の校注をして理学を教えたと云われる。

１９７２年、涪陵の小田渓で戦国時代の巴族の墓３つが発掘され、其の中でも金の編鐘（金で編んだ鐘）や銀の獣頭の飾り物、２匹の竜をすかし彫りした銅鏡などは貴重な物であり、巴族の歴史と文化の研究に重要な資料となっている。

此の辺の長江の河幅は５００メートル以上と広く、肉眼では明瞭に眺望する事は許さず、写真も鮮明ではないが、長寿に比較して市街には高層建築も林立して大きいようだ。船客達には流れる江の水の音と明日の三峡下りだけが船旅を慰めている様に感じたが、私にとっては貴重な歴史の地であり、眼を朦朧とさせている訳にはいかない。

豊　都（右は豊都港）

古い伝説によると人は死だ後、その霊魂は豊都にある鬼城に来ると云われて来た。勿論、立証できる人はおらない訳だが、豊都の辺では信じられて来た。この豊都は重慶から下ること１７２キロの左岸に在り、古い歴史を持つ四川東部の古城である。隋代に「豊穏堰」という堰が造られ、附近に「平都山」という山がある事から、頭文字をとって豊都と名付けたと云う事である。

鬼城という名前の由来は次ぎの通りだ。漢代の頃、平都山に「陰長生と王方平」という名前の二人が住んでいた。人々は此の二人の名前の頭文字を合わせて「平都山に陰王が住む」という事になってしまった。

日本では良い人が死ぬと天国に、悪い人が死ぬと地獄に行くと信じられているが、中国でも同じである。しかし古代中国では死後の世界を「陰間」といい、生の世界を「陽間」と呼んで、各々陰王と人王が統べると云う思想があったようである。

従って陰王の棲む所は鬼城と呼ばれるようになり、唐代以後、歴代にわたって此の山に廟宇が建立され、現在数十ケ所に点在し、廟内には多くの塑像があり、其の姿も様々で幽鬼・神鬼いろいろと精巧を極めて生動感が溢れているそうである。

忠　県

入江に細長い岩礁が突出した寒村の様だが、秦代には巴郡、漢代には臨江県、明代には忠州となり、１９１３年から忠県と改称された古い歴史の漂う街である。

忠州という地名の由来には二つの故事が伝えられている。歴史書の記載によると、古代巴国の将軍「巴曼子」の故郷である。周代末期、巴国に内乱が起り巴曼子は内乱を鎮圧する為に楚国から兵を借り、内乱鎮定後は三つの城を割譲すると約束した。楚国は兵力を貸して内乱を平定し、三城を受取るために使節が巴国を訪れた。

巴曼子は「内乱は楚国の力で平定できたが、三城は譲る事はできない。私の首級をもって楚王へのお礼とされたい」と言い終わるや自分の首を刎ねた。曼子の首を持ち帰った使者に対して楚王は「曼子のような忠臣が得られるなら、城を得るよりも価値があった」と落涙し、手厚く葬らせたということである。

もう一つの物語は三国時代の頃である。西蜀の勇将・顔厳は忠州出身で巴郡の鎮守をしていたが、劉備の部下の張飛将軍に捕らえられた。屈伏しない顔厳に対して張飛は「何故降伏しないか」と尋ねた。顔厳は首を持ち上げて「吾が州には首を執られても敵に降伏する者はいない」と答え、張飛は益々怒って顔厳の首を執れと命じた。

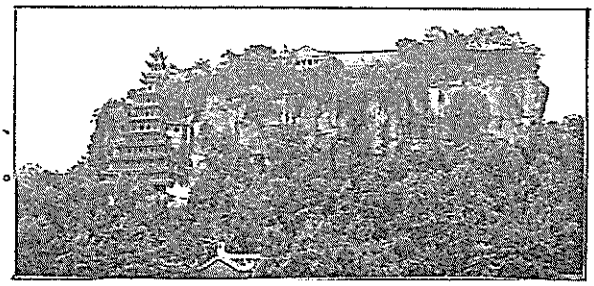
それを聞いた顔厳は「早く殺せ、何故それ程激昂されるか」と冷静であり、張飛はこれを見てかんげきし、其の忠烈を賞賛して縄を解き上賓として遇したと云う事だ。

巴曼子と顔厳の二人が忠州の人であったから、明代以降、忠州と名付けられ、現在、県城の東に顔厳の墓碑が残っているが、他にも多くの古跡がある

屈原塔、宝子塔、白公祠、四賢堂、太宝祠などで、四賢堂は唐代の詩人・白居易らが此処に集って詩を詠い、酒をくみ交わしたのを記念して建てたものである。太宝祠は抗清の女将軍・秦良玉を記念して建立した。秦良玉は忠州の人で、彼女は夫が宦官に殺された後、自ら夫の石柱宣撫使の職務を代行して清軍と戦った。彼女は総兵官に任ぜられた後は、南に蜀の乱を平定して北では清軍に抵抗し、戦えば必ず勝という状況であり、南征北戦に赫々たる戦果を挙げたので明代女性の最高の官職である夫人・太子・太保を歴任し、忠貞侯に封じられたのである。

現在の忠県は山に寄る気宇壮大な街で、周囲は竹林特有の淡緑と木々の濃緑が入り乱れて非常に美しく、特に忠県八景は風光に優れている。、特産の竹製の工芸品は精巧であり、忠県豆腐乳も味の良さで全国的に珍重されているようだ。

石宝寨（右の写真）



山陰に夕陽を送ったころ突然、陽を背にして鶴が鶏群に立つているように、自然の城塞が聳えているのに感動した。長江の死命を制して睥睨しているような威容が、本日の圧巻である石宝寨であった。石宝寨は河原から、いきなり５０メートル余りもの高さの切り立った断崖の孤立した岩山であり、清朝の初期に「蘭若殿」が断崖の頂上に建てられた。清の嘉慶の頃、崖に１１層の木造の塔が造られ、これによって上まで登攀できるようになった。其の中に地元の歴史的人物の立像や文物が陳列されていると聞いている。

巍然巨石如懸峨　壁立岸峭高万丈　四面無路可攀援　層楼飛閣梯雲上

これは古人が石宝寨の奇観異景を詠ったものであり、忠県から東に４５キロの長江の北岸にある。古寨孤峰の四面は削り取られたように切り立ち、其の形は皇帝の使う玉璽のようだから「玉印山」と名付けた。清代の詩人は次ぎのように詠んでいる。

孑孑玉印山　屹立江水東　天作百丈台　秀削疑人工（孑孑は孤独に立つ形容）

石宝寨には美しい物語が伝えられ、中でも「石宝姑娘」が最も知られている。

昔この辺は松柏が青々と茂り、地上は緑の敷物を敷いたようで、泉は玉の雫を吐き出すように、鶴は飛び蝶は舞う美しい所であった。この山には鏡のような池があり、其処に天女のような美しい娘が住んでいたが、この娘は藤蔓をたどりながら山を登り谷を下って薬草を集め、附近の人々の病気を治療していた。しかし村人達は彼女の生い立ちや、名前も判らず、彼女をいとおしくおもい、「石宝姑娘」と呼んでいた。

ところが、山の裏に腹黒い地主の「牛魔王」が住んでおり、一度彼女を見てからは自分の妻にしようと、部下を引き連れて石宝寨にやって来た。これを聞いた村人達は娘の救援に来たが、牛魔王の手下の勢力が強く、どうにもならない。

娘は藤蔓をつたって寨上に逃げたが、牛魔王もまた藤蔓をつたって追いかけ、娘に追い着きそうになった時、娘は一粒の赤い木の実を牛魔王に投げたところ、赤い木の実は火となって牛魔王の握った藤蔓を焼き、王は火達磨となって焼け死んでしまった。しかし寨上の娘も藤蔓が焼けて降りることが出来ず、人々は騒ぐだけであった。

此の時、一人の青年が「山に沿って家を造り順々に楼を建てれば寨上に登れる」と提案した。青年は腕の良い大工で村人達は彼の指図通りに昼夜兼行の工事をして、７日７夜で１１層の楼屋が完成し、大工の青年と石宝姑娘は結婚したが娘は村人の治療を続けた。以上が１１層の石宝寨のできた由来だという。

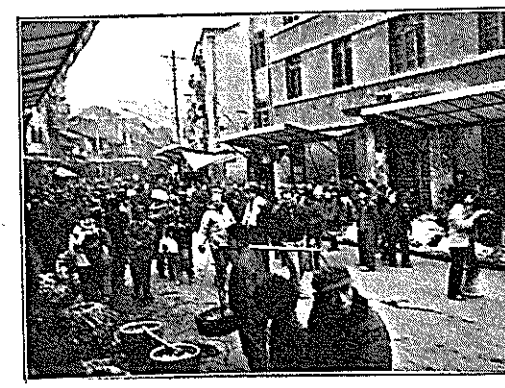
石宝寨には次ぎのような話も伝わっている。昔、石宝寨の廟内に米の出て来る小さな石の孔があった。此の石の孔から毎日少しずつの米が出て来て、廟内の坊さん達の食べる量と一致していた。客があると其の分だけ量も増えて出てきた。しかし決してあり余る程の量は出て来ない。

一人の坊さんが考えた。石の孔を大きくすれば沢山出て来る筈だ。そして余る程米が出て来れば金持ちになれる。坊さんは金槌で孔を大きくしたところ、それ以降米は一粒も出て来なくなったと云う。米の出て来る間、この石を石宝と呼んでいたので、今も石宝寨と呼んでいるが、現在は石宝姑娘も米の出て来る石宝洞もない。

岩頂には清代に建てた蘭若殿という廟宇があり、それを望眺すると羽化登仙の絢爛豪華さを誇っていた。左手にある岸壁上の１１層の楼屋は１６０年の風雨にもめげず、巍峨とした風貌は敦煌の大仏殿に似て、一瞥壮観というべき塔楼である。

勿論、遊覧船のような大型船の接岸は出来ないが、羊腸のように小径が通じている。想像を逞くすると、寨頂からは遥かな青々とした群山が望まれ、長江を俯瞰すると帆舟は流れを争い、江山の景勝は詩意を誘って旅愁をゆさぶるのではなかろうか。

万　県（右は市内風景）



名所古跡に富んだ過ぎ去った江辺の地は、ありのままの自然を楽しむ楽土の感じを我々に与え、「無何有の郷」とはこの姿ではないだろうか。千里の遠くまでも同じような風が吹き、世上の煩わしい心労を忘れて、江上は太平を満喫できる忘機の世界のようである。

今日の投錨地である万県の埠頭に接岸した時は、東の間の残照が江上を染めていた陽光も消え去り、船の灯だけが寂寥な夜空を照らしていた。夕食に飽食したのち市内観光のために下船すると、重慶とは比較にならない程の急坂の町だ。長江沿岸は増水期を迎えると、大きな落差のある高台でなければ街は形成出来ない為であろう。

台上にはバスが待機して一行を待ち受け、人口３１万の中心市街（約１１万）の見学に出発したが、四川の田舎町が此のように灯が煌々としていたのには驚かされた。先ずシルクの織物工場に案内されたが、北陸の私の地方は織物の大産地であって興味はない。しかし小さな此の町にも中国国際旅行社があり、日本語通訳が駐在する事の方が余程、私の大脳に印象を与えた。続いて有名な夜店の観光となつた。白いペノキで漢字を書いた黒い石を売る露天商が最も多く、外人観光客相手の店である。次ぎに

多いのは竹製品の店で、矢張りパンダの里である四川は竹の本場だ。

「一葉落ちて天下の秋を知る」という句は誰でも知っている言葉だが、これの発祥の地は此の万県の沿岸であり、有名な桐油の大産地でもある。「一葉」とは「油桐」のことで、桐の葉の散るのが最も早いことから此の句が生まれたと云う。

万県は漢代以前は万州と呼ばれ、後漢の代には南浦県と称し、清代に入って万県と改名した。此の街は水路の要衝であり、重要物資の集散地として発展して「川東門戸」といわれ、二千年以上の歴史を持つ古城市である。

西北にある天城山は巍峨として四囲の岩峭は壮観であり、天に到るかと思うような一本の道が細々と続き、「天城倚空」の賛辞が付けられいるばかりか、三国時代には劉備が軍を駐屯させたから「天子城」とも称されている。

西山にある緑樹に映える古刹は、唐代の詩人・李白が此処に住んだことから「太白岩」の名前が付けられ、「大酔太白一局棋」の詩も此処で作られたと言われている。

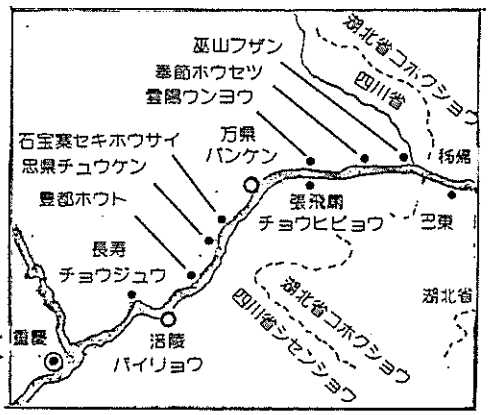
万県にはまた革命の歴史がある。１９２１年、ここでは大きな農民の武装蜂起が生じた。次ぎに１９２６年、英国人によって自分達の木船を沈められた人達は、これに抗議して断固英国船を押収した。このため英国海軍は万県を砲撃して１０００人以上を殺戮した「万県惨害」という事件があり、之は歴史に残る有名な事件である。

埠頭に接岸して碇泊する西陵号は今夜も我々の逆旅となり、これから未だ４日間、瓢箪の川流れのように浮き浮きとして長江下りを楽しむ船客は、同舟相救って仙境に向かうことを祝して、夜遅くまで盛んに羽觴を飛ばしていた。しかし下戸の私は「月白く風清し、此の良夜を如何せん」と思うばかりであった。

９月２２日

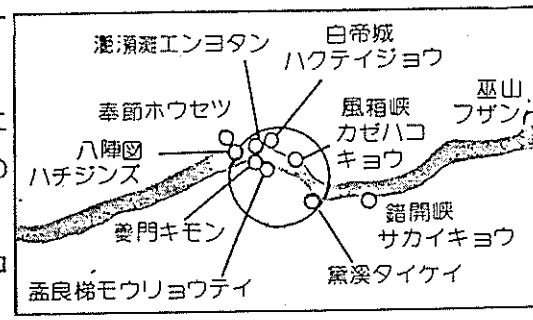
三　峡　下　り

瞿唐峡



万県を早朝の５時に出発したが、四川省の東端ともなると「蜀犬吠日」を象徴する霧は全くなく、天空は晴れ上がって一点の雲も見えず、雑念を払拭したかのよう静かに澄み、大楼の群立する万県市街は指顧の間に見えた。瞿唐峡は三峡の中でも最も峻険であり、両側の懸崖は剣で削り取ったような岩肌を現わし、天に届かんばかりに聳え立ち、

川は其の狭間を波立ちうねりながら奔走すると云う。（前頁及び右は瞿唐峡の要図）



三峡の西端である瞿唐峡は夔門の下流にある白帝城下の　灘　瀬　灘から、黛溪の峡門口に至る間を云い、黒石灘、孟良梯、風箱峡などは此の間に在り、全長は８キロ川幅は約１００メートルの急流である。

漸く長江下りは佳境に入ったのか両岸は接近し、雲も山も限りなく続いて雲山漫々という景観だ。江水は滔々として流れているが、四境には何の音も聞こえず、騒然とした俗界に居る人間も、時には此の様な閑適の幽情を味うべきであろう。

雲　陽（前頁の要図参照）

渺々たる予が懐い、美人を天の一方に望む、と蘇東坡の詠んだ心境で、頑迷までに壮大美麗な風致を楽しんでいた時、白壁の廟堂が見えて来た。雲陽の張飛廟だ。

雲陽は万県から６４キロの下流の北岸に在り、北は雲安鎮、南は張飛廟に望み絵のように美しい眺望である。昔から中国では、川の北側を陽、南側を陰と呼んだ関係から雲陽と名付けたのではないだろうか。

雲陽はまた唐代の詩人・杜甫の事蹟でも知られている。杜甫は蜀都の一長官であったが、唐の太宗の７６５年に夔州太守に左遷されて、「去蜀詩」一首を残し、その年の五月、家族と共に成都から東への赴任の旅を続けたが雲陽で病に倒れ、張飛廟の東側にある水閣で養生しながら悠々自適の生活を送り、翌春ようやく夔州に着任した。

杜甫が雲陽に滞在中作った詩は非常に多く、其の一首は次ぎのようである。

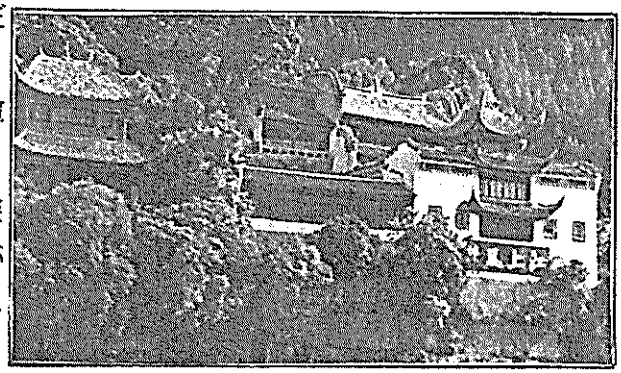
帆を収めて急水を下り　幔を巻いて回灘を逐う　江水戎々として暗く　山雲淪々として寒し　荒林径ね入る無く　独鳥人の看るを怪しむ　己に泊す城楼の底　何曽　夜色闌なり　〔この詩は７６５年秋、忠県から下って雲安（雲陽）に入る時の作である〕

張　飛　廟

張飛（１６６～２２１）は蜀の武将で字は益徳といい、関羽と共に劉備に仕えて魏・呉と戦い、勇猛は万人に匹敵したと云う。上記した此の廟は長江の南岸にあり、翠緑の滴るような樹林に囲まれた山の中腹に、あでやかな瑠璃瓦の塀や、金色燦爛と輝く殿宇が建立され、巴蜀一の景勝地と云われている。（次頁の写真）

この廟は約１７００年ほど前の人達が、蜀の名将・張飛を記念して建てたもので、土地の人々の語り伝える話では、張飛は二人の叛将によって殺され、その首は長江に捨てられたが、流れ流れて雲陽に来た時、一人の老漁師に拾われたのを土地の人々が

手厚く葬ったのが此の廟の始まりだと言われている。（右は張飛廟）



山に寄りかかるように建つた雄渾な感じのする廟の前面の石壁には、清代末期の有名な書画家である彭聚星が書いた「江上風清」の四文字が刻まれており、肉眼でも鮮明に読み取ることが出来た。

現存する張飛廟は宋・明・清代に建てたものばかりで、宋代以降の建築美術の粋を集め、中国古代建築の研究にも価値の高いものだという。また廟内には多くの書画、石碑、摩崖石刻、楽器、剣類等が保存され、歴史及び芸術的にも価値があるらしい。

廟の中央の石壁には、清代の庚午年間に洪水になった水位を示す刻みがある。また廟の東側の川岸にある龍脊石にも、北宋の１０８８年以降に刻まれた水位の記録が１７０ケ所以上あり、これらは長江水文考古学の貴重な資料となっている。

奉　節

張飛廟は上陸して是非とも参観したいところであった。此処を過ぎると長江の川幅は急激に狭くなり、漸く絶壁の続く懸崖の山間から、雲に遮られていた陽の光が、一瞬ながら峡谷の江上を照らす影は、恰も龍の昇るような感動を与えた。

山は人面より起るというか、両岸の山の断崖は我が顔の直前に聳え、三峡一の豪快な景観が咄々として迫り、我が眼は応接に暇がないほどである。

群峰連綿と集まり奇巌屹立する瞿唐峡の入口に、秀麗な一つの山城がある。それが古い歴史を秘めた街、奉節県城である。その風光山水も壮麗な美しさに湛え、古蹟も多く、瞿唐峡の内外でも評判の高い白帝城は奉節県内にある。

古い此の街は、西周や春秋の時代には夔子国の国都となり、戦国時代には楚国の属地とされ、漢代になって魚腹県と称した。公孫述（白帝城の項で説明）が四川に割拠した時、ここを白帝と改称した。三国時代蜀の２２２年、劉備は呉の孫権に敗れて白帝城に閉じ籠った時、白帝から永安県に改称され、唐の貞観時代の６４９年に再び奉節となった。しかし唐代以降現在まで奉節の名が続いた訳ではなく、夔州府が置かれて夔州とか夔府と呼んだ時代もあった。

船上から見えている江畔の石段を登ると、古びた堅牢な県城の城門があり、更に歩を進めると劉備の永安宮跡があるという。波瀾万丈の三国時代の群雄の姿が彷彿として浮び、此の宮跡の何処かで劉備玄徳はは臨終の身を横たえ、息子「阿斗」のことを

諸葛孔明にくれぐれも頼んだ筈である。永安宮の裏には劉備の妻の甘夫人の墓が現存し、訪れなくとも旗鼓の間に敵味方が相見えるような雰囲気に陥り、１７００年以前の世界に在るような気持に誘われてしまった。

杜甫が詩を作ったという草堂寺も奉節にある。彼は２年余りここで過ごして４３０首以上の詩を作り、創作活動の最も豊富な時期であったのである。

奉節や次ぎの八陣図は峡谷が迫って陽が当らず、残念ながら写真の掲載はできない。

八　陣　図

瞿唐峡の激流を漕ぐ小舟は剃刀の刃を渡るような危険を冒し、我々の観光船の一波は万波となって押し寄せていた。船内放送は八陣図の地を通過することを告げ、急いで甲板に出て見ると急流懸河というか、物凄い早瀬は別世界に来た感じであった。

伝説の中の八陣図は奉節県の東約１キロの長江の岸辺、梅渓河の出口にあたり、ここは自然にできた長さ１０００メートル余り、幅数百メートルの砂浜にあり、所謂、水八陣と呼ばれるものである。しかし良く観察すると砂浜はあるものの、上記ほどの規模があるか否かは甚だ疑問であった。

古書によると「奉節県の南２里（中国の１里は約５００メートル）の地に、諸葛孔明が四川に入る時に石塁を築き、蜀軍の陣営とした。縦横八つづつの八八、六十四塁であり、別に遊撃兵用の塁２４を築き高さ５尺、長さ９尺、巾６尺とした」と記録されている。また史書の述べるところでは、２１２年蜀の丞相・諸葛亮は張飛らと兵を率いて、長江を遡って四川に入った。２２３年には白帝城で劉備から息子「阿斗」の事を頼むとの遺詔を受けたが、この２回とも奉節の地を踏んでいる。従って其の時、諸葛亮孔明は此の江岸の砂浜の上に八陣図を作り、兵士達の戦闘演習を指示したことも考えられる。

言い伝えによると、劉備が孫権の呉を討つべく東征し、戦い敗れて白帝城に退く時、幸いにして軍師・諸葛亮は、この地に早く着いたので此の地に八陣図の陣を布いた。呉の将軍・陸遜は此の作戦にひっかかり、兵は慌て、軍馬は乱れ、策を失い、危うく命を落としそうになったという。しかし陸遜は此処に兵を進めた証拠はないようだ。

他の伝説では、呉の陸遜はここに近ずくや、先頭に立つて馬を進めていた彼は、急に手綱を引いて馬を止め、敵兵の影はないが幾万の敵軍がひそんでいる殺気を覚えた。

それは岸辺一円に百余の巨大な岩石がころがっていたからだ。土地の人に尋ねると昔から其の岩石はなく、「諸葛孔明が益州（四川のこと）に入る時、石を運んで其処に置いた」と答えた。

陸遜は数騎を連れて其の石陣の中に入って行った。石と石との間が狭くなったり、

広くなったりして、進むうちに出口が判らなくなった。凡そ半刻近くもぐるぐると、奇怪な形の巨石の中を廻っているうちに、陸遜は不安になって来た。

「さては孔明に計られたか」と一瞬、顔面が蒼白になった。その時、巨石の蔭から杖をついた白髪の老人が姿を現わし、「お迷いかな、将軍」と声を掛けた。「何者だお主は」と陸遜が叫ぶと、「自分は諸葛亮孔明の舅である」と答え、次の様に述べた。

孔明が四川に入るに当って此の石陣を布き「八陣図」と名付けた。すべて遁甲の術によって休・生・傷・杜・景・死・驚・開の八門があり、その日の天候により江の水が流れ込み、或は流れ出て、砂を積み重ねては又崩し、変化極まりのない状態となる。孔明は私に向かい、何れの日にか、蜀を侵さんとする敵将が迷い込む時があろうか。捨てて置けば遂に出られずに江に溺れるであろう、と申していた。

将軍は死門から入られたので出られないのだ。然し乍ら老人は「江に溺れるのを見捨てられない」と出口に案内した。

本陣に戻った陸遜は「孔明こそ千年に一人の臥竜である。自分などの到底及ぶところではない。蜀を襲えば我が呉軍は孔明の神算鬼謀の前に大敗するだろう」と云って引き上げを命じたと云う。

以上のように八陣図の名は千載に伝えられているが、これは軍を良く指揮した諸葛亮孔明の軍事才能を、人々が称賛した結果に他ならないのではないだろうか。

灩 澦 灘

北斗七星の折れ曲ったように斗折蛇行する峡流は巫山山脈を横切り、千流百川を集めて滔々として流れている。峡中の急流は逆巻き浪音は雷鳴の如く、怪石は重なって天を隠し日を蔽い、山は雲に入るように懸岩対峙する絶景は、立体感の溢れる絢爛多彩な絵である、と賛辞を贈りたい心境である。

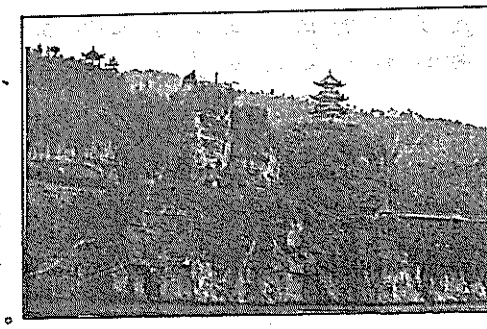
瀧門峡（２４頁参照）の入口には昔から 灩 澦 堆と呼ばれる巨大な岩礁があった。長さ約３０メートル、幅約２０メートル、高さ約４０メートルの巨岩だ

冬から春にかれての渇水期には、猛獣のように川面に現われて江を遮り、夏・秋の洪水期には、蛟竜のように水底に潜んで千重の激泡を飛ばし、怒濤は百雷のようであったと、戦前の中国の書に記載されていた。

しかし船にとっては最大の難関であり、此処に来た船は弦を離れた矢のような勢いで通り抜け、一寸岩礁に触れると沈没の危険に見舞われた。今日まで此処で遭難した船の数は数えきれず、三峡の通航の一大難所となっていた。

１９５９年、この巨岩の爆破に成功し、我々が滞りなく航行するように川底も深くなり、灩 澦 堆も過去の物語となってしまった。

白　帝　城（右は全景）



峡谷は雄偉嵯峨の呈をなして峻険さに満ち、山勢は今にも落ちんばかりである。江水は滔々と流れて谷を穿ち、万馬が奔騰するように当るべからざる勢いで流れている。我々の乗船は其の間の絶壁を仰いで激濤を見下し、恰も峰と天が相接し船は地窟を行くようである。

北岸に暗い濃緑色の白帝山が見えて来た。あの山中には白帝廟が、又その上には歴史的に有名な詩城「白帝城」があり、瞿唐峡の画竜点睛だと声なくして人を呼ぶようである。「蛟竜は雲雨を得ば、終に池中の物にあらず」と、劉備を褒めた呉の周瑜の言が脳裏をかすめて行った。

白帝城の由来は古く、西漢時代には此の辺は魚腹県と云われていた。漢政権が一時、王莽に奪われた時（９～２４）、公孫述という者が蜀王を自称し、初め成都に都したが後から、この魚腹県に遷都して紫陽城を築いた。殿前に一つの井戸があり、此の井戸から常に白い煙が出たことを、公孫述は白竜が出た吉兆だと判断し、自らを白帝と称し、魚腹県を白帝城と改名したのであった。

三国時代に蜀の皇帝「劉備」は、呉に殺された義弟・関羽の仇を討たんと兵を起こしたが、呉の将軍・陸遜によって夷陵（現在の宜昌附近）の地で、「火焼連営七百里」という火攻めで大敗し、兵を白帝城に引き上げて悶々のうちに死を迎えた。劉備は死に臨んで蜀の国事と、息子・阿斗の事を諸葛孔明に頼んだ托孤の地である。

紀元２世紀末の中国大陸を舞台にした三国志の中で、漢王朝再興の夢に敗れて病死し、劉備の終焉の地となった白帝城の特筆することは、数多くの詩人が此処を訪れて不朽の名詩を残している事である。自然の偉観や歴史上の幾多の故事が好題目となったのであろう。其の代表作として李白は次のように詠んでいる。

早に白帝城を発す

朝に辞す　白帝　彩雲の間　　千里の江陵　一日にして還る
両岸の猿声　啼き住まざるに　　軽舟已に過ぐ　万重の山

朝早く、朝焼けの色どる美しい雲のたなびくあたりに、輝いて見える白帝城に別れをつげて、千里も遠く離れた江陵まで、わずか一日で帰ってゆく。

両岸で鳴いている猿の声が、まだ鳴き続いていると思ううちに、私の乗った小舟は、たちまちのうちに、幾重にも重なった

山々の間を通り過ぎて行った。（前頁の写真は白帝城）

劉備玄徳の最後

長江下り一帯は三国志ゆかりの地でもあり、劉備を回顧する意味で記述しておく。

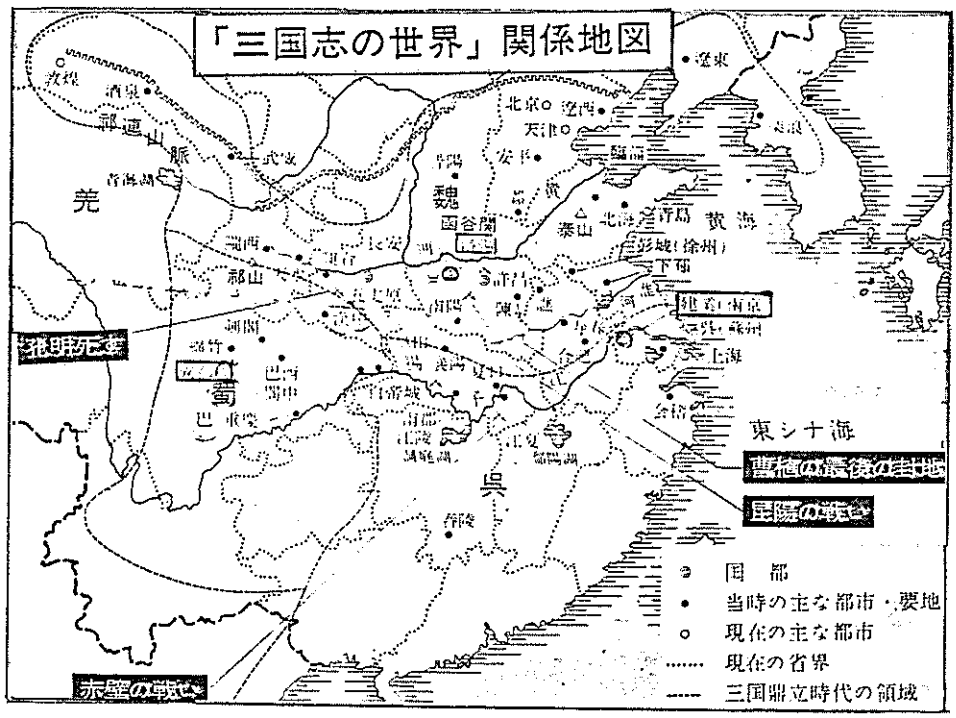
劉備は紀元１８４年の「黄巾の乱」に際し、河北の片田舎・涿県で挙兵以来十数年間、休む暇もなく戦場を駆け巡って来た。（下図は三国志の関係地図）

前漢の景帝・中山靖王「劉勝」の末孫で、勇将の関羽・張飛と共に転戦し、三顧の礼を以って諸葛亮孔明を迎えた。時に孔明は２７歳、劉備は４７歳であった。

孔明が劉備に開陳した天下三分の計とは、　劉備が覇業を成すには、北は天の時を曹操（後の魏王）に譲り、南は地の利を孫権（呉王）に与え、劉備自身は人の和を以って先ず荊州（湖北省襄陽附近）を取って家となし、其の後に蜀（四川）を手中に収めて基業を建て、曹操、孫権と相ならんで鼎足の勢力を競うという策略であった。

後記する「赤壁の戦」の後、劉備は荊州の大半を配下に収めて名実ともに荊州の牧となった。荊州を足掛かりとして巴蜀（益州）に入るという、孔明の画策の通りに益州に入り、後日の２１９年７月、漢中王となり、２２１年４月、蜀を建国して蜀王となった。普通「蜀漢」と称し、長子劉禅（阿斗）を太子に、諸葛孔明を丞相にした。

益州は今の四川省全域と陝西省の南部、および雲南・貴州両省の一部に跨る広大な領域を占め、四周を険阻な山脈に囲まれて地味、物産の豊かな地方である。



古来、天与の穀倉「天府の国」と呼ばれ、孔明の先見の智略は流石に天才であった。

此の天府の国は、東は重慶を中心とする巴と、西の成都を中心とする蜀、そして北の漢中（陝西省の西安西南方）を中心とする漢水（武漢で長江に合流）上流地方の、三地方に別れていた。当時、関中（西安を中心とする平野の古名）や、中国中央部から益州に入るには「蜀道の難きは青天に上るより難し」とか、「一夫関に当れば万夫も開くなし」と唱われたように、蜀の桟道は険しく、東から入るのにも三峡の急流を遡らなければならず、天然の要塞であった。

中国大陸が曹操の「魏」と孫権の「呉」と劉備の「蜀」に三分され、劉備が漢中王になった年に、曹操は孫権と同盟を結び、劉備支配下の荆州攻略に大軍を起こした。

劉備や孔明が益州に赴く時、荆州の守りを関羽将軍に任せたが、彼は強大な魏・呉軍を一手に引き受けて死闘を続けた。しかし不幸にして毒矢に当たり、２１９年１２月、当陽にあった麦城々外で従容として死についた。享年５８歳であった。

呉の孫権のために一命を捨てた関羽の恨みを雪ぐ為に、劉備は７５万という大討伐軍を起こし、成都を出発した。この時、孔明は「わが主君に未だ天寿があらば」と胸中で祈ったと云われている。劉備が馬上に於いて、屡々めまいに襲われるようになったのは、成都を発して数日後の頃からであった。

はじめは灼くような炎暑の性と思っていたが、一日経ち二日過ぎるように、劉備の四肢は指の先から氷のように冷たくなり、急に不安を覚えた。「自分の生命は此の度の出陣で、遂に相果てるかも知れない」という不吉な予感が胸中に湧いた。

関羽の弔い合戦の場で相果てることは望む所だ。成都には息子の劉禅（阿斗）を守り、蜀を治めてくれる孔明がいると自分に言い聞かせ、身の衰弱は誰にも告げなかった。其の頃、張飛の嫡男が軍列を追って来て、今度は張飛の相果てた事を告げた。

暫く失神状態だった劉備は２２１年８月、葭関（葭門）に入り、白帝城に入った。

蜀軍に対して総勢５万の呉軍は、宜昌から長江を下る事１００キロの宜都まで押し出して来た。此の時、孔明の選んだ蛮族５万は恐ろしい強さを発揮し、あっと言う間に呉軍陣地を蹂躙した。

明けて２２２年正月、蜀軍７０余万は巫峡、建平から夷陵（宜昌）に至る８０キロほどの間に、柵を設けて陣地を築いた。蜀軍の各隊は呉軍と激突して縦横無尽に蹴散らし、蜀軍の余りの強さに怖れをなした呉軍は、和睦を申し込んで来た。

劉備が若し未だ己の身体が壮健であれば、或は申込を受け入れて兵を引き上げたかも知れなかった。しかし劉備は死期の到った事を悟っていた。「呉と和睦すれば、関羽、張飛が生き還って来るものならば、喜んで受け入れよう」と言って、はねつけた。

そこで呉の孫権は「それならば興亡の決戦を致してくれる」と覚悟を決めたのである。

成都に居た孔明は、劉備が陣を移して長江をはさみ、８０キロにも及ぶ間に４０余りの陣地を構えたと知らされ、其の絵図面を見せられたのは既に夏６月であった。

一瞥した孔明は「ああ！」と叫び、「何人が此の布陣をお奨めしたのか。なんと云う愚かな思慮か！」と言ったという。この絵図面で見ると陣地を構えた処は、すべて草原と湿地と険阻な山中である。このような処に布陣するのは、兵法として最も忌み嫌うところで、若し、敵が火攻めをして来たら処置無しだ。敵を面前にして８０キロにも及ぶ陣地を拡げる事も、兵力の分散であり、全線にわたって弱い所ばかりである。

孔明は使者に対して速やかに陣営に戻り、「帝に陣地を変えられるようにと、お奨め致すがよい」と告げた。しかし既に呉軍は動き、此の方の敗色が濃厚だと判断した孔明は、敵は決して追撃して来ないと推察すると述べた。使者は「どうして敵が追撃して来ないと、判るのでせうか」と問いただしたところ、孔明は「魏が呉の虚を衝こうとして虎視眈々として待機している事を、呉は良く知っている。我が帝は無念ながら大敗されるであろう。その時は白帝城に逃げ込まれるようにお奨めせよ。それがしは其の近くの魚腹浦という所に、伏兵１０万を潜めてある故、白帝城に入られれば安全である」と告げた。孔明は、はっきりと劉備の死期の来ている事を感じており、孔明の推測に微塵の狂いもなかった。

呉の軍師・陸遜は９月上旬、突如として全兵を動かし、「茅草を山積みにして船を長江上に進め、東南の風が吹いた時に火攻めを開始せよ。兵は一兵残らず硫黄焔硝を包んだ一把の茅草を持ち、火種を携行せよ。上陸したならば風に順って一斉に敵陣に火を掛けよ。そして敵陣営４０のうち２０営を焼き捨てるのだ。劉備を生け捕るまでは、昼夜を分かたず追い詰めよ。この戦いは劉備を生け捕って始めて終わるのである」と厳命した。

いよいよ蜀軍殲滅の時を迎えた。しかし背後から魏が大軍を投ずる機会を狙っているため、呉としては蜀との決戦は即戦即決でなければならなかった。そのために呉は半年の期間を要して、必勝の作戦を立てたのである。

東南の風が吹き始めたころあい、蜀軍本営の左方の陣地から火の手が上がった。失火だろうと思ったのは束の間である。右方の陣地からも濛々と黒煙が噴き上げ、その下から火柱が立った。「火攻めだ」と諸将が愕然と気付いた時は手遅れであった。吹き付ける烈風が火勢をあおり、猛焔は烈風を呼び、四方の樹林へと燃え移った。

凄まじい真っ赤な火焔に包まれた樹林の彼方から、どっと呉軍の喊声が上がった。遂に本営にも真紅の魔の手が押し寄せた。この時、劉備は逃亡を決意して、病の身が

馬上の人となった時は、既に眼前には呉兵が殺到していた。

「白帝城へ」と味方の叫ぶ声が遠く劉備の耳にとどいたが、意識を失ってしまった。劉備の身体は部下の身に縛り付けられ、山の斜面を馬で馳せ登った。振り返れば野は火の海となり、山麓には累々と重なり合った蜀兵の死骸が火焔に照らされていた。

劉備は茫然として自失し、うつろな眼を敗北の戦場に向けているばかりで、何の思考力も働かなかった。無残な主君を背負った部下は、三度び馬を乗り換えて山（馬鞍山）を越え、白帝城を目指して疾駆し続けた。

疾風の如く遁れようとする劉備に対し、渓峡の底から黒雲が湧くように無数の呉兵が出現し、怒濤となって襲って来た。その時、突如として呉軍の背後を衝いて現われたのが、彼の勇名な趙雲将軍の軍勢であり、危機一髪のところで脱したものの、戦死した蜀軍は１２万余、呉軍に降った者は数知れなかったと云う。

夷陵（宜昌）で大敗して以来、辛うじて国境の白帝城に逃げ帰った劉備は、そこを「永安」と改称して行宮を置いたが、病は重くなるばかりであった。劉備は病床に仰臥してこんこんと眠り続け、夜か昼かさえも判らない状態であった。少し意識が蘇って来た時、劉備は燭台の灯の中に二人の人影の立っていることに気が付いた。

「そうか、関羽と張飛が私を迎えに参ったか」と思った丁度その時、孔明が静かに入って来た。劉備は己を蜀帝にまで登らせてくれた人物へ、「軍師すまない。此の度の出陣は朕の誤りであった。許して欲しい」と後いくばくもない眼を差し向けた。

「軍師、御辺の大才は曹丕（曹操の子で魏王となっていた）に１０倍する。あと１０年の歳月があれば、御辺は天下を統一する事も出来るだろう。然し乍ら、我が太子の劉禅には天下を統べ治める才は乏しかろう。軍師には、劉禅が補佐するに値せず非才と認めたならば、その時は軍師が自ら成都の主に代わってくれ」と「劉備、孤児を托す」と云う意味の言葉を述べたのである。

孔明は双眸を潤せながら、「自分は臣であります。太子を陛下の玉座にお即けして股肱の力を尽くし、忠節の誠を貫くことが、臣に与えられた使命であり、自分の胸中にあるのは其の使命を全うする力が、果たしてあるか否か、その畏れのみであります」と申し上げると、痩せ衰えた劉備の頬を泪がつたって落ちた。趙雲将軍も此の時に入って来て「陛下」と呼んだだけで慟哭してしまった。

漢王朝の再興を夢みた劉誤玄徳も、永安の行宮で目蓋を閉じたのであった。時は二二三年四月で享年６３歳である。趙雲も更に激しく慟哭した。其の後ろにあった孔明の双眸は、もはや乾いて冷たく冴えていた。主君の逝去に遭遇して、自分の双肩にのしかかって来た責任の重さに耐えなく、孔明は泪をおさえ、自分の一命を捧げた人と

幽明境を異にする此の瞬間の悲しみすら、排除しょうとしていたのであった。

劉備の遺体は孔明や趙雲に守られて成都に還った。太子の劉禅は城外に出迎えて霊を正殿に安置し、葬儀を行って遺詔を開いた。

「朕聞けり、人生は五十なりと。朕はすでに六十になれば夭寿にあらず、死してまた何を恨まんや。ただ思うは汝ら兄弟のことなり。勉むべし。悪は小なりと雖も為す勿れ。善は小なりとも為さざる勿れ。ただ、賢と徳とを以てのみ、人を服せしめるものと知るべし。汝が父は徳うすくして、効うに足らず。汝は丞相と共に事に従い、これに事えることを父の如くせよ。決して怠る勿れ」

【付記すると、諸葛亮孔明は２２７年に「出師の表」を蜀の第二代皇帝劉禅に奉呈して出陣し、五丈原（陝西省眉県西方）において、魏の将軍「仲達」と対峙すること百余日、一度も合戦することなく激務に倒れ、２３４年８月、五丈原の陣中で没した（５４歳）。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」と云う有名な言葉が遺っている】

夔　門　（夔　州）

山川秀麗な白帝城の眼下附近は更に峡は狭まり、断崖のの群峰は対峙して、意到り筆随うというか、メモをとる運びも江の流れのように一瀉千里に動いていた。鬼斧神工で作ったかと思う連山は、天から落ちて来たかのように聳え立ち、夔門は涌き反る激流・波浪のぶつかり合う光景の中に見えていた。

瞿塘峡（塘が正しく今まで記した唐は誤記）の別名を夔峡と云い、夔とは伝説上の怪獣のことである。歴史的に其の名も幾度か変わった古都で古跡に富み、背後の臥竜山には孔明が陣取ったとして武侯廟がある。武侯廟とは孔明を祀る廟である。

７６７年９月９日、燕州の高台に登って詠んだ杜甫の「登高」を次ぎに掲げる。

風急に　天高く　猿嘯くこと哀し　　渚清く　沙白く　鳥飛び回る
無辺の落木　蕭々として下り　　不尽の長江滾々として来たる
万里　悲秋　常に客と作り　　百年　多病　独り台に登る
艱難　苦だ恨む　繁霜の鬢　　潦倒　新たに停む　濁酒の杯

風は身をさらすように厳しく、晩秋の空はあくまで高く棲みわたり、猿の鳴き声も悲しげに響いてくる。高台から身おろすと長江の中州は清らかで水辺の砂は白く、その上を鳥が輪を描いて飛んでいる。

果てしなく続く樹林の落葉は、ヒューヒューと吹く風にあおられて地上に舞い散り、尽きることの知らない長江の水は、こんこんと盛りあがって流れている。

故郷を遠く離れた空の下、秋を見つめるような思いに悲しみながら、私はいつも旅人だった。

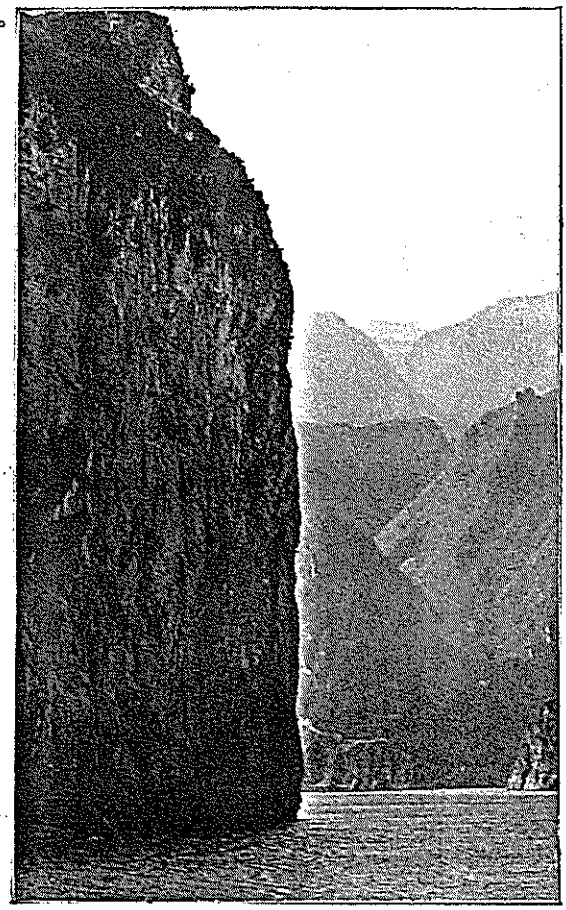
そして此の重陽の日に、生涯病気に苦しめられる此の身を、ただ一人、高台に運んできたのだ。

ふりかかるあまたの苦しみ、私の鬢はもうすっかり白くなってしまった。そのうえ、追いうちをかけるように私を悲しませるのは、病気が進んで、重陽の日の楽しみである濁り酒さえも、止められてしまっていることだ。

【旧暦９月９日の重陽の節句には、家族友人が連れ立って小高い丘に登り、酒を酌みかわして厄払いをするのが習慣であった。それは冬を目前にひかえ、一年の最後の行楽の機会であった。そうした習慣に従って杜甫も、ただ一人病の身を夔門の丘に登らせたのである】

孟　良　梯　（下の写真は瞿塘峡の一部）

咽喉右臂の地、即ち人間の咽喉・首のように緊要の場所として、夔門を含む瞿塘峡の一帯は、歴代の兵法家が此の地を占めようとした要衝の地であろう。「千里の江陵一日で還る」と詠んだように江水の流れは速く、幽深雄壮な絶壁を眺めていると、約３０センチ四方の穴が岸壁に見えている。



宋時代に匈奴と勇敢に戦った勇将・楊継業は死後、この断崖の上の台上に葬られたと云う。彼の腹心のの部下の孟良は将軍の遺骨を彼の故郷に葬りたいと瞿塘峡にやって来た。孟良は鉄棒で絶壁に一つ一つ穴を開けてて登った。それで人々は孟良梯と名付けたという伝説である。

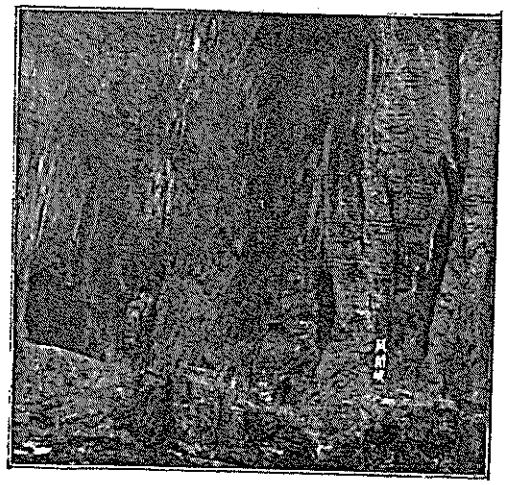
其のような穴は一目瞭然と見えていたものの、将軍は山西省で戦死し、遺体を此処まで運んだとは考えられず、誤り伝えられて民話になったと思われる。

本来この穴は、古代の住民が草根木皮の漢方薬の材料を採集する為に作った登山道だという事だが、垂直に近い懸崖をよくも登攀したと驚きであった。

１９５８年、探検隊がロープを腰に巻き付けて絶壁を登ったところ、古代巴族の人骨や懸棺が発見されたという事だ。

宮があるか？

風　箱　峡　（右は風箱峡）



櫛の歯をひくというか、絶え間なく続く峻険な懸壁は我々の手に汗を握らせ、千水万山の佳境は最高潮のようだ。大小の梯子の穴は孟良梯から続き、また白帝城以来この方、北岸沿いの岸壁には一条の人工の古桟道も見えていた。（右の写真の下部が古桟道）

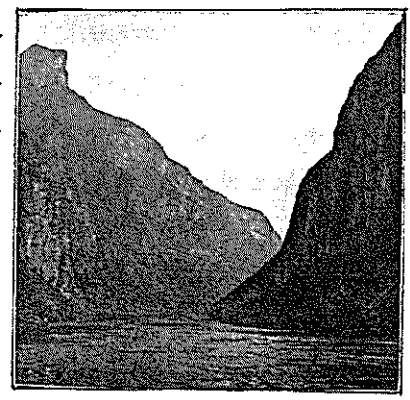
桟道の上の巨岩は今にも落ちんばかりに覆いかぶさり、桟道の下は渦巻く浪が先を争って流れる危険極まる所だ。桟道は昔、遡航する舟を曳いた道であり、軍事上の輸送路に使用され、劉備や孔明も此の桟道を通った事を想起すると、「弓は袋に大刀は鞘」の天下太平の今日でも感慨無量である。

長江の絶壁には黄褐色の岩肌に懸るように、何列かの洞穴が並んでいる。昔これらの洞穴には、鞴（ふいご）のような長方形の箱が沢山置かれていたので、土地の人々は此の辺を風箱峡と呼んだ。調査によると、此の鞴のような箱は戦国時代の懸葬棺であり、棺中から青銅の剣や遺骨が発見されている。しかし多くの懸棺は朽ちて崖下に落ちて無くなり、洞穴だけが其のまま残っている。写真の中央から右の洞穴が其れであり、左は桟道の隧道である。

七　道　門　（右下の写真はこの附近の瞿塘峡）

風箱峡と連続して七道門がある。桟道に沿った絶壁上に一つの大きな石洞が見える。洞窟は曲がりくねった７つの険隘な所があるから名付けられた。一つの道門を過ぎる毎に異なった風景が展開し、千姿万態の石筍・鐘乳石が眼を奪うばかりの美しさだ。

洞窟の頂部は窓のような間隙があり、天空を望む事が出来るようで、両岸の岸壁は千差万別に侵食された奇態を呈し、楽しませてくれた。



七道門などの下を通る桟道を更に見続けていると、先進的な工具もなく、技術も発達していなかった昔、岩石に孔を穿って桟道を通す事は困難な労働を強い、大きな犠牲が払われ点が涙ぐんで想像される。

早速、地は崩れ山は砕けて壮士死し、其の後に桟道は鈎のように連なる、とメモ用紙にペンを走らせたのである。しかし必要性は開発の母であり、為政者の口には、戸は立てられなかったのであろう。

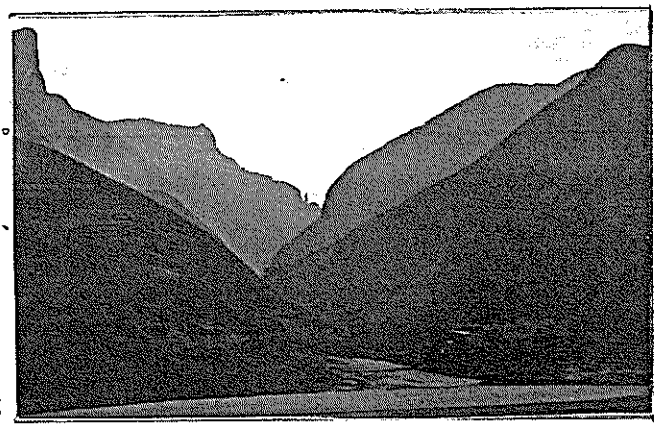
黛　溪　（位置は２４頁参照）

舟は陽光を浴び出して瞿塘峡の峰を回り、断崖に沿って下り、或は桟道づたいに曲がりくねって、瞿塘峡の終点である黛溪に早や差し掛かった。解語の花の美女に逢うように憧れた、最大の難所といわれる瞿塘峡も、待つ間が花のように箭の疾さの如く流れて行った。

黛溪は又の名を大溪鎮と呼び、巍峨群峰の地から秀麗な巫峡を遥かに望む位置にある。此処の上流地域には戦いに敗れた昔の巴国人達が、此の峻嶺に逃げ込みんだと伝えられ、この民族の運命は神秘に包まれて千古の謎なっている。

ここでは多くの原始時代の古墳が発見され、石斧・石鋤や骨矛・骨針それに陶器・骨器などの珍しい遺品から、新石器時代の遺蹟だと判明したという。

錯　開　峡　（右下の写真）



瞿塘峡を過ぎた直ぐ南岸に蒼黒い幾峰かの尖鋭な峰が並んでいる。

伝説よると大昔、１２匹の蛟竜がおり、巫山の山の上で牙をむき、暴れ廻って猛烈な風を興し、天地は暗くなって家屋は倒壊し、人畜の死傷が無数に発生した。

其の時、西王母の末娘の瑤娘が彩雲に乗って通りかかり、瑤娘が指差すと一条のの白光が走って雷鳴が起り、１２匹の蛟竜は殺されて黒い岩となって長江に落ち、流れを塞ぎ人間世界に被害を及ぼした。

塞がれた長江は度々洪水を起して氾濫し、舜帝は鯀（コン）に治水を指示して、鯀は沿岸に築堤を造ったが結果は悪くなってしまった。其の後、彼の息子で治水家として名高い禹が来て之を治める事になった。

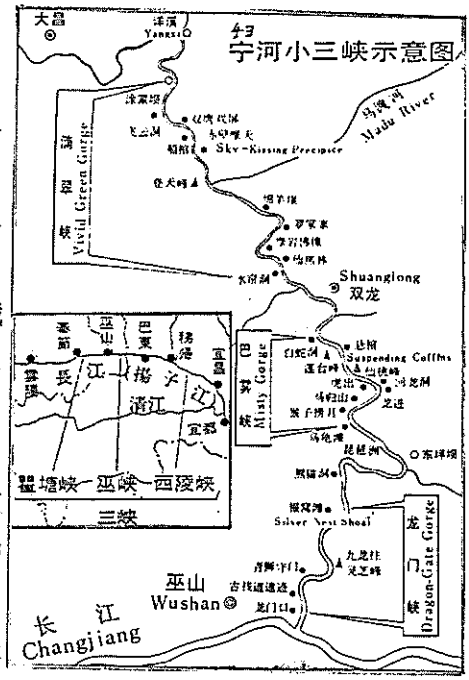
禹はこの洪水を治めるのに疏水（切り開いて水を通すこと）を引く事を考え、南岸の山に一つの峡口を開いて洪水を流出させようとした。しかし此の峡口の開き方を誤り、洪水は反って水かさを増したことから、人々は錯開峡と呼ぶようになった。

上の写真を良く見ると、奥の山の谷間に尖った塔のような山が見えるが、其処には張飛の廟があるとの通訳の説明であった。

これらの神話伝説をみる時、古代の人達が天険をなんとか征服しょうとしたが、しかし長江の三峡の険は変幻自在の人跡未踏の地で、なかなか之を征服することができなかった真実を、物語っているのではないだろうか。

巫山県城と小三峡遊覧

（右図は小三峡の要図）



船は雄大なに瞿塘峡を去り昼すぎに巫県城に着岸し、小三峡遊覧の小船に乗り換えた。

三峡の険と云われながら、支流との合流点には豊かな集落が、翠緑に彩られているものだ。

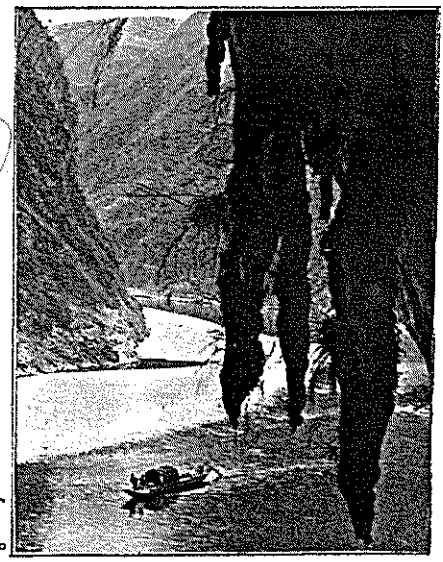
巫山は長江北岸の永い歴史を秘めた地で、戦国には楚国の巫郡で、秦代には巫県と、隋代に至って群山起伏する巫山の中にあるから巫山と改称された。

四川省の巫山山系の東の門戸である人口１万５千の此の街にも、紅色の屋根瓦や大楼の建物が建ち並び、市街の東で宁河が合流している。

宁河は三峡の中では第一の２５０キロの支流である。多姿多彩な峻嶺奇峡として知られ、清幽秀麗、千姿百態の自然美は恰も盆景のようであったと、形容しても過言ではあるまい。

竜門口の橋梁を過ぎると、河底まで透き通る清流に急変して一条の翠帯のようだ。その上、急流の水声は雷鳴のように咆哮怒吼し、長江の赤流は顔色なしである。

竜門峡を遡航すると、巍峨雄壮な峰から竜門泉の瀧が飛沫をあげ、古桟道が蜿蜒と西岸に延びている。此の古桟道は中国最長といわれ、秦・楚・巴時代から陝西省の鎮平県にまでも通じ、軍事、政治経済、文化の交流に貢献し、唐代には更に拡張したほど重要性があったようである。（右写真は石筍）



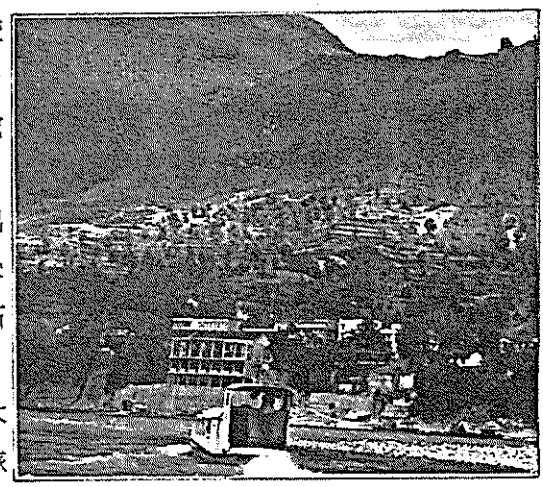
青獅守門、九竜柱などの懸崖には各所に石筍が下がり、銀窟灘は稍々河幅が拡がって清流は怒濤のように逆巻き、熊猫（パンダ）洞の大洞穴が口を開らいていた。

激流奔騰する江上の小船から、顔面の直前に展開する景観は文句通りの明鏡止水である。我が心中には一点の曇りもなく、心境は雑念を払って澄みきり、富貴は草頭の露のような金銀財宝を捨て、浮き世の塵を払って命の洗濯をしたようであった。

斗折蛇行して巴霧峡に進むと、更に長江との清濁の差は「天淵の差」というか、天地のように懸隔が甚だしく、自然に山水を愛すようになるばかりか、他人にも此の余光を分けて与えたい心境となった。

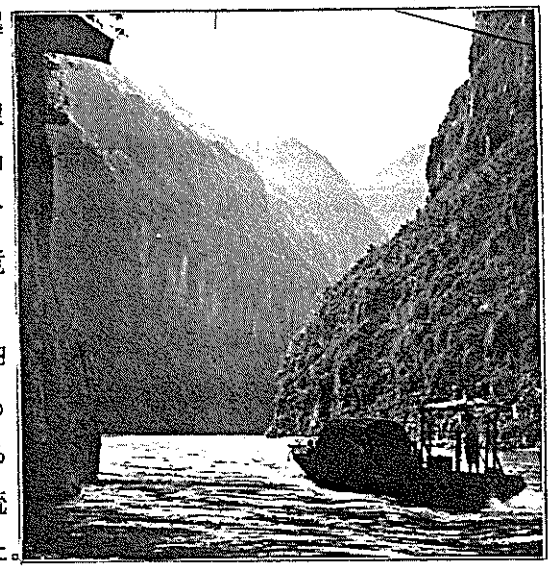
山高く谷深い西岸に鳥亀灘があって、岸壁の間隙には鳥や亀の頭に似た奇岩が見え、象や爬虫類のようにも想像できた。此処を航行して上がると再び一面は鐘乳石の世界となり、高さ４０メートル程もある石筍が清水に着かんとしている。これが有名な猴子撈月という名の懸壁の奇岩怪石である。

更に千奇万状の峡谷を遡って行くと、千個も数えられかも知れない鐘乳石が、屏風のような岩壁に連なり、其の中の一匹が駿馬に似ているから馬帰山と呼んだと云う。



日輪は高く真紅に円を描いて輝き、碧空は気が遠くなるほど澄み渡り、神算鬼謀を思わせる形貌奇偉の景観の中に、壁上に虎が洞窟から頭を出したような「虎出」や、３０メートルもある竜が一部は水面に露出し、一部は水中に没している形状の奇怪な岩の「竜進」を通過すると、懸棺の洞や石灰岩の白蛇洞を経て、双竜鎮に到着した。

双竜鎮（右写真）の地は豁然と開けて大楼や耕作地もあり、休憩所、中国人用の旅館も設けられている。小三峡谷の中心的な存在だ。歴史上も用兵上の重要な地として着眼され、明朝の１６４０年には農民蜂起も起きた由緒のある奥山の村である。

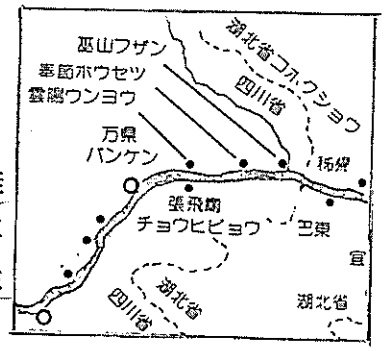


湯茶の手厚い接待を受けて、上流の滴翠峡へと航行した。此の峡谷は小三峡谷の中で最も幽深にして秀麗、碧流には鴛鴦（オシドリ）が飛来し、野猿も啼くという佳境の最たる所だ。（右は其の一部）

神仙の棲むような険山険灘を遡り、鶏卵を思わせる玉石の河原に下船して散策すると、泉石の膏肓となって壺中の世界、即ち別世界にいるようであった。足を万里の流れに濯いで浮き世ばなれの心境を体験した。

9月23日

巫　峡



噂に聞いた通りの山川襟帯の優れた小三峡に遊び、桂林の漓江下りと比較して見ると、「春蘭秋菊倶に廃すべからず」というか何れも捨てがたく、長江を含めた男性的で勇壮な魅力は、断じて此の方に軍配を挙げたい。

昨夜は船長主催の晩餐会が開催され、今日は昔・建平と称した巫山県城を離岸して、幽玄にして秀麗な英姿と伝える巫峡下りの日を迎え、抜山蓋世の志気は盛んである。

三峡の中で最長といわれる巫峡は四川・湖北の両省に跨り、巫山より官渡口まで続き、延々と４０キロにわたっている。（上・下の要図を参照）

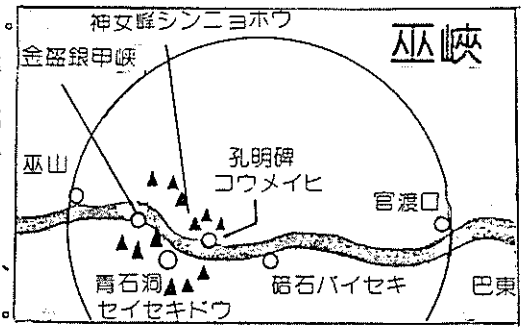
大峡とも呼ばれる巫峡の両岸には２０００メートル級の奇峰が聳え、群嶺が重なり合い、恰も曲がりくねった一条の美しい画廊のようである。長江の流れは其の間を迂余曲折して、ある時は大山に突き当たり、ある所では峰を廻って水路を転じ、急に周囲が開けるなど、千変万化の光景を展開して来る。

南北の両岸に屹立する巫山の１２峰は、巫峡の風景の中で最も美しく、江上を通過する船旅の人達は甲板上に釘付けにされ、興味津々と此の景観を眺めるのであった。即ち「放舟下巫峡、心在十二峰」という有様である。

これらの峰々の山容姿態は様々で、あるものは天空を駆け上がる竜の如く、あるものは鳳凰が翅をひろげた様に見えるが、人々は此の山々の形姿から名称を付けている。

「翠屏」百丈「起雲」煙　　遠「望霞」光照「聖泉」　　「聚鶴」漫誇千載勝
「登竜」疑到九重天　　「朝雲」雨霧洗「浄壇」　　「集仙」「飛鳳」弄晴川
試問「松巒」樵子径　　「上升」峰頂看楚天

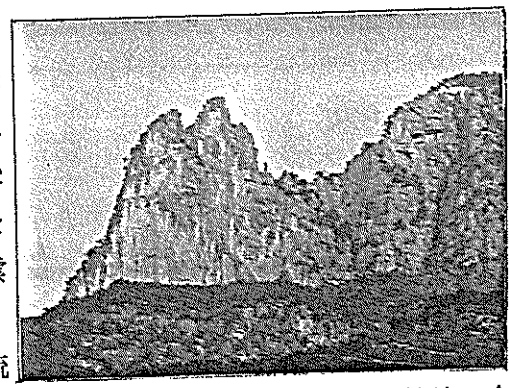
上記の「　」の名前は１２峰の名称で、土地の人達は優雅な詩を作っている。其の中で最高峰の神女峰とは「望霞」の事である。



昔から今に到るまで、巫峡はその秀麗な姿を以って多くの遊客を引き付けて来た。歴代の大詩人達の李白、杜甫、王安石、李賀なども巫峡に遊んで詩を作っている。

また各峰には多くの心にしみる伝説があり、人々の心を揺さぶる物語も広く知られている。

神　女　峰



瞿塘峡に比べると巫峡の河幅は稍々広くなり、其の分だけ物静かな印象を与え、複雑に屈折する流れは、ひと曲がりする毎に新たな景観を展開する。其の美しい眺めは山水画を見ているようで、「岩出て道無しと疑う、雲開けば別に天有るを」の語を思い出す。

空には前記した雄峻な１２峰が聳え、江流には青竹灘、将軍灘、金金灘、娘娘灘などの大小の灘や、門扇峡、巴峡、鉄棺峡、金盃銀甲峡などの峡谷がある。

船上からこれらに眼を注いでいると、空を飛ぶ鳥は去ったり来たりして変化はあるが、山々は昔のままで、人は歌い人は悲しんで消長があるものの、水の流れは昔と変わらないなとど考えること自体が、老境の仲間入りした証拠かも知れない。

長江の北岸に群がり競う秀峰の中に、ひときわ高く聳えて其の傍らに大きな石柱があり、見目麗しい乙女が遠くを見ているような峰が望遠できた。これが伝説で語り継がれて来た神女であり、最高峰の神女峰である。（上の写真）

この神女についての数々の神話の中で、次ぎのような神話がある。

昔、天宮に居られた西王母には聡明な娘・瑤姫がいたが、瑤姫は活発で勝気なところもある娘であった。西王母は彼女に天宮にある瑤池の管理をさせる事にしたが、彼女は天宮の穏やかな日々を過ごすことに満足できず、下界の人間世界を眺めて、人々の労働や生活に憧れを抱くようになった。

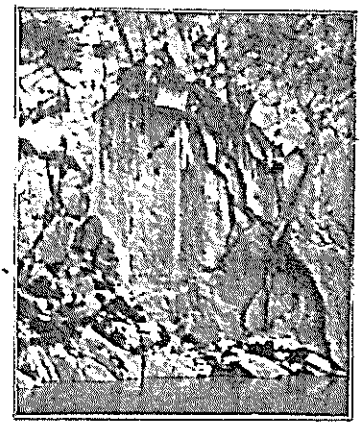
或る日、彼女は姉や妹の総勢１２人で、ひそかに彩雲に乗って下界に降りて来た。しかし人間世界は彼女が考えたような楽しい所ではなく、恰も洪水が氾濫し阿鼻叫喚して苦しむ有様であった。彼女は生来の勝気から、洪水退治に奮闘している「禹」のもとに行き、彼に天書一巻を授けて治水の学習をするように励ました。

そして彼女は雷を使って、洪水の発生源である１２匹の蛟竜を殺させた後、多くの姉妹と共に禹の地形測量を援助したり、河道の開拓に協力して遂に三峡を開き、水害を治めることに成功した。

彼女は巫山に住み着き、樵夫たちの敵である虎や豹を追い払って農作を教えたり、病人の為に薬草を集めたり、また長江の船の航行の安全を図ったと云う事である。

土地の人々に敬慕された彼女は、其の厚情に応える為、最高峰の神女峰となり、姉妹も１２峰となって、今も航行する船の安全を図ってくれていると云う神話である。

孔　明　碑



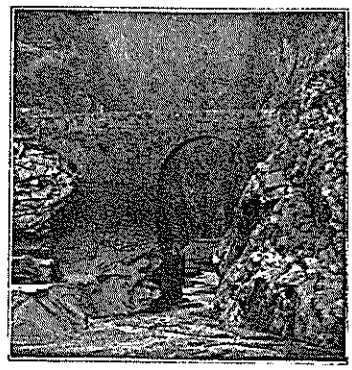
嶄然として頭角を現わしていた神女山は、気品のある徳の高いことの譬である「山高くして水長し」の感じであった。また万物は流転変容しているが、巫山の神表峯峻は風吹けども動ぜず、神話に出てきた情けは人の為ならず、それは何時かは自分に報いとなって還って来ると、教えているように思えたのであった。

孔明碑（右上の写真）は三峡の中で、歴史的遺蹟として広く知られている。孔明碑のある集仙峰は切り立った絶壁で、翠屏峡の北岸にあり、其処にある白い岸壁は、その凹みが碑の形をしている。

其の凹みに「重崖迭嶂巫峡」・「名峰聳秀」・「巫山十二峰」と三列の文字が刻み込まれているが、「重崖迭嶂巫峡」（嶂は険しいこと）は、諸葛亮孔明の直筆だと伝えられている事から、孔明碑と呼んだそうである。

伝承によると此の碑には以前、孔明の代表的な兵法の一節が小さな文字で刻まれていた。それは孔明がわが皇帝・劉備に対して、呉の孫権と連合して蜀・呉の二国が力を合わせ、魏を倒すべきだと云う事を主張した一節だった、と伝えられている。

白帝城の項で述べた通り、夷陵の戦いで蜀が呉に大敗し、呉の将軍・陸遜は劉備を此処まで追撃して来たが、この刻字を読んで孔明の先見の明に感動し、兵を引き上げたと伝えられている。



然し乍ら、この重崖迭嶂巫峡の字は、此の故事のあった１２００年後、即ち明の嘉靖年間（１５２２～６７）に彫刻した事実が確定している。名峰聳秀と巫山十二峰の文字はそれより古いが、時代は確定できないと云う。

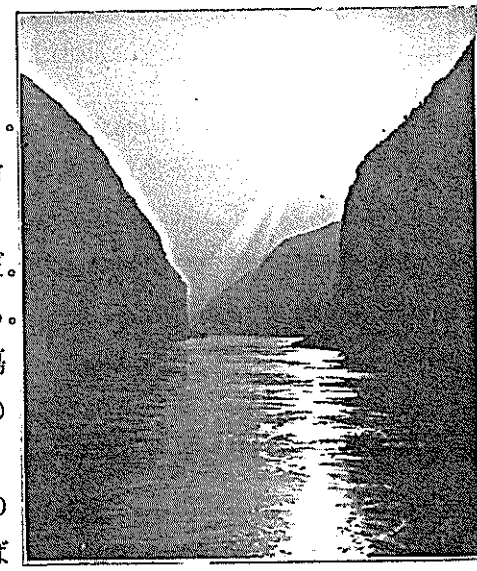
無　奪　橋

この巫峡には右の写真のような、石で造った橋が各所に見受けられる。此の橋は三峡に流れ込む渓流を跨いで巫峡の古桟道を繋いでおり、峡谷の中の重要な交通路となっている。

昔は丸太を渡したような物に過ぎなかったと思うが、劉備や孔明も此処を渡った事であろうと三国志を想起すると、落涙は止まらずと云う心境になってしまった。

烈風枯葉を掃うような大軍を擁し、命よりも名を惜しむ武人が会稽の恥をそそぎ、関羽の仇を討たんと出陣した劉備が、呉に敗れて敗走した湖桟道にさえも、惻隠の情が込み上げて来る。戦場で敗戦の無念を体験した我々は同病相憐れむようである。

碚　石



碚石は長江の南岸にある小さな町で、此処の布袋口とふう所が四川・湖北両省の境界である。

巫峡の中で河幅は最も狭く、突兀とした巨岩が雲を突き天を刺すような形で立っている。

天高く水低し、為に陽の山頂に昇るも遅しだ。右の写真は巫峡を照らし始めた遅い旭日である。

晴好雨奇の山水の景色に見惚れていると感傷的になり、再び九腸寸断の思いであった劉備のことが浮かんで来た。

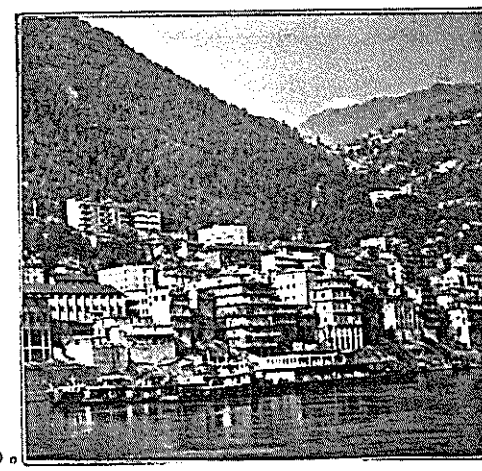
虎尾を踏むような死闘の経験者は自然に其の様になるが、「国大なりと雖も、戦いを好めば必ず亡び、天下平らかなりと雖も、戦いを忘るれば必ず危うし」と、何処かの国の現状まで憂うのであった。両省の境が紙一重である事は、何を教えているのだろうか。

巴　東

長江の南岸に位置し、大巴山の東にあるから巴東と名付けられ、下の写真で見る通り山の上まで町並みが続き、湖北省最西端の古い歴史を持つ県城である。

古くは巴国に属し、戦国時代以降は楚の国に属した。東漢の末期には益州（四川）の長官・劉璋が巴郡、巴東、巴西の三郡を設けて三巴と呼んだが、隋代に巴東と改名された。巴東は巫峡と西陵峡の中間にある街で、水に臨み背面に山を控えた湖北省西部の門戸であり、交通の要衝である。しかも桐油、生漆、薬草の産地でもある。

最近の報道で「毛人」が発見されたと云うのは、対岸に在る原始林内の事である。



古くから多くの有名な詩人が此処を訪れ、数々の詩句を残している。

例えば李白は

　　吾れ巴東の三峡に在る時
　　西の方、名月を眺めて峨嵋を憶う

また白居易は

　　巴東の船舫は巴西に上がり
　　波面に風生じ雨足揃う
　　（舫とは並んだ二隻の舟のこと）

など、いづれも此の地の情景を詠んだ詩である。

秭帰・屈原沱　(秭＝姉)

秭帰は長江の北岸に在り、漢代に秭帰県と、北周の代に長寧県と、隋代にまた秭帰県となり、唐代には帰州となった。１９１４年の夏、秭帰県となって今に至っている。

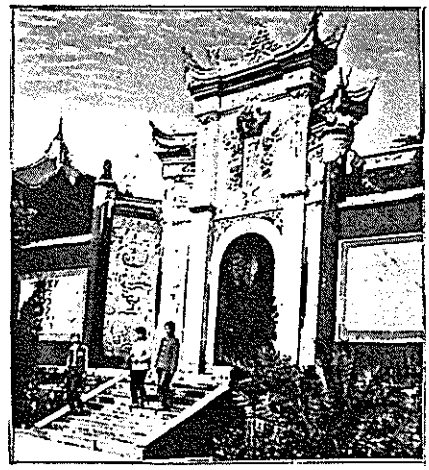
此処は戦国時代の偉大な愛国詩人の屈原を生んだ土地で、歴史を繙くと彼には賢い姉がいた。彼女は屈原が流罪になったことを聞き、屈原を慰めるために嫁ぎ先から実家に来た。そういう事から秭帰と呼ぶようになったと云う。

この県城から約１キロ程離なれた所に「屈原沱」と呼ぶ所があり、其の岸上に屈原廟がある。（沱は涙の流れること）屈原が洞庭湖畔の岳陽の南にある汨羅江に身を投げた後、屈原の姉は屈原が竜に乗って帰ってくる夢を見た。翌日、姉は岸辺に行き彼を待っていると、頭は軍船、背鰭に大きな帆を張ったような赤い大魚が、一匹下流から泳いで来た。姉の前までくると彼女に向かって三度叩頭したあと、口から屈原の亡き骸を水面に吐き出した。屈原は生きて居るような容貌をしていたという事である。姉や古里の人達は彼を引き上げて懇ろに其処に葬り、其の上に屈原廟を建て、それから此処を「屈原沱」と名付けたということである。

汨羅の人達は餅米で「ちまき」を作り、淵に投げ込んで魚の餌とし、屈原の亡き骸が魚に傷をつけられないようにした。この風習が其のまま伝えられ、毎年陰暦の５月５日になると人々は「ちまき」を食べて屈原を偲び、汨羅江上では盛大な龍船競争を行って屈原の霊を慰めて居る。（其の情景は日本のテレビでも放映された）

これが今日も伝えられる端午の節句の由来であり、中国ばかりでなく、日本にまで其の習慣が受け継がれている訳である。（下の写真は屈原廟）

紀元前３２０年に楚の王族として生まれた屈原は、政治に明るく、楚の懐王（前３２８～２９９）の信任を受けて左徒・三閭太夫という要職に就き、国の内治・外交に功績があったが、讒言に遭って放逐され、長い間、洞庭湖のほとりをさまよったあげく、遂に汨羅の淵に身を投げて死んだ有名な人物である。



楚という国は春秋戦国時代に長江の上流地方、即ち、現在の湖北・湖南一帯を領域とした国で、都は今の湖北省の江陵である「郢」であった。

そこで秦を除く南北の６ケ国が同盟を結び、秦に対抗しようとしたのが「蘇秦」の主張した「合従」

の策であった。それに対抗して東西が横に連なる意味で、６ケ国をそれぞれ各個に西の秦に結び付けようとした「張儀」の策が「連衡」である。

楚国がこのような危機にある時に屈原は生まれたのであった。長じて懐王の侍従となり、博聞強記で政治に明るく、文辞にたけていたので、宮廷では王と国事を計り、外では賓客を接待して王の信任が厚かった。

上官大夫が屈原と同じ地位に居て王の寵愛を争い、心の中では屈原の才能を嫉んでいた。そして王に讒言阿諛した結果、屈原は王から遠ざけられて江南に流された。屈原は楚国の前途を憂いながら、放浪生活を余儀なくされたのである。

その時に作ったのが長編の詩「離騒」である。離騒とは離憂のことで、離は羅の意味である。即ち憂いにかかるという事だ。

信を守って疑われ、忠を尽くして誹られては怨まずに居られず、離騒は怨みから出た詩である。自分の潔白と誠実を疑われ、誇り高い心を傷つけられて、世の小人どもへの激しい憎しみと、自分を捨てた主君への愛情と心残りが、くどくどしく繰り返して書いてある。離騒の一節に次ぎのように詠んでいる。

已んぬる哉　　国に人無く我れを知るもの莫し　　又何ぞ故郷を懐わん

既に与に美政をなすに足るもの莫し　　吾れ将に彭咸の居る所に従わんとす

（彭咸は殷代の賢人で、君を諫めてきかれず、水に投身した人）

屈原は長江のほとりに到り、髪をふり乱して湖畔をさまよい、顔色は憔悴して痩せ枯れてしまった。遂に「懐沙の賦」を作り、石を抱いて汨羅に投身自殺したのである。

屈原の没後、楚と秦とは相変わらず戦ったり、和を結んだりしていたが、日一日と領土を削られ、紀元前２２３年に秦に滅ぼされてしまった。

死ぬまで（前２７８）祖国を愛し続け、遂に身を殉じた彼の生き方は誠に一途であり、これが後世の人達に永く哀惜されることとなった。

「三上卓」氏作詞の昭和維新の歌の冒頭にも、「汨羅の淵」と書かれている。然し乍ら、現在は右翼か、暴力団かは知らないが、黒の大型自動車からボリュームを上げて、全国各地で此の歌を流しながら走っている。果たして憂国の士なのだろうか。

昭和維新の歌詞の一部を記して、秭帰・屈原沱を偲ぶことにした。

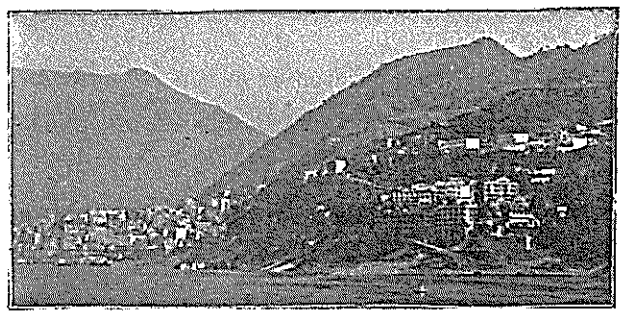
１、　汨羅の淵に波騒ぎ　　巫山の雲は乱れ飛ぶ　　混濁の世に吾たてば
　　義憤に燃えて血潮わく

２、　権門、上に驕れども　　国を憂うる誠なし　　財閥、富を誇れども
　　社稷を思う心なし

歌詞は１０番まであり、一般に５・１５事件の歌と称している。

の名の由来 アヒルが化石

香　溪　（右は香溪の遠望）



香溪は長江北岸の支流で、西陵峡の西口である香溪鎮で長江に合流している。その上流が明妃村であり、漢代の有名な王昭君の古里である。

唐代の詩人・杜甫は

群山万壑赴荆門　生長明妃尚有村

と有名な詩句を遺している。

漢の元帝（前４８～３２）の時、北方の匈奴の烏孫王は漢との和親を条件に、漢室との婚姻関係を望んで来た。元帝は王昭君を烏孫王に嫁がせ、その後６０年間、漢と匈奴の間には争いがなく友好が続いた。（詩の荆門とは現在の江陵である）

遠く砂漠の彼方の烏孫という遊牧民族の王（匈奴）のもとに嫁いだ、漢の王女の望郷の詩は次ぎの通りである。

わが家、われを天の一方に嫁し、遠く異国の烏孫王に托す。穹廬（テンマク）を室となし、旃（ケオリエン）を牆（カベ）となし、肉を以て食となし、酪を漿（シル）となす。つねに土を思いて心の内傷む。願わくば黄鵠となりて故郷に帰らん。

風俗も習慣も言語も異なる外国へ、漢と匈奴の親和策の為に政略結婚の犠牲になった、其の哀切な心情が詠まれている。

異民族との戦争・交渉が、危急存亡を賭ける国家的大事となった此の時代に、男達の闘争の蔭に、女だからと特殊な運命を背負わされたのは、数多くあった事だ。中でも匈奴の王に嫁いだ「王昭君」は古来、多くの詩や歌や芝居に語り継がれて来た。その名前は平安時代の我が国にも、漢宮悲劇のヒロインとして伝わったほどである。

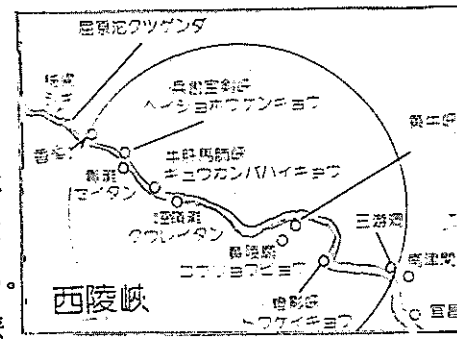
彼女は天子の数多くの後宮の側女の一人であり、内モンゴルのフフホトに彼女の墓碑が建っている。杜甫は昭君村（明妃村とも云う）と題して次のように詠んだ。

（前文は前記した詩と重複する）

群山万壑　荆門に赴く　　生長の明妃　尚お村に在り（壑は谷）
一たび紫台を去って　胡漢に連なる　蜀　青嫁を留め黄昏に向かう（紫台は宮中）
画図省識す　春風の面　　環珮空しく帰す夜月の魂（環珮は玉の首飾り）
千載琵琶　胡語を作る　　分明す　怨恨曲中の論（胡は匈奴）

伝説によると、王昭君は北方の匈奴の烏孫王に嫁ぐ前に、此の溪流で髪を洗い、水面を鏡にして化粧をした。その時、誤って首飾りの真珠を水中に落とし、それから此の川の水が良い香りがすると云う事から、香溪と呼ばれるようになったと云う。

西　陵　峡



巫峡を去って約２時間、稍々広々とした香渓を過ぎると、三峡の最後の西陵峡である。西陵峡は秭帰の香渓口から始まり、宜昌の南津関に到るまでの約５０キロ、三峡の中で最も長い峡谷である。

楚の時代に宜昌を西陵と呼んだ事から、西陵峡と名付けられたものと思われる。此の間に兵馬宝剣峡・牛肝馬肺峡・崆嶺峡・燈影峡や、青灘・崆嶺灘などの灘があり、危険なことで有名である

水流は激しく灘も多く、水中に岩礁が林立して航路は迂余曲折し、江水は渦を巻いて一定しない事で知られていた。私が黄河で経験した結果では、大河の流線部の本流は常に変化し、航行に苦労した記憶が蘇って来たのであった。

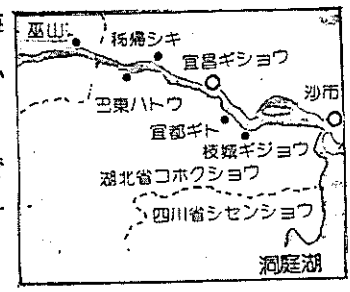
詩人の白居易は「白狗頂黄牛、灘如竹節稠」（稠とは多とか密の意）と描出しているが、稠の一字で、川底の岩礁が竹の節のようになっている特徴を表現している。

また嘗って李白が此の西陵峡を船で下った時に、「三朝黄牛をのぼり、三暮行くこと甚だ遅し、三朝また三暮、覚えず鬢は糸を成す」と詠んで、西陵峡の航行の難しさを表現している。

これは「三日間、毎朝黄牛山を眺めて出発するが毎晩、黄牛山下に宿るこことなる、なんと進み方の遅いことよ、三日三晩黄牛ばかり見ていたら、知らぬ間に鬢の毛が糸のように白くなってしまった」ということで、船が遅々として進まず、緩慢さを誇張して詠んでいる。

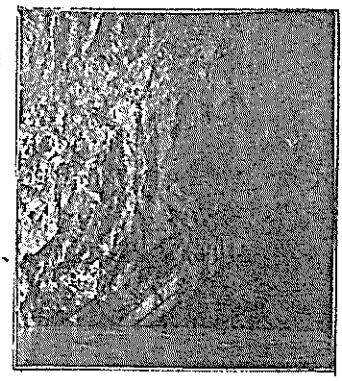
然し乍ら現在では、川底の暗礁は除去されて危険な灘も過去の事となった。神話伝説の時代に禹王と１２人の神女達が、力を合わせても達成できなかった事が完成し、古人の云った「千里の江陵一日にして還る」という幻想は現実となった。

漢王の大奥で華やかな暮らしをしていた宮女が、明日は夷の妾となって異境に送られた、「今日は漢宮の人、明日は胡地の妾」という王昭君の悲しみを思い浮かべながら、江水の流れに眼を移すと、「一切の衆生界は生死の海に流転する」のだと、諦めたような、或は悟ったような心境に陥り、水流れて声なしであった。



人生でも花でも盛りは一時に過ぎない。しかし今からでも遅からず、「景観の優れた山川は、我が心まで広大にする」と妙光を浴びた千古の連山に思いを馳せていた。

兵書宝剣峡



巍峨とした断崖絶壁の群峰の中を江水は滔々として奔騰している。其の流れにある兵書宝剣峡は香渓と青灘の間にあり、約４キロの距離がある。此の峡谷の北岸断崖上に、幾つかの正方形の巨岩があり、丁度大きな本を重ねて置いたある様に見える。これは諸葛孔明が隠して置いた兵書が、石になったと伝えられている。（右上写真の斜めの箇所）

此の傍らに一振りの鋭い剣に似た形の穴がある。これが伝説中の宝剣を隠した所だと云う。（右下の写真）

伝説によると、諸葛孔明は常ひごろ用兵の方法を書いて本にしていたが、彼は再起不能の病にかかり、兵書を継がす人材がいないため、これらの兵書を絶壁上に置き、後世、有能な士が使えば良いと蔵置したのだと云われている。

しかし、別の伝説では、楚と漢との戦争中に劉邦の部下に「張良」という謀士がいたが、彼はよく兵書を熟読し有能な才能と其の知謀をもって劉邦を助け、項羽を破った。そして漢の朝廷が確立した後、張良は兵書と宝剣を此処に隠したとも云われている。

土地の人々は、この大自然の形状を歴史上の人物と結び付け、何時とはなく美しい伝説を作りあげたものと思われる。それにしても、多くの神話伝説の中から此の谷を、「兵書宝剣峡」と云う美名を付けたと感心したのであった。

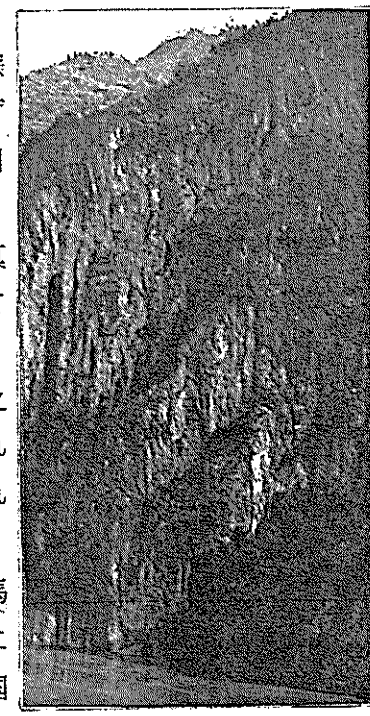
附近には炭鉱が見えて小型運搬船が接岸し、又みかんの栽培が盛んで、本当か嘘かは知らないが、みかん１キロと米３キロとが、物々交換の基準だと云うことである。

青　灘

青灘は三峡の有名な難所の一つで、兵書宝剣峡と牛肝馬肺峡の間にあり、西から東へ頭灘、２灘、３灘と続き、距離は約１、５キロ程度である。頭灘と２灘は山の岩が崩れて江中に堆積して出来たもので、北岸に歴然と痕跡が残っていた。３灘は南岸が其のまま伸びて出来たものだ。其の中でも頭灘は明の１５２３年、北岸が崩れて江中に灘を作って天然の堰堤となり、灘の幅は１２０メートルにも及んで流速は毎秒７メートル、落差も２メートル以上となったと、当時の記録に残っている。

歴史上も有名な青灘は、難破の事故は数限りなく起り、其の船乗り達の骨を集めて白骨塔が建立されている。然し乍ら現在は、航路の整備によって最大流速は３メートル、航路も倍に拡張し、危険な灘は人間の力によって征服され、昔日の面影はない。

牛肝馬肺峡



蝉の雪を知らないように、見聞の狭い私にとって三峡は、無言の教えを与えていた。「ものが衝突すれば必ず砕け、争えば必ず傷付く」と。戦争ばかりでなく、無用の衝突は避けよと青灘が示していたのである。

牛肝馬肺峡は青灘下流の北岸にある。切り立った写真のような断崖上にある岩石が、一つの黄色い肝臓に似ていることから、人々は之を牛肝と呼んだ。

また牛肝の傍らには肺臓によく似た岩石塊があり、之を又、馬肺と呼んだのである。此の牛肝と馬肺は、何れも地下水中の炭酸石灰が沈澱して出来た鐘乳石と云われている。

清朝の光緒年間に、英国の軍艦が此処に来て、此の馬肺を砲撃し、馬肺の半分を破壊してしまった。その為に現在の馬肺石は不完全なものとなっており、英国が中国の山河を踏みにじった証拠として残っている。何のためか其の目的は判らない。

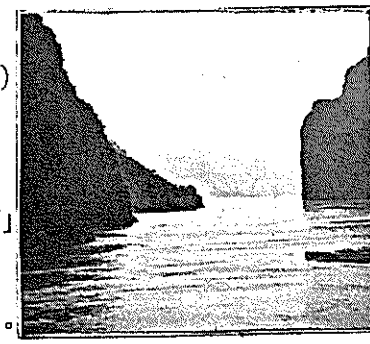
故郭沫若氏は「過西陵峡二首」という詩を作り、この状況を次ぎの様に詠んだ。

「兵書宝剣存形似、馬肺牛肝説寇狂」

崆嶺峡

一樹の蔭一河の流れも他生のの縁とばかり、江流の両岸に眼を光らせていると、最も狭くなった峡谷が近づいて来た。三峡の中でも厳しい最難関の一つ、崆嶺峡である。

崆嶺峡の江中には乱石が林立し、大珠・頭珠・２珠・３珠・和尚石などと呼ばれる岩礁がある。（下の写真にも一部が見える）大珠は長さ２００メートルもあり、伏臥したように横たわって水流を南北に分け、船は其の間を左に避け右に逃げるように航行しなければならない。



江の中心に大岩礁があり、其の周囲の流れは奔騰するような乱流となり、人々は「対我来」（我に向いて来い）と呼んでいる。対我来に向かって船を流すと、岩礁に当る水の回衝力によって、無事に通過できるそうである。「青灘や泄灘は灘の内には入らぬ、崆嶺こそ危険な灘だ」と歌われ、ドイツの汽船を始め多くの犠牲が発生した。しかし今は岩礁が除去されて昔日の鬼門関の面影はない。

黄　陵　廟

河海は細流を択ばず、長江は昼夜やむことなく谿壑を流れて大海に至っているが、人間も度量を大きくし、怠りなく努力すれば報いられると、教示しているようだ。

中国全土の各所に祀られている治水の神「禹」は、此処にも祀られていた。此の黄陵廟も西陵峡の中では重要な名所古跡で、長江の南岸に臨んで背面は山崖となっている。山の蔭で朝の陽光は当らず、写真の掲載が出来ない点は残念だ。

此の廟は諸葛孔明が建てたと伝えられているが、近年、廟址から発見された石碑などの考証では、唐代には既に廟宇があったと証明されたが、当時の建物はすでにない。

現在の黄陵廟の中には明の万暦４６年（１６１８）に建立した禹王殿があるだけで、殿内には夏の大禹の塑像があると通訳から聞かされた。

遠く眼に映る黄陵廟の建物は、江岸の風光明媚な景観に錦上に花を添えたようで、柑橘林に囲まれた金碧燦爛とした古建築は引き立てられ、美しい眺望は何時までも私を引き付けていた。懐かしい古都「開封」の禹王台を想い出していたからである。

黄　牛　峡

三斗坪（地名）には小高い丘が続き、黄陵廟附近では稍々川幅が広くなったが、再び河道は狭くなって万水千山の変化は眼まぐるしい状態だ。

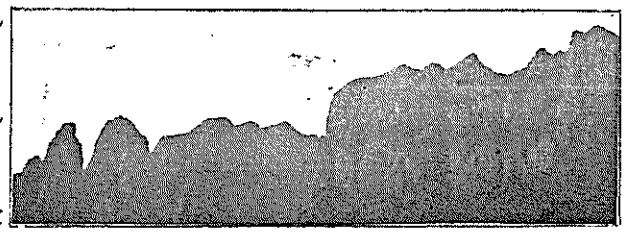
黄牛峡は黄陵廟から約２キロの下流の位置に在る。この山頂に一頭の牛を曳いて立っている人に似た岩があり、人は黒く牛は黄色い岩から出来ているから、黄牛山と呼ばれるようになった。従ってこの附近を黄牛峡と名付けたと云う。

此処も亦、河底には暗礁が櫛のように並び、流れも非常に激しく、遡航する木船は数日を要し、その間は毎日黄牛山を眺めたという事で、４６頁に書いた詩が詠まれたのである。即ち「朝発黄牛、暮宿黄牛、三朝三暮、黄牛如故」である。

今は岩礁は取り除かれて航路は整備されたが、詩に詠われた時代が懐かしい。

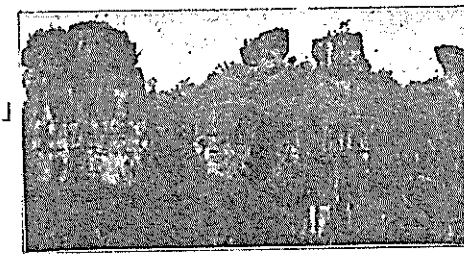
燈　影　峡

燈影峡は名月峡とも呼ばれ、河道は狭く断崖は絶壁の如く立ち上り、奇峰は下の写真のように突き立ち、石柱は空に踊り上がるようである。詩人の形容によると、雲霧は縹緲と漂い、瀑布は水を飛ばし、恰も山中水流の間に懸けられた翠の上に、真珠を撒き散らしたような光景だと賞賛している。



此の峡谷を船上から四周を見渡していると、峭壁（峭は高く険しい）の中に囲まれて山水画の世界に身を

置いた気分に浸るようである。（右は燈影峡）



峡谷の南岸にある山の上には四つの大きな岩が屹立し、其の形が古典小説で名高い「西遊記」の三蔵法師、孫悟空、猪八戒、沙和尚の姿に似ている。孫悟空は周辺を眺めて路を捜しているように、猪八は山道を馬を引いて歩いているように、三蔵法師は悠然と端座し、沙和尚はお経の入った袋を肩に担いでいるようで、すべてが生き生きとしている様相だと、通訳は自慢そうに説明を続けていた。

夕陽が西から山頂を照らす時、或は名月が皓々と輝く時に、遠くから此の四つの巨岩を眺めると、恰も影絵のように見える事から、燈影峡とか、名月峡と呼んだらしい。

南　津　関

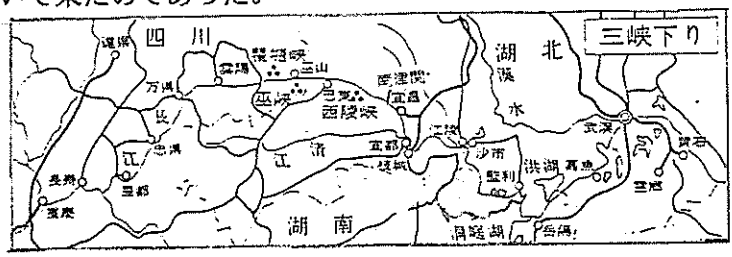
南津関は西陵峡の出口として両側は峻険な崖となり、瓶の頸のように狭くなっている。蜿蜒滔々として万水千山の路を流れた長江は、天然の門戸となっている此の地で阻止され、南津関の激流を過ぎると豁然として江面は開け、江漢の大平野が展開して来る。（現在、南津関は宜昌市に含まれ、旧名は南沱と称した）

西に三遊洞（後記する）のある秀麗幽玄な宜昌峡があり、東は流水が急に緩慢となって無限に拡がり、古来からの要衝の地であった。即ち、「雄当蜀道、巍鎮荆門」の言葉があるように、歴代兵家の必争の地であった。劉備が呉の将軍・陸遜に決戦を挑み、不幸にも「火攻めの計」によって大敗を喫したのも、此の附近である筈だ。また荆州は前記した通り、此の辺一帯から湖北の襄陽あたり迄の古名である。

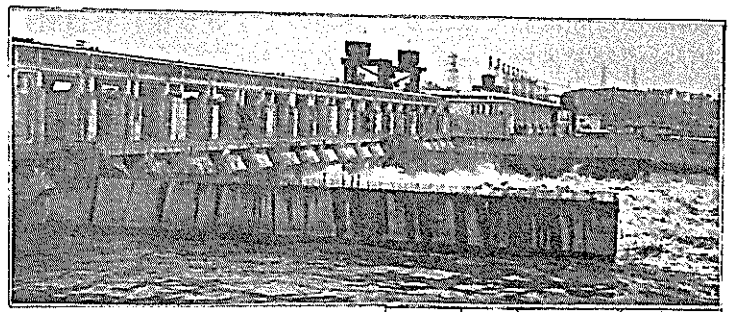
重慶を発ち、船中で三泊して長江を下り、垂涎の的であった瞿塘峡・巫峡・西陵峡の三峡の険を楽しみ、死命を制す巍鎮荆門の南津関に到ったが、古木に寒鳥が鳴くように寂しく、別離の時をむ迎えた。

数奇の人生を歩んだ劉備や屈原、それに王昭君、更に匪躬の節を尽くした関羽と張飛の古里・古戦場など、数々のゆかりの地を訪れた事は、得がたい時を得た感がする。

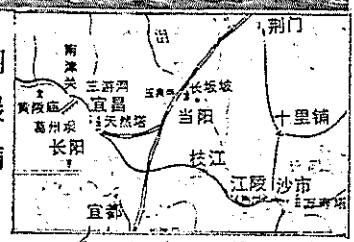
巫山の夢を見せてくれた雲水漫々の三峡を去るに当り、男女の仲ではないが、落花流水の情が湧いて来たのであった。



葛州覇ダム



宜昌にある断江山・神龕峡・扇子峡など、（龕は箱）天然の関門にちなんだ名称の深山幽谷の峡谷を通過すると、怒濤が怒濤と激突して満々と水を盛り上げ、急流が岩を噛む情景は豹変した。対岸は朦朧として霞み、湖のようになった長江は威風堂々として、吉兆繁栄の姿を展開し、無限の緑野が拡がっている。昔で言えば「千舟は満帆を上げて競い合う」という形容の遠望である。



（上はダムと位置図）

此の南津関の下流、宜昌との中間附近に葛州項ダムがある。このダムは世界の大河である長江の本流を堰止めて造り、約１０年の歳月を要したと云う、中国の誇る大事業であった。

未だに水上生活者の多い中国のことから、ダムの通過の順番を待つ大小の船舟の群は、運河銀座という景観を呈していた。即ち、鉄道の終点は宜昌であり、鉄道のない長江沿岸地域の輸送は、船舶に依存するしか手段がないからである。

我々の乗船も約１時間を要して運河を通過した。此のダムは水利を主体として１９７０年１２月に起工し、今は２１の発電所が設備され、その総容量は２７１、５ＫＷ、年間発電量は１４１億ＫＷである。全長２５６１メートルにも及ぶ堰堤には、珍しく土砂を吐き出す２７の土砂吐門が設備され、最大排水量は毎秒１１万㎥であるという。黄河ほどではないにしても、赤色をした江流は莫大な量の土砂を運ぶからだ。

７０メートルの高さの堰堤の下に設備された航行の水路は、運河方式となっている為に排水に時間を費やし、漸く開放されたように宜昌に向かって船足を速めた。船上からダムを振り返って見ると、膨大な量の水が一挙に爆布となって落下する如く、竜虎の勇を誇って逆巻いていた。

宜　昌

西陵の真珠といわれる美しい宜昌港に接岸すると、発展の著しい近代都市が展開していた。宜昌は三峡の東口の北岸に位置し、四川省と湖北省の咽喉部と云われ、三峡を出た長江が一写千里に拡がる江畔にあるため、古来から戦略要地であった。日中戦争当時も日本軍の最前線師団司令部が置かれていた街である。

宜昌の古名は「夷陵」、漢代には夷陵県が設けられ、その後、西陵・宜州・拓州・

峡州などと呼ばれて来たが、清朝の１７３５年に宜昌府に昇格、１９４９年、南津関などの近郊を合併して宜昌市となり、総人口は約４１万である。

戦国時代の末期、秦の将軍・白起が楚を討った際に、宜昌は戦火で焼かれて平地と化してしまった。中国には「夷為平地」即ち、土地を削って平らにすると云う言葉があり、其のことから此の地を「夷陵」と呼ぶようになったのである。

三国時代に呉・蜀が戦った有名な「夷陵の役」で、劉備玄徳は関羽の仇を討ち、我が領地であった荆州の地を奪回せんものと、自ら大軍を率いて呉軍に向かった。一方の呉の孫権は将軍、陸遜に５万の軍を与えると共に、「三峡の喉元を死守して蜀に備えよ」と指示した。

陸遜は風の勢いを利用して、蜀軍の布陣７００里（３５０キロ）に亘る４０数個の軍営を火攻めにし、大勝を拍した。敗戦の劉備は夜を日についで白帝城まで兵を引き上げた事は、白帝城の項で詳しく記した通りである。

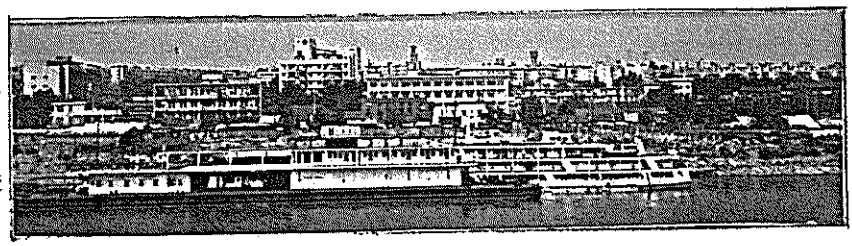
これが「陸遜火焼連営七百里」の故事となり、中国の古代戦史の「弱者が強者に勝つ」という有名な戦訓となった。

然し乍ら、私の貧弱な兵学の経験から考察すると、「書を以て馭す者は馬の情を尽さず」という語が至当かと思う。名を遂げた劉備は人徳の高い人物であったが、兵法家と云われる人ではない。軍師・諸葛亮孔明の知謀を始め、桃園の盟を交わした関羽・張飛など、勇将の活躍によるところが多大であった。

書物で学んだ乗馬法を以て、馬を馭しても、馬の癖や性質を知らなければ、自由に乗りこなす事は出来ない。即ち、机上の理論だけでは実際の役に立たない、という事だ。陸大の兵学教官がビルマ戦線に於て、大失敗を演じたのと同じではないだろうか。

戦国策に「諺に口く、書を以て馭す者は、馬の情を尽さず、古を以て今を制す者は、事の変に達せず、故に法に従う功は、以て世に高ぶるに足らず、古に法をとる学は、以て今を制するに足らず」と述べている。

１８７６年のチーフ条約によって開港された宜昌は、湖北西部の政治・経済・文化の中心地となり、街は生気に溢れて繁栄の姿を見せ、煙突は林立して工場の数も多い。船舶も江上に群をなし（下の写真は宜昌港桟橋）、古い街、古戦場の街・宜昌の姿は何処にも見えず、青春の気に満ちた街のようであり、今後の益々の発展を祈りたい。



三　遊　洞

宜昌市街の川辺に３キロにも及ぶ公園が続き、オレンジ並木に見惚れながら三遊洞へ向かった。

三遊洞は宜昌市の西北１５キロ、長江北岸の西陵山の山腹にある。此処は西陵峡の峡口を背にして下牢渓に面し、北は獅子山に、南は南津関に接した洞窟で、湖北省の名所古蹟でもある。又、重要文化財にも指定されているから、先ず第一に案内された。（購入した地図による）

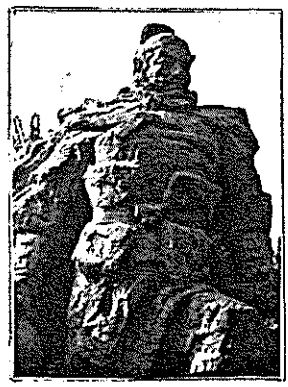
「夷陵（宜昌）に夷山（西陵山）あり、夷山には名洞多しといえども、三遊洞が最も著名」と宋の代から伝えられた言葉がある。

唐の元和年間の８１９年、名声の高い詩人・白居易は、元稹、それに白居易の弟・白行簡の三人が地方赴任の途中、夷陵で出合い、三人一緒に此の洞を訪れ、それぞれが一首づつ詩を作った。その時、白居易は洞窟の壁の上に「三遊洞序」を書き残し、それ以降「三遊洞」と名付けられたと云う。これを「前三遊」と呼ぶ。

又、宋代の著名な文学者であった蘇洵・蘇軾・蘇轍の父子三人が、四川省の眉山から科挙の試験の為に汴（べん）京（当時の宋の都で今の河南省の開封、我々の古戦場）に赴く途中、この夷陵を通って此の洞を訪れた。この三人もそれぞれ詩一首を作り、洞壁上に書き残したと伝えられ、これを「后三遊」と名付けられている。

宋代の詩人であり文学者でもある欧陽修・黄庭堅・陸遊なども此処を訪れ、詞詩を作って石壁の上に刻んでいる。

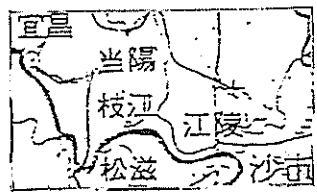
「四望皆山、一峰出衆、峻嶺之間、旁開一洞」（四周は皆な山で、その中に一峰が抜きん出て聳え、峻嶺の中に一洞が開いている）これは古い詩に詠まれた三遊洞の地勢だが、三遊洞は冬温かく夏は涼しく、覆いかぶさるような石灰岩の鐘乳洞である。



洞は二室にわかれ、其の中に宋代以降、ここを訪れた人々が残した碑刻や壁刻が４０以上も遺され、白居易ら三人の白い石像が立っている。（上の写真）

三遊洞の細道を登ると三層の楼閣が聳え、其の下に右の写真の「張飛の像」が、宿敵の魏や呉を睨みつける顔付で立っていた。像の西側には劉備の養子・劉封が築いた城址の石垣が存置し、張飛が夷陵を守る為に城の上で大太鼓を叩いたとの伝説も残り、三国時代を彷彿として想起したのであった。

9月24日



夜の長江下り

羊腸のような三遊洞の曲がりくねった細い路を一巡し、昔の詩人に学んだように、天上世界の白雲郷を夢見て神気を感じだと、讃辞を贈りたい心地であった。桟橋への帰路、夕陽を送って素月を迎え、暗い「浜江公園」に下車して江岸を散策した。

夜の7時、西陵号に乗船すると本日は宜昌港に停泊せず、8時に出航して洞庭湖に向かった。此の間に見るべき景勝地がないから、夜間運航になったと思われたが、多くの古戦場の地帯が続き、私としては一望したい所であった。

上記のような心境から、長江の沿岸・近郊の当陽・江陵・沙市の歴史を記し、更に一層、古い歴史に想いを馳せたいのである。（上は宜昌～洞庭湖間の要図）

当　陽

「一淵に両蛟ならず」即ち、一つの淵に二つの竜は棲めず、同じ所に二人の強者はおられない。必ず戦って何れか一方が敗れ、両雄並び立たずという時代が三国志の時代であり、絶え間なく激突が繰り返された。

紀元２０８年９月、魏の曹操（都は河南省の許昌）は河南討伐の大号令を下して荆州に攻め入り、直ぐさま襄陽（湖北省の北部）を陥落させた。兵力寡少の劉備の軍勢は南の江陵に向かって敗走したが、数万の窮民をかかえた軍の退却は遅々として進まず、劉備自身も身に十数ケ所も負傷したほどであった。

徳の高い劉備は領土の窮民を戦闘に駆り立てず、「教えざる民を以て戦うは、之を棄つと云う」、論語にある通り、何も訓練しない人民を戦争に駆り出す事は、野原に棄て殺すのと同じだ、として軍の前に避難させ、軍の退却の妨害になったのである。

敵に包囲された当陽の「長坂橋の戦い」でも遂に敗北に帰した。しかし其の時、劉備の股肱の臣の一人「趙雲」は、劉備の一つぶ種の幼君「阿斗」を懐中に抱き、ただ一騎、曹操百万の軍勢の中を突破した古戦場が此の地である。「死を視ること生けるが如く、死を視ること帰するが如し」と、死闘を身を以て体験した我々には充分、其の心中を察することが出来るのである。

赤壁の合戦（２０８年１０月、後記する）も大勝に終わった２１１年、劉備は益州に向かったが、孔明と関羽は荆州に残った。しかし曹操は呉の孫権と同盟を結び、荆州攻略の大軍を起した。それは劉備が漢中王になった２１９年７月である。

荆州を守る関羽は強大な魏・呉の連合軍を一手に引き受け、三面六臂の死闘を演じ

て戦ったが、不幸にも左腕の肱に毒矢を受けてしまった。悲運の関羽が最後の拠点とした当陽の「麦城」という小城で、２万の守備兵を以て魏・呉連合軍の精鋭に当った。

忠魂不屈の名将・関羽も遂に力が尽き、捕縄の屈辱の身となり、全身に毒がまわって同年１２月、従容として死についた。享年５８歳、人生は風灯石火の如しである。

関羽の没後、その幽魂が各所に現われ、或は窮民を救い、或は呉の将軍・呂蒙を悶死させたという伝説がある。義の為に生き義の為に死んだ人柄を称賛して、後世の人々は、そうせずには居られなかったのであろう。

中国各地に関羽を祭った関帝廟があった。関羽を関帝というのは、彼が北宋末以来、歴代の支配者によって神格化され、明の１６０５年に関帝君に封じられたからである。

江　陵

湖北省南部の同県名の県庁所在地で、武漢の西２００キロ、長江の左岸に在り、交通上、極めて重要な位置を占めている。

其の開発は古く、春秋時代には楚国の都・郢が此の北部にあり、此処には渚宮という別宮があった。秦代の南郡の地で、荊州の名称は明代以降の事であり、城壁は蜀の関羽の築いたものと云われている。

４３頁の紵帰・屈原沱の項で前記したが、紀元前２２３年、楚は秦に滅ぼされ、秦の始皇帝の天下統一の業が成った。しかし楚の人々は秦に対して烈しい恨みを抱き、「楚は三戸たりといえども、秦を亡ぼすものは楚であろう」と云っていた。

時が移って群雄割拠する中で、沛（徐州の北）の人「劉邦」と中原に覇を争った「項羽」も此の江陵出身である。しかし項羽も「垓下の戦」に負け、四面楚歌の中で死んだのであった。

漢代には江陵県と呼ばれ、南郡または荊州の治所となり、唐代は江陵府、元代は中興路、明・清代は荊州府の首都となった。其の間、６世紀には後梁、１０世紀には荊南（南平とも云う）の国都となり、規模も拡大したという歴史も残されている。

然し乍ら、南方８キロの沙市が１８９６年、通商港として開港してからは、以前ほどには発展していないようだ。

『巫山の夢』という有名な言葉の発祥の地も楚の江陵である。屈原の仕えた楚の懐王が、夢に巫山の神女と会った故事から、男女が相会して情を交わす事を云い、「雲となり雨となる」「朝の雲暮の雨」と同じく、男女の仲の深いことを云うのである。

楚の懐王が昼寝をした時、夢の中で巫山の一婦人と枕席を共にし、「妾は朝には雲となり、暮れには雨となって、あなたから離れない」と言った故事から来たのである。巫山に下船して小三峡に遊んだことに、私も「巫山の雲雨」を抱いたのであった。

沙　市

江陵南方の沙市は長江の北岸に在り、沙頭または荆沙とも呼ばれ、府城（江陵）とは殆ど接続している。「小漢口」ともいわれる沙市は開港場の一つで、明治２９年の馬関条約で開港され、戦前の埠頭附近には倉庫・税関・領事館・貿易関係の建物が並び、日本人居留地もあった古い町である。

此の地は唐・宋の時代から栄え、最も殷賑であったのは、長髪賊が南京を陥れた当時であった。それは四川往来の船が賊乱の危害を恐れ、此処から以東に航行することを止めた為、勢い百貨集散の地となったのである。

この周辺一帯は漢代の荆州の地で、古来から戦略要地であった。劉備は曹操に対抗して此処で挙兵し、呉と協力して「赤壁の戦」で大勝利を収めた後、荆州城を築いた。町外れに其の二つの城門が残されていると云う。

市内にある春秋閣は、敵に捕らえられた関羽を祀る廟で、関羽の人徳と奮戦ぶりが窺われる。彼一人の力が、兵２万に匹敵すると恐れられた関羽は、義（約束）の人として尊敬されて各地に廟が建立された。約束を重んじる商人達から、商売の神様としても慕われているのである。

湖　北　省

三峡の巴東から湖北省に入ったが、文の構成上、此処から其の概要を記したい。

もと湖南省と合わせて湖広省（両省の地図は次頁）と呼んでいたが、１６６７年、洞庭湖を境にして南北に分けて湖北省となった。

中国の中央部に位置し、長江の流れは悠揚として西から東に通じている。地形は東西は長くて南北は短く、西は大巴及び巫山の両山脈により所謂、楚西山地を形成し、北も亦、諸山脈が起伏しており、東に九宮、武陵の二山脈がある。

長江は此の間を西方から流れ、洞庭湖を始め幾多の湖沼を造ったのち、漢口、漢陽の中間で漢水の大流を合わせ、悠大さを加えて東へ流れている。

このように東北西の三方には山脈を巡らし、中・南部は一面の大平原で湖南省に続き、数多くの河川が此処に流注するため、一大沢地の観を呈しており、此の地が如何に天然の要害をなしているかが判る。

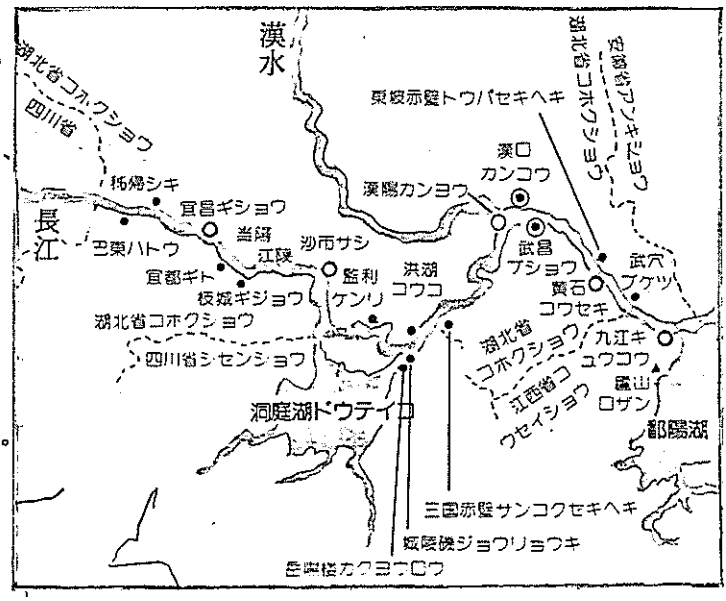
交通運輸の点から見ても、長江を始め漢水、洞庭湖、その他の水路により、深大な背後の地とも連略し、古来から「九省の会」と称され、交通上の優位が顕著である。

昔は南蛮の地として鄂省或は楚北と称し、省内の武漢の武昌を鄂と呼び、湖南を楚

南と呼んでいた。

禹貢の時代には荆州の地と称し、周も同じく荆州と云い、春秋時代に楚国の外、幾多の小国に分たれ、戦国の時、楚が強大になって他の小国を併合した。

漢代になって江夏・南郡の二つとなり、三国時代の後、晋によって一国となる。宋の時には再び荆州と呼ばれ、元代は湖広行省の一部となり、清になってからは洞庭湖の北にあるから湖北となって今日に至っている。（省都は武漢の武昌）



湖　南　省

中国の中部に位置し、省域が洞庭湖の南に拡がっているから、此の名称があり、湘江が省内を南から北に貫流している為に湘省とも言われている。

地勢は概ね丘陵地に属し、平均高は４００メートル程度である。湘、資、沅、澧の四水は何れも西南に源を発して東北に向い、洞庭湖に入っている。

古くは苗（ミヤオ）、瑤（ヤオ）などの非漢民族の居住地であったが、戦国時代に楚が開拓を始め、秦時代には長沙郡が設けられた。

その後、次第に郡・県が増置され、唐代には江南西道、宋代には荆湖南北路、元代以降は湖広省に属した。しかし前記したように、清の康熙６年（１６６７）、洞庭湖以南の地を分けて湖南省とし、現在に至っている。

現在の民族の大部分は漢民族であり、西部の山岳地に少数民族が分布し、其の数は省内人口の約１、５％に過ぎなが、大陸中部にも未だに先住民族が存在している。

湖南省の省都は「長沙市」で、日中戦争時は何回かの争奪戦が展開された所である。

これから訪れる洞庭湖畔の岳陽は湖南省に属しているが、その後、長江上から眺望する有名な「赤壁の戦」の古戦場は湖北省であり、勿論、明朝到着する武漢三鎮も湖北省だ。長江が概ね南北両省の省境となっているものの、確然とはしていない。

洞　庭　湖

「老眼早く覚めて常に夜を残す」の言葉どおり、年が老いてくると目覚めが早く、夜明けまで睡眠する事は少ない。９月２４日の今朝も４時過ぎに眼を覚まし、船員に通過地点を尋ねると、洞庭湖の西の「監利」（上の要図参照）だと答えた。期待していた江陵・沙市は暗夜に通過してしまったが、之は仕方がない事だ。

洞庭湖の玄関口の「城陵磯」までは未だ時間があり、今日の圧巻である洞庭湖と岳陽楼に想いをよせ、「楚雲湘水」の地を想像しながら白々として来た東の空を眺めた。

長江の川幅は３キロもあろうか、両岸には楊柳が延々と茂り、広大な平地を江流は緩やかに流れ、「百川は動きを息まず」即ち、動かぬ者は進歩がないと、隠居生活の私を責めているような感じであった。

此の大湖沼地帯での大軍の用兵は困難であり、日中両軍の悪戦苦闘が窺われたが、私のように、時勢の移り変りに気が付かず、何時までも昔の事を思い出す愚考は、これも又「舟に刻みて剣を求む」と同じである。

船室の窓ガラスは水滴で曇り出し、鹿島立ち以来の晴天は小雨の天候に移り、期待する美観の湖の観賞が気懸りになって来た。

城陵磯に接岸して桟橋を渡ったものの、湖の影は霞んで網膜に写らず、我々を迎えたのは垂れ込めた雨雲であった。恰も顔面憔悴した屈原が流罪の身となって彷徨したことが、心の何処かに浮かんで来た。以下、洞庭湖の概要を述べることにする。

洞庭湖は湖南省にある中国第二の淡水湖で、三湖五渚、九江等の別名がある。

面積は季節によって変化が大きく、琵琶湖の約６倍もあり、三方を山地で囲まれ、北は長江を隔てて湖広平野に臨んでいる。雨季の夏は長江の水が湖に流れ込み、また南から湘、資、沅、澧の四水が注入して之に加わり、大海のように船舶の航行は自由である。之に反して冬と春は長江の水位が低下し、湖水は岳陽の北東の「城陵磯」から長江に排水され、湖底の大部分は乾き、航行は困難となる。

冬は陸地となるから、「荘子」に「洞庭の野」と書いてあるのは此の為であろう。洞庭湖は長江の流水量を著しく調節しているが、反対に長江から多量の土砂が流入し、その量は平均して年に厚さ７センチに及ぶという。

湖中には島が多く、特に岳陽楼の全面の洋々とした湖上の遥かに、「君山」があり、別名を洞庭山、或は湘山と呼ばれ、仙人の棲む所とされていた。（標高は１２８ｍ）

島の上には舜帝の死を悲しんで入水した「湘君」の廟碑があり、此処からの景観は

雄大だと云う。広洋とした湖水が天際に尽きる所に、舟の帆が悠々と風を孕み、君山の翠緑は水中に映出し、景勝は偉観を呈していると云う。

湘君とは娥皇及びその妹の女英である。共に堯の女で舜（約４０００年前）の妃であった。舜帝が南巡して蒼梧（あおぎり）の野に崩御すると、娥皇、女英の二妃はこれを追っても及ばず、俱に慟哭して其の涙は竹を潤した。後世この地方の竹に紋点があるのは、その涙の為だと伝えられている。

その後、二妃は湘江に身を投じて殉死したので、君山の下に廟を建立して祀ったと云う。君山とは即ち、二人の君妃にちなんで付けた名称である。

李白は娥皇、女英の死を次ぎのように詠んでいる。

洞庭西望　楚江分る　　水尽きて南天　雲を見ず
日　長沙に落ちて秋色遠く　　知らず　何れの処にか湘君を弔う

城陽磯からバスに乗車して人口４０万の岳陽市へと進行した。「山雨来らんと欲して風楼に満つ」、というような天候かと心配したが、雲烟過眼、小雨は止んで愁眉を開いた。しかし長江を呑んだような湖影は眺えず、重慶と同じく霞んだ世界だ。晴天に順風満帆の出船、入船の光景は遂に見えず、千金を失った感じであった。

添乗した通訳は、、湖には７０種の貝があり、それが積もって君山が出来たと説明したが、理屈と膏薬は何処にでも付けられるもので、洋の東西を問わない事だ。
又、１００種類に及ぶ魚類が棲み、「チヨウザメ」が最も大きく、漁獲量は白魚が第１位を占め、鴨も多く、紙の原料である「いぐさ」は全国の４５％だと、流暢な日本語で語り続けた。日本人をからかうような話では、「カンナ」という名の魚がおり、腹から「カンナクズ」を食べて背から出すのだと、笑いながら喋っていた。

岳陽市は静岡県の沼津市と姉妹都市である。茶の産地の静岡同様、岳陽にも君山茶という銘茶があり、茶と豆、胡麻、しょうが、を混ぜたものだそうである。

通訳嬢の揶揄な話を聞くこと３０分、眼前に岳陽楼の大楼閣が聳え建って来た。

岳　陽　楼

高さ１５メートルもある三層の名楼は、天下の逸材を麾下に集め、周りを睥睨して天を衝くような偉容であり、其の楼の下で下車して自由見学となった。

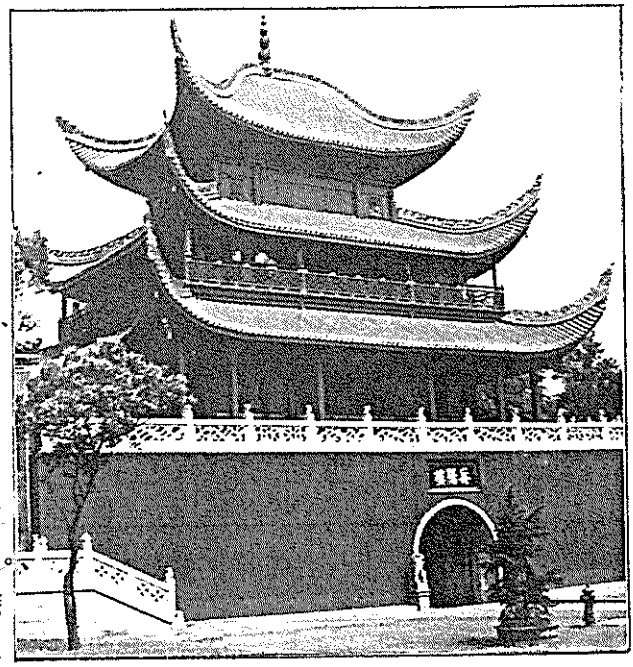
岳陽は又の名を岳州と呼び、古の巴陵郡であり、宋以来は岳州と呼ばれていた。其の位置が湖南北部の咽喉を扼して、洞庭湖と長江とを通じて水運の便は四通八達し、１８９８年に開港場となった。

岳陽の府城には東の朝陽、西の岳陽、南の鳳儀、北の楚望の四門があり、岳陽門外に有名な岳陽楼がある。此の楼上から洞庭湖を眺める事を夢見て訪れたのであった。

楼の前には岳陽楼の歴史を刻んだ黒石の碑があり、丹念に読みながらメモを取った。東漢の末期の（２１０～２１７）三国時代に呉国の将軍・魯粛が、水兵を訓練した時の閲兵台であった。

南北朝時代には巴陵城楼と呼び、唐の初期には西城楼と呼称した。

唐の７１７年、台の跡に初めて建てられた此の建物を岳陽楼と名付けた。武漢の黄鶴楼、南昌の滕王閣と共に江南の三大名楼である。



宋代の１０４５年にに三層の楼閣に修築し、清代の１８８０年にも大修理をするなど、数々の修理が行われ、１９８３年３月、現在のように修復されたのである。（上の写真は岳陽楼の正面）

三層建ての楼閣の殆どは四本の楠の柱によって支えられ、屋根は兜式に丸みを帯びて先端が鋭く反り返えり、曇天の空に黄金の瑠璃瓦が燦然と輝いていた。

一階の玄関の左に、清代の道光の書いた「印心石屋」の石刻板があり、その他、多くの詩刻が四周を囲んでいる。三階は杜甫、李白、白居易らが嘗って杯を挙げながら詩を吟じた所であり、紫檀の大きな机が置かれ、窓際に「水天一色、風月無風」と李白の詩が掲げてあった。

また毛沢東の書いた杜甫の長文の詩も中央に飾られていたほか、三階の外面には故郭沫若の筆により、青地に金文字で「岳陽楼」と書いた額が掲げられ、三階に身を置くと詩人の仲間に入った感じさえ抱くようである。

眼下に洞庭湖を瞰下し、遥かに君山の翠を眺望する絶佳な風光は、幕を垂らされたように一物も眼中に入らず、杜甫の「岳陽楼に登る」の詩を代用して光景を憶いたい。

「昔聞く洞庭の水、今登る岳陽楼、呉楚東南に拆け、乾坤日夜浮かぶ、

親朋一字無く、老病孤舟有り、戎馬関山の北、軒に憑りて涕泗流る」

昔、話に聞いた洞庭湖の水は広がり、今、岳陽楼に登って景観を眺めた。昔の呉と楚は湖によって東・西に切り裂かれ、天地の万物は昼も夜も水面に映って浮かんでいる。親族や友人からは一字の便りもなく、老いの身には、一隻の小舟があるだけだ。

国境の山岳地帯の北では、今なお戦火が続き、楼の手すりにもたれて、時世を思い、とどめのない涙にくれる私である。

大暦三年（７６８）春、杜甫は二年近く滞在した夔州（３３頁に前記）を離れ、江陵、公安などの地を経て、岳陽に到着した時は冬になっていた。彼は洞庭湖畔にある三層の岳陽楼に登り、老病漂泊の身の上と、戦乱のやまない時世に深く心を痛めたのである。呉・楚は共に春秋時代の国で、呉は洞庭湖の東、楚は西及び南の地域を領有していた。

【乾坤＝天地、ここでは天地の間の万物。一字＝わずか一字の便り。戎馬＝軍馬のことで、戦乱をいう。関山＝関所のある国境地帯の山で、この年の８月、吐蕃（チベット族）が今の陝西省や寧夏自治区に侵入した戦乱。軒＝手すり。涕泗＝涙。】

岳陽には１９７２年、杜甫を記念して湖畔に「杜甫亭」が建てられ、その他、１２００年前の唐時代に建った「慈氏塔」等があるが、洞庭湖の君山と共に、滞在時間が少ない為に見学は許されなかった。是非再度、足跡してみたい洞庭湖畔である。

汨　羅

私自身としては洞庭湖畔の最大の憧憬の地は、岳陽南方５０キロにある汨羅の屈原ゆかりの地であった。救国の一途に生きた彼を偲び、簡単な一項を掲載する事にした。

４３頁の紵帰の項で書いた屈原（３４３～２８５？）が、江南に流されたのは彼の４８、９歳の時で、郢都（江陵）を出て長江を下り、また鄂渚（武昌）から湘江に向い、沅江を遡るなど、凡そ８、９年の年月を江南放浪の間に送ったようだ。

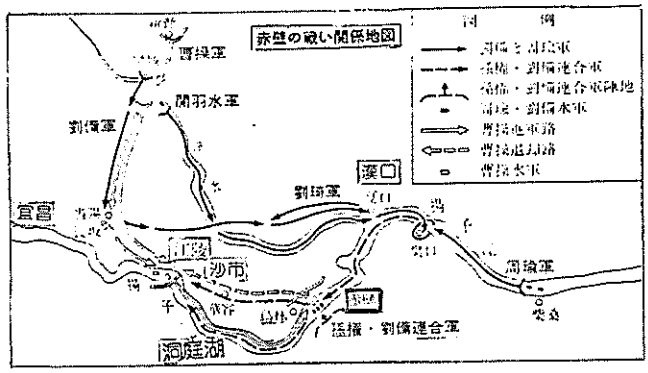
楽しみのない命を悲しみ山中をさまよっても、心を変えて俗に従おうとはしなかった。忠誠の士は昔から皆、このような運命であった。今さら人を怨む事はない。愁苦窮死は覚悟の上だ。鸞鳥や鳳凰は遠ざけられて、燕雀や烏鵲が堂に巣を懸ける世の中だ。自分一人、忠信の心を抱いて空しく佇み、何時も遠い所に行ってしまおうと云う彼の心境であった。

屈原の放浪生活は日に日に行きずまり、年齢は５０歳を越えた。一方では楚の都はたえず秦に圧迫され、祖国の運命は累卵の危きであった。

君を諫めても聞き入れられない自分が、若し重い石を背負って淵に沈もうとも、結局は何の役にも立たないのではなかろうか。屈原の生と死の間を迷い悶えた放浪の日々に、もはや何の希望もなかった。あるのは絶望と空しさだけである。

言いたい事は沢山あっても、君は耳目を蔽って何も聞いてくれない。いっその事、このまま死んで行こうと決心した。屈原が汨羅に沈んだ日を５月５日と言い伝えられ、此の日を「浴蘭節」と云い、今でも蓬を摘んで門に懸け、邪気を払っている。

赤　壁　の　古　戦　場



楚雲湘水の地で遊んだ半日を憶いながら、西陵号へ午後２時に戻り、途中、あの有名な赤壁の戦いの場を眺め、武漢へと城陵磯桟橋を離れた。然し乍ら、私の船室は深夜になってもクーラーが止まらず、船員に訴えても故障の修理は出来ない状態になっていた。大陸的気候は９月の末でも昼間の残暑は厳しく、夜半からは急激に気温が降下して寒く、その性か咽喉に痛みを覚え、熱があるようだ。

赤壁の通過は午后４時半頃と聞かされ、御土産持参で操舵室に船長を訪れて手渡した。丁度、時間通りの其の頃、長江の北岸に一つの小高い丘が近づいて来た。赤壁だ。「弓は袋に太刀は鞘」の泰平な世の中だが、三国志の名場面は見逃せないと、カメラを構え続けて数枚の写真を撮ることができた。（上は位置の要図、）

紀元１９０年代の華北の支配者であった袁紹が陣中で没し、その結果、曹操は劉備と呉の孫権の二人を強敵として残す外には、威令の届かない所はなくなった。機を見て劉備・孫権を討とうと企んだ事は、天下統一を狙う武将としては当然である。

後漢の献帝の２０８年、曹操は８３万の大兵を率いて劉備・孫権と決戦するため、長江へ向けて南下した。之に対して劉備・孫権の連合軍３万は、此の地「赤壁」で迎撃し、（湖北省嘉魚県西方の長江上）曹操軍は大敗を喫した有名な決戦である。

これより先、曹操に追われた劉備は、荊州（湖北・湖南一帯）を根拠地としていたが、先年、三顧の礼を以て迎え、臣下とした諸葛孔明を呉の孫権のもとに派遣し、孫権を説いて呉との連合の約束が成立した。

孔明は同門下生の龐統（ホウトウ）を江東に呼んで助力を乞うと、彼は謀計を用いて曹操の陣営に入り込み、「水軍の事を良く知らない曹操に術を授けた。「連環の計」である。

時に、曹操の兵士は青州（山東省）、除州（安徽省）などの北方の出身者が多く、水に慣れない為に、嘔吐して死ぬ者が続出していた。

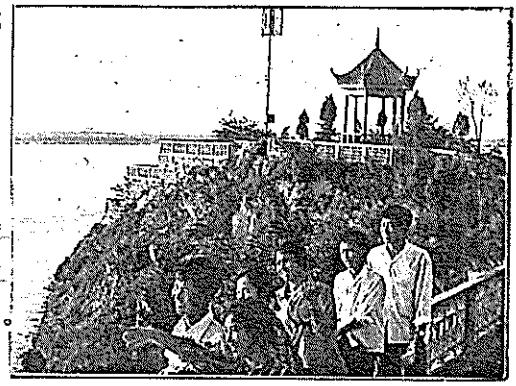
龐統は曹操に対し、「水病を防ぐ手段は唯一つしかない」と、次ぎの計を指示した。

大小の軍船を一箇所に集めて一列にし、船首、船尾を鉄の鎖で結んで繋ぎ合わせ、船から船への往来は、長い踏板を架け渡せば、兵士は平地を歩くように揺れを忘れる。即ち、全船を以て水上に平地を造るのである。そうすれば、たとえ荒天の日でも巨大な波浪でも、船は揺れることもなく船中は安穏である。そうすれば嘔吐のような水病

も去り、いま倒れて臥している兵も起き上がる事が出来る、と云う策略であった。

この意見を聞いた曹操は、「軍師の良謀によって呉軍に勝つ自信を得た」と喜んだ。

これに対する寡少の呉軍の策は、東南の風を利用した「火攻」策であった。この冬の季節に果たして南の風が吹くか、大賭博である。



私の戦闘の体験では、「糧を捨て船を沈める」と、形容するような雌雄を決する決戦では、決死の覚悟は自分に運ががあると信じさせ、乾坤一擲、衆敵に挑む心理に立たされたと思う。（上は碑の建つ赤壁）

孔明から此の策を指示された孫権の武将・周瑜は、其の部下・黄蓋に火船２０隻を用意させて、攻撃準備を整えた。火船とは、船内に燃え易い葦を積み込み、硫黄や焔硝を塗り、その上を桐油を塗った紙で覆ったものである。（終戦後しばらく、私自身は搾油業を営み、桐油の製造の経験の上から述べると、桐油は乾性油として傘や提灯に塗る油で、紙を強くして水をはじく性質があり、軍師は博学だったと感心する）

２０８年１１月２２日、一生一代の孔明の大博打が的中して東南の風が吹き、火船は一斉に火を噴いた。風は火を助け、火は風を呼び、炎々と燃えた火船は箭の速さで、曹操の水軍の船団に突入した。

一瞬にして敵中は火焔地獄と化し、長江一面は真昼のように煌々と照らし出され、次々と火焔は火焔を呼び、烈風はうなって火焔は渦巻き、鉄鎖で繋いだ船を焼き尽くし、水底に沈めたのであった。

此の戦いの結果、曹操は南下を諦め、呉の孫権の江南に於ける地位が定まり、劉備は荊州から更に益州を其の勢力範囲とし、ここに諸葛孔明の「天下三分の計」が成立し、三国分立の大勢が確立した。後世の人は赤壁の戦いを次のように詠った。

魏呉、争闘して雌雄を決す　　赤壁船楼、一掃して空し
烈火は初め張りて、雲海を照らし　　周郎（呉の周瑜）、曽て此に曹公を破る

再び私の体験から言えば、「素引の精兵」即ち、理論だけでは実戦の役には立たず、体験から策が生まれるのだ。曹操軍の方は、「月夜に釜を抜く」格言のように、大軍を擁した油断が重なり、良い軍師が得られなかった事が、一大敗因ではなかろうか。

一方の劉備・孫権の連合軍は、孫子の「近を以て遠を待ち、逸を以て労を待ち、飽を以て饑を待つ」という兵法の通り、遠方から来る敵を鋭気を養って待ち構え、其の疲労に乗じたことと、優秀な軍師を得たことが勝因ではないだろうか。

船旅の回顧

勝敗は兵家の常だが、魏の大軍に対した蜀・呉の連合軍の「苦肉の策」が、僥倖とも思える名声高い「連環の計」を生み出し、後世にまで称歓され、功名を白帛に垂れた赤壁の古戦場を、眼光烱々として眼底に焼き付け、縹渺とした大河を航行する中に、何時までも其の映像が残り、三国志の想い出を一層深くしていた。

重慶を発って早や五日を経過し、貌は万千の波濤のように刻々変化する三峡下りに始まり、豁然と開けた洞庭湖畔など、山水を堪能した身の幸福を噛みしめ、「古川に水絶えず」と云うのか、古い歴史の里が連綿と続き、其のまま長く絶えない事を祈って止まない心境であった。

深山幽谷の清風や山間の名月、山水に煌々として昇る旭日、西山に沈む夕陽の景観など、「月を握り風を担う」と形容するのか、表現し難い喜びを享受して来たが、旅は待つ間が花というように過ぎ去り、一炊の夢の感じさえしたのであった。

三国志を繙くと、殆ど総てが戦争の世界であった。甚大な犠牲を払ったことを想起すると、一将功成りて万骨枯るだ。孫子の兵法にある通り、智によって勝つ事を第一としなければならない。其処に政治の世界が存在するのである。

武器を使用し、城を攻める愚策の戦闘の連続だったが、過去の幾多の戦争は、戦争の為に戦ったもので、平和の為に行われた戦争は一度もなかった事を、我々は後世に伝える義務がある。

幸か不幸か私は戦中に、中原に鹿を逐う三国志初期の戦場であった華北に身を置き、この度は、蜀から楚・荆・呉の三国志後期の地に足跡を残した事は、得難い時を得たという感じであった。

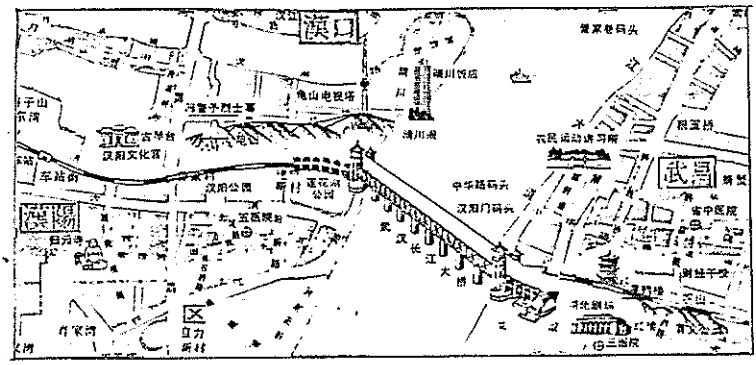
其の回顧の中から、戦時中の尽忠の精神の言葉よりも、戦争は人間社会の生活問題を、何一つ解決できないと言う事が結論である。戦争をなくす為には戦争の本質・実相を知らなければならず、本来、受動的に死中に活を求めたものが戦争であった。原理は永遠に古く、永遠に新しいものであり、古くて新しいものが原理である

然し乍ら、人間世界の現実は甘くはない。「治にして乱を忘れず」という名言は忘れてはならずと、附言して置かなければならないが、之は本質的に別な事だ。

年老いて我が人生を回顧する時、若し、過去の人生に第二版があるとしたら、私は校正したいという考えが浮かんで来た。白骨街道で友の屍を踏み越えて戦い、戦後は専ら犠牲者の慰霊に心を砕き、真に人間的な価値とは何んでなんだろうかと、常々、其の疑問を模索して来た積りだ。「記誦の学」即ち、机上の論ではなく、体験からの実学上の回顧を続けながら、長江の流れを眺めていた。

9月25日

武　漢



昨夜は船長主催の晩餐会が盛大に開催されたが、「月に叢雲、花に風」か好事魔多しと云うか、浮世はままならず、「熱発」という邪魔ものに冒され、鼓腹して飽食することもなく、万難を排して武漢の観光に備える為に、早々に会場を引き上げた。

水を打つたような静寂の中を午前６時、漢陽埠頭に着岸し西陵号に別れを告げた。武漢の埠頭は上図にある漢陽の晴川飯店に接続し、３００室を擁する２４階建の近代建築は長江一帯を睥睨していた。南側には漢陽の誇る晴川閣が、指顧の間に絢爛豪華な姿を見せ、長大な長江大橋も亦、霞んだ対岸に向かって蜿蜒と延びていた。

長江と漢江の合流点の直ぐ南にある晴川飯店や晴川閣は、亀山（大別山）の北側の山麓に位置し、古代からの重要な戦略要地として名高く、丘の上にはテレビ塔が天高く聳えていた。（上図の亀山電視塔）紀行文に入る前に武漢の概要を記して置く。

武漢の概要

湖北省の省都で、長江・漢江の合流地にある大商工業都市ある。北京・広州とは鉄道で、上海・重慶とは長江で結ばれ、水陸交通の要衝として古来から「武漢は九省に通ず」と呼ばれていた。即ち、中国の心臓部と称された所である。

武漢は上図のように鼎立した武昌・漢口・漢陽の三都市が合併した都市で、歴史的には三国時代以来の都市であり、度々、争奪の的となった地である。中国の現代史に於ても特に目立つた存在であった。

漢口

旧名を夏口と称し、江夏県（武昌の旧名）下では一漁村だったが、１８６１年に結ばれた天津条約で開港し、爾来、その発展は旭日昇天の勢いを示し、忽ち武昌・漢陽を圧倒して武漢の首脳となった。

戦前の漢口市街は中国人市街と外国租界とに分かれ、英・露・仏・独・日の５租界があった。日本租界には領事館を始め会社、銀行、同仁病院、商工会議所、紡績工場、旅館、料理屋等も揃い、居留民も３、４０００人に達し、漢口に於ける我が国の権益は甚大なものであった。揚子江警備の日本の軍艦は常に３、４隻が停泊し、海軍陸戦

隊も駐屯して権益の擁護に当っていた。

漢　陽

揚子江を隔てて武昌が、漢水を隔てて漢口があり、古今用兵の必争の地であった。特に北方にある前記した亀山（大別山）は小軍山と共に、最大の要害であり、古代、呉・魏軍が相対峙して、両山で練兵した所から此の名称があると云う。伝説によると今も尚、風雨の時には金鼓の声が聞こえて来ると云われ、雲霧が懸ると数十里の地域に雨が降るという。しかし、小さな丘に過ぎず、白髪三千丈式のようだ。

戦前から工業地帯として発達して現在も諸工場が櫛比し、煤煙が天を焦がすような盛観を呈している。テレビ塔の立っている亀山から西方を瞰望すると、月湖・華蓮湖・墨水湖等が水をたたえ、前記した晴川閣や帰元寺が山麓に美観を添えている。

武　昌

旧名を江夏と称し古来から政治の重要な地であった。元朝（１２０６）には武昌に荆湖省を置き、更に之を改めて「湖広」と呼び、湖広四省の首都とした。明代に初めて広東・広西の二省を設け、武昌は湖南・湖北二省の首都となった。清朝康熙年間に長沙を湖南の首都にしたが、武昌には湖北・湖南両省を管轄する湖広総督が駐在した。

清朝末期、１９１１年の辛亥革命は武昌の兵営から勃発し、これに続く戦闘では、この低湿な地を東西に横切る蛇山（前頁地図の右下、其の左が黄鶴楼）の丘が、戦略上の重要な拠点となった。続いて漢水を見おろす一連の高地が、清朝政府軍と革命軍との重要な戦闘舞台となり、漢陽にあった政府の兵器庫をめぐる攻防が行われた。

歴史的には武昌は政治・文化の中心地であった関係から、周囲には名所旧跡が多く、現在も各官庁のほか、３０余に及ぶ大学は武昌に集中している。

武観三鎮はまた１９２６年、広州を発した国民党の北伐軍が漢口を掌握し、国民党の勢力が揚子江中流域に及ぶ事になった。次いで漢口の英国租界は猛攻を受けて国民党の手に落ち、政治の機能は一時、完全に停止したが、やがて協定が成立した。

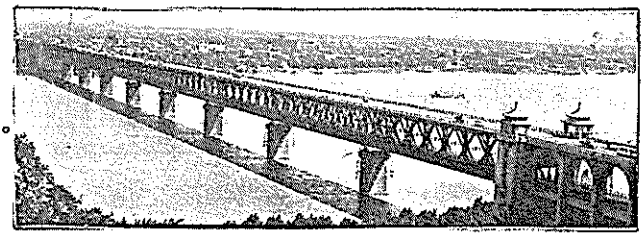
その後、英国の市政権は解体され、嘗って漢口のドイツ租界で実施したように、中国と英国による共同市政権が確立された。

日中戦争では、１９３７年１２月の南京陥落後、一時、国民党政府は漢口に退陣して揚子江の航路をふさぎ、強固な陣地を構築して抗日戦の拠点とした。

武漢三鎮の日中両軍の戦闘は１９３８年６月１２日に開始され、同年の１０月１２日から２５日の間に、それぞれ陥落して終わったが、非常な激戦が展開された。

第二次大戦後の国民党政府による武漢の統治は短命に終わり、１９４９年、人民開放軍の手によって開放されたのである。

武漢の見学



晴川飯店での朝食を終えたが我々の乗車するバスは姿を見せない。白人達を乗せたバスは次々と観光に発ち、私達は手を振って見送るような有様である。即ち、空港へ客を運んだ車を首を長くして待ち続けた訳で、８時３０分の出発が１０時になってしまった。幾度、訪中しても一向にサービスは向上せず、歓迎する精神が疑われる不思議な国だ。世界各国が観光客誘致に尽力しているが、其の焦眉の急は時間厳守である。

通訳の説明も瓢箪ナマズのように、のらりくらりと要領を得ず、我々にとっては１時間３０分の旅の時間は貴重だ。「六日の菖蒲」の格言のように、時機を失っては役に立たず、日本人に怨みを持っている感じさえ覚えた。

中国の指導者は口先だけでは、「大阪の城も建つ」ような大きな事を云っているが、末端の実態をご存じなのだろうか。外面は菩薩の顔でも心中は夜叉ではないかと、通訳や運転手への憤慨よりも、首脳部に対する反発心の方が一段と強い心境であった。

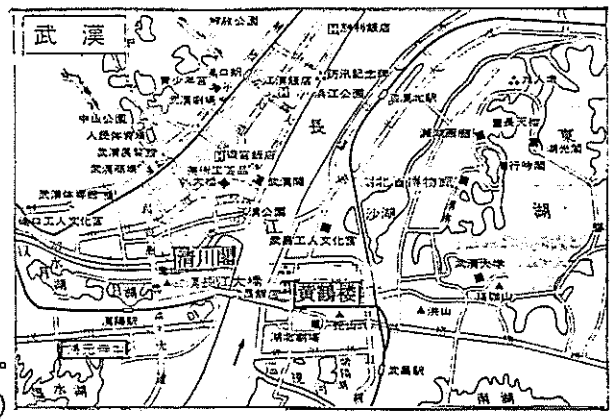
武漢長江大橋（上の写真）

漸く出発したバスは、呉・魏軍が旗鼓の間に相見えた亀山を一周するように迂回し、本年３月、完成した２２０メートルのテレビ塔を左に眺め、武感大橋を通過した。

１９５７年１０月、２年の歳月をかけて完成し、漢陽の亀山と武昌の蛇山を結び、全長１６７０ｍ、高さ８０ｍ、幅２２、５ｍ、上段は車道と歩道、下段は鉄道であり、ソ連との合作の第一号である。

戦時中、幾回となく乗車した京漢線（北京～漢口）は橋の完成により、広州まで延長されて京広線と改名し、長江南北の交通・輸送は画期的に飛躍した。

しかし武漢大橋の建設の結果、漢陽の誇る名楼であった晴川閣の展望は、非常に狭隘となり、これと対象した三大名楼の一つである、武昌の黄鶴閣まで完全に取り壊されてしまった。「河豚は喰いたし、命は惜しい」と云うようなもので、良い事ばかりが両立するものではないようだ。



（右は武昌を中心にした武漢の要図）

東　湖

西陵号のクーラーの故障で扁桃腺が張れ、少々の発熱は、心が勇めば足も軽く、熱ぐらい何のそのと長江大橋で下車し、カメラを押した。

橋を渡った武昌は、武力で勝利したと云う意味があり、行く手の左側に五層の黄鶴楼が紺碧の空に聳え、見る人の心を引き付ける絢爛豪華な美景良辰な姿を、燦然と輝かしていた。

黄鶴楼の反対側には小高い蛇山が見え、プラタナスの街路樹の延びる道路に、トロリーバスが走っていた。中南百貨大楼（百貨店）の前を通り道教寺院を眺め、洪山公園を通過したバスは、東湖畔の長天楼近くの乗船場に着いた。（上段の写真は長天楼）

湖畔は初対面である「水杉」という名の木で囲まれ、其の茂みの中から洋々とした東湖を望む光景は、浮き世の塵を払って蓋世の気概を養う好適地である。

東湖は「西に杭州の西湖あり、東に武漢の東湖あり」といわれる景勝の地で、武昌の東にある湖である。西湖よりも数倍広く、九十九湾と称されるほど湖岸が入り組んでおり、湖畔には多くの楼閣や亭が 点在している。

バスから下車すると遊覧船は間髪を入れずに出航し、飛沫をあげて広大な湖面を滑るように走った。乗船場近くの長天楼の眺めも遠のくにつれて、行吟閣の翠緑なはずの屋根瓦が黒ずんだ姿で現われ、水杉の林と相俟って湖景の特徴を表現していた。

行吟閣は湖の西岸に建つ３層の楼閣で、前記した屈原の記念館になっているが、長江のほとりを彷徨った彼は、此の地までも訪れたのであろうか。（上の下段は行吟閣）

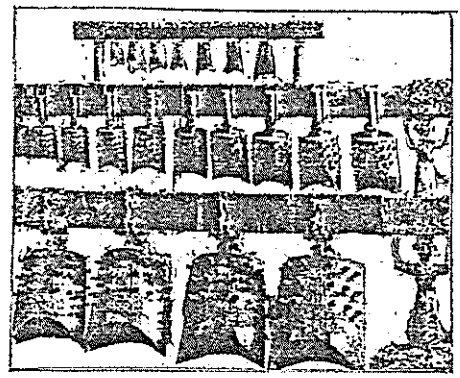
稍々時間が過ぎると、蒋介石の別荘があったという珞珈山が近ずき、其の下に建つている武漢大学は広大な敷地である。パンフレットで見た武漢大学の中国式に反り返った屋根は、残念ながら距離が遠くて網膜に写らない。このように武漢大学に執着するするのは、最近、義妹の教え子が 此の大学に留学中し、良く見て来て欲しいと懇願されたからである。

西に航路を転換したが珞珈山の影像は消えず、そのまま直進して湖北省博物館の南の方に接岸し、約１時間ばかりの東湖遊覧は終わったのである。

以前に杭州の西湖に遊び、今、東湖の湖上の人となって湖上を遊覧し、旅情を満喫できたことに満足しながら、次の目的地である博物館へと向かった。

通訳の話では、東湖は冬期には氷結することもあり、１０センチ程度の積雪も見られるそうで、中国三大ストーブの地も冬は寒いらしい。良い時期の旅であったようだ。

湖北省博物館



東湖畔にある此の博物館は、１階は古代からアヘン戦争（１８３９～４２、英国が各地を占領して南京条約を締結させ、列強の中国侵略の端緒となった）までの歴史と省内で発掘された土器、陶器などが陳列され、２階はアヘン戦争から開放までの、革命の歴史を物語る品々が展示されていた。

中でも２４００年前の曽侯乙墓の出土品は、博物館の中で最も頭角を現わしていた。「曽侯乙墓」は湖北省随県城の郊外（今の随州市）にあって、１９７８年夏に発見され、紀元前４３３年或は稍々後の戦国時代早期のものである。墓の主人は一人の地方諸侯のような国の君主で、名前を「乙」と呼んだので曽侯乙墓と云う。

出土品の中で最も大きい物は青銅の「編鐘」（上の写真は其の一部分）であり、完全な姿で保存されていたから、現在でも演奏が可能である。これは古代の楽器の中で世界的な珍品であると云われている。

此の編鐘は長さ約８ｍ、高さ約２ｍもあり、上・中・下の３段になっていて、下の方ほど大きく、上の図は約３分の１程度に過ぎない。丁度、日本の寺の半鐘のような吊り鐘が、下段に１３個、中段に３３個、上段に２０個あり、太い横木に吊り下げられている。この打楽器の編鐘の「編」の意味は、糸（ここでは太い縄）でからげて組むという事ではないかと思う。

次ぎに珍しい楽器は、長さ３０センチほどの長方形の四角い石（厚みが異なる）を、太い横木に３２個も吊るした打楽器であった。「編磬」と書いてあったが、編鐘と同じく、現代の木琴の原理に良く似ているようだ。

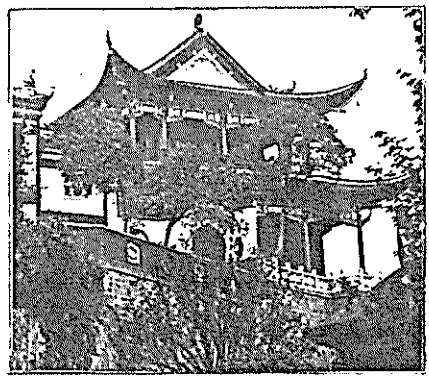
また墓の本体である棺には、総てに朱塗りの模様が描かれ、内棺・外棺になっている。内棺は長さ２、５ｍ、幅１、５ｍ、高さ１、８ｍの巨大なもので、墓の両側には召使の死体までが陳列され、古代中国の一地方の王の絶大な威力を表現していた。

外棺は一回り大きく、長さ３ｍ、幅２ｍ、高さ２ｍの合金性の物で作られ、贅を尽くした物ばかりで、初めて見た豪華なものであった。

その他、２５弦もある大きい琴を始め、太鼓、漆器、青銅器、机、衣装など、７０００余点にも及び、２４００年前の成功極まる物ばかりである。

戦中、私の戦いの場であった河南省は古代文明の発祥の地だが、此の墓の所在地の随州市は河南省との省境に在り、黄河流域の中央文化の影響が大きいものと思われる。

晴　川　閣



晴川飯店で昼食をとり、僅かの時間を利用して晴川閣の高台に入場料を支払って登った。

元来この地・亀山（大別山）は、頂上で古代の名君「禹王〕が治水の成功を天に奉告した所と伝えられ、此処に禹王廟があり、武漢三鎮の光景を一眸のもとに俯瞰することが出来た所だったと云う。

晴川閣は亀山の長江に突き当たった地点に在り、武昌の黄鶴楼とは長江を隔てて相対峙し、其の建築は優雅な２層であり、楼上からの風光は頗るよいと言われていた。

唐詩に「晴川歴々漢陽樹、芳草萋々鸚鵡州」とあるのは、此処のことである。

（萋とは草の盛んに茂っている意）

然し乍ら現在は、亀山はテレビ塔が聳え、長江大橋が建設されるなど、開発が進んで昔日の面影はない。晴川閣も亦、長江大橋と亀山周辺の開発の結果、詩に詠った光景は姿を残さず、楼上からの眼に映る展望は、中国首脳の唱える近代化の波だけだ。

優雅な２層の楼閣と云われた門を潜ると、「荆楚雄風」と書いた黒の石碑が立っていた。昔の歴史を学ばない若い中国人は理解できるのだろうか、と疑問を感じた。

奥にある白壁の楼閣には「禹稷行宮」の四文字の額が掲げられ、治水の神の禹王が祀られていた。古い書籍では亀山々頂となっていたから、移築したのであろうか。

それに続く白壁の楼には「古晴川閣」の掲額があり、此処が昔の晴川楼の跡に間違いないようである。其の古晴川閣の中には「蔵経閣」があり、昔は此処からの眺望が最高だったのであろうか。（上の写真が古晴川閣）

晴川閣が建っている台下の広場の一隅に、青銅の塔が建っていたが、長江大橋を背後に控えて調和がとれず、過去の歴史が消えて行く姿は、何処の国も大同小異である。

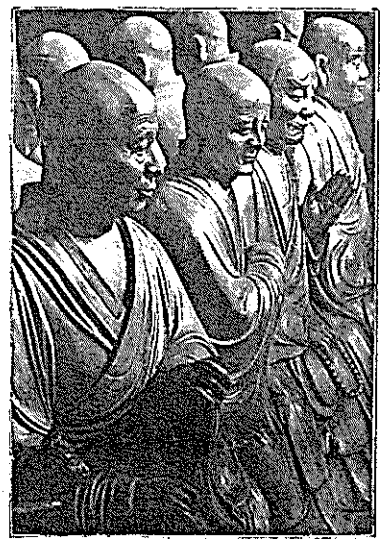
帰　元　寺

６７頁に掲載した地図の左下に位置している帰元寺は亀山の南のにあり、今は街の真中になってしまっていた。武漢第一の名刹であり、禅宗寺院として名声が高く、院内にある五百羅漢像は特に有名である。

昔は僧侶は数百人にも達していたと云われていたが、現在は約５０人の僧侶が居るに過ぎない。しかし１０年も前は寺があっても坊さんはおらず、宗教は搾取機関として排斥されたが、其の点では改革が進んだようだ。

約４００年前の清代の建築の帰元寺は、正面玄関は黄色の壁で塗られ、両側に珍し

く狛犬が併立していた。中に入ると先ず「蔵経閣」があり、約１００年前に建築した此の新しい建物の内には経文が収められ、また堂内にはビルマから寄贈された玉仏が安置されていた。経文には竹製・木製・紙製の各種があり、大きいものは長さ１ｍもあると云われている。



つづく「念仏堂」は勢至菩薩、観音菩薩、阿弥陀菩薩の三体を祀り、其の奥にある「大士閣」は観音様の本殿である。此処を過ぎると「大雄宝殿」があり、其の殿宇の前にある大香炉から立ち上る香煙は絶え間なく、参拝の中国人は香を焚いて祈願していた。私も肺腑の底から合掌して亡き部下の冥福を祈ったのである。此の大雄宝殿に安置された破顔微笑の釈迦像は高さ２、５ｍの仏像で、両側には釈迦に向かって手を合わせた弟子たちの像が、立ち並んでいた。

この禅寺で最も名高い五百羅漢を安置した「羅漢堂」は、２ｍ近い巨大な像が処狭しと坐り、数棟の伽藍を埋め尽くしていた。又、これらの羅漢様を守護するような格好で、四天王が眼を怒して門前に立っていたが、総て名作ばかりであった。

今日まで数十回の五百羅漢を拝観して来た中で、他では拝見できなかった規模の仏像ばかりである。そして又、羅漢の顔付には怒り付いた恐ろしい顔が一体もなく、微笑しい慈悲深い表情ばかりであった。（上の写真は羅漢像の一部）

但し、私の見識が狭く、「遼東の豕（イノコ）」の類かも知れず、確信を持ったものではない。

この中国南方式の仏教寺院の特色を供えた殿堂内の仏像は、１００年という長い歳月の中で、実質９年間を要して作ったもので、それだけ細密に吟味したものばかりであり、名声の高い理由も其処にあるのではないだろうか。

羅漢とは「阿羅漢」を略した言葉で、アラカンの意味は「応供」ということであり、其の点からすると笑顔の姿で人間に接するのが本当のようだ。

煩悩を断ち切って完全な智を会得し、供養に応じる最高の位に到達した人が羅漢様であり、仏陀の称号の一つとも云われている。（小乗仏教では聖者を指している）

全く仏教を研究したこともない私だが、智は悟りではないだろうかと思え、悟りが真の智ではないだろうか。其の悟りは一瞬の間の「感」のようなものだと、凄惨な死闘体験上から考えていた事であった。生命は風前の灯のように、生死を忘れて剣電弾雨の中に闘った事は、座禅に勝る修業だったと信じている。

黄　鶴　楼

漢口・漢陽方面から武昌城に入る漢陽門内に屹立する蛇山、一名を黄鵠山とも称した山の山頂に在った名楼が黄鶴楼であった。

三国時代に創建されたが、度々の戦火をあびながら再建を繰り返し、最終的には武漢長江大橋建設の為に撤去され、昔のものは何も残らず、位置も河岸から遠く離れ、古の面影は完全に消えてしまった。

現在の黄鶴楼は河岸を去ること約１㎞、蛇山の北山麓に後退し、史実に基ずいて再建したと云われるが、三層であった筈の楼閣は五層に変わり、木造建築が鉄筋コンクリート建築に近代化されてしまった。

朝の煙景に包まれた天下の名楼は、陽の上昇につれて、鶴の鶏群に立つような玉容を現わし、我々の訪れた昼過ぎの英姿は、乾坤に最上の美貌を誇るようであり、辞を以て形容できない高貴さであった。

「市に帰すが如し」というか、多くの中国人が長蛇の列をなし、恰も命令を以て鳳城に集めたようであった。５２ｍの高さを誇る黄鶴楼は、自ら其の適を適としたように天空に聳え、人の群れに押されながら１階へ入った。正面には上の写真のモザイク画がタイルの壁に描かれていた。此の壁画の伝説の由来は次ぎのようである。

江夏（武昌）郡の辛氏という人の酒屋に、或る日、一人の仙人が現われ、酒を要求されて大杯で飲ませた。酒屋の主人は半年ほどの間は、ただで飲ませていたところ、或る日、仙人は酒屋の主人に向い、酒代もたまったが金がないと言って、お礼にと、店の壁に黄色い鶴の絵を描き、立ち去ってしまった。然し乍ら不思議なことに、酒を飲みに来た客が手拍子をたたくと、壁に描いた鶴が踊り出したのである。

忽ち評判になって店は大繁昌し、十年ほどで酒屋は大金持ちになった。

すると或る日、また例の仙人が現われ、その鶴に乗って天上に去って行ってしまった。そこで辛氏は儲けた金で楼閣を建て、黄鶴楼と名付けたと言う。

上の写真は、三層の楼閣が雲の中に聳え、丹頂鶴（頭頂が赤く、翼の風切りの一部が黒く、他は白色の本物と同じ着色）が紺碧の空に羽ばたき、鶴の背の真中に仙人が乗り、写真に写っていない下の部分には、群衆が鶴を見上げている光景である。

瑞鳥のような壁画のある一階には、趙様初の書による「気呑雲夢」と周華琴の書による「水光山色」の掲額がある。五階に昇る一方運行のエレベーターに乗り、五層に掲げた金文字の「黄鶴楼」の額を仰ぎ、楼上から四周を俯瞰すると、古人今人とを問わず、「美なるかな水、洋々乎たり」と、気宇は壮大になるであろう。

黄鶴楼に遊ぶ風習は唐代に盛んになり、唐の詩人・崔顥は次ぎのように詠んでいる。

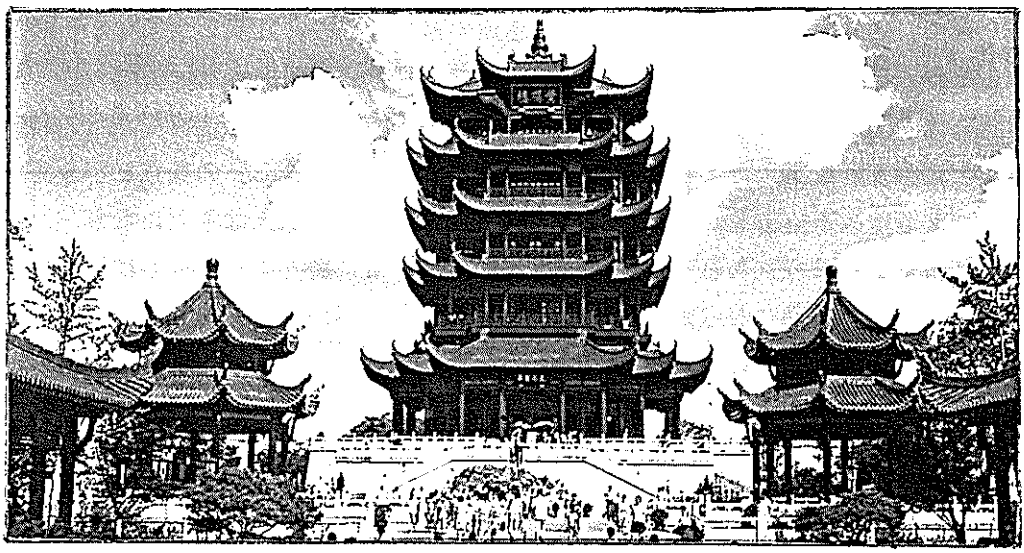
「昔人　已に白雲に乗じて去り　　此の地　空しく余す　黄鶴楼、
　黄鶴　一たび去って復た帰らず、　　白雲　千載　空しく悠々・・・」。

また、唐の詩人・李白も、黄鶴楼上で其の友「孟浩然の広陵（今の揚州）に之くを送る」を詠んだ詩は、作詩の時の風光の美の一部を、想像することが出来るようだ。

「故人　西のかた　黄鶴楼を辞し　　烟花三月　揚州に下る
　孤帆の遠影　碧空に尽き　　唯だ見る　長江の天際に流れるを」

大詩人の詠んだような詩情は、才能のない私では一字も味わうことは出来ず、現在の環境も全く変ってしまっていた。ただ望遠した豪華な威容を白髪三千丈式に表現すると、太陽を西の空から呼び返すような威勢があり、楼上からの展望も亦、天を幕とする「幕天」のような広大な志気が窺えた。然し乍ら、今までの我が知識で以て楼閣の内外を拝観する時、期待が大きく過ぎた性か、開けて悔しい玉手箱である。歴史や詩から得た予想と実相の格差は、長江の長さに及ぶと誇張したいほどであ。

楼上から徒歩で下って楼門の正面に足を歩ぶと、古の楚の国の三名楼の一つと云う意味だろうか、「三楚一楼」と書いた大額を門の上に掲げ、その後方に、燦然と輝く黄金の二羽の鶴が亀の甲羅の上に立ち、鶴亀の縁起を表現していた。（下は全景）



禍福は糾える縄の如し（発病）

世俗の煩わしさから逃れて、黄鶴楼を始めとした武漢三鎮の観光も終了し、長江大橋を見送るように過ぎ去り、満々と水を湛えた漢水の流れを眺めて漢口市街に入った。

旧租界地は長江沿岸一帯を占め、其の古い町並みは依然として跡を残し、其の一角にある漢口飯店が今夜の憩いの場となった。

過ぎ去った一週間の旅の間は、毎日欠かす事なく長江を眺め、その山水に愛着を感じ、感想も尽せないほど多く、再び江流に遊ぶ日は又、何時の日かと感傷的になった。

長江は細流を択ばずに悠々と流れ、小流を合流して世界の大河になっているが、我々に何かを教え、師のように導いているような感じを与えていた。

三国志の里を楽しみ、予定の観光が終了した途端、緊張していた満々の意欲が弛緩したように、杞憂していた扁桃腺の熱は、遂に体温計の水銀を３９、８°まで押し上げていた。持参していた風邪薬では効果がないのは当然のことである。

春秋に富んだ年齢は４０年も前に過ぎ去り、クーラーの故障の不運を嘆き、天を恨むこともできず、抵抗力の低下は寄る年波に勝てずと諦めながら、通訳と共に漢口の病院行きの身となってしまった。

幸いなことに、中国の病院は外国人の診察を優先的に取扱い、医師はカルテの紙面上に、日本字と同文字で扁桃腺炎とペンを走らせた。高熱からくる肺炎の疑いがあったらしく、レントゲンを撮った後、ペニシリンの注射をすると云って、早速少量を腕に注入して反応を見た。日本の現代医学ではペニシリンは使用しないと述べると、笑いながら大丈夫だと自身ありげに答えた。

レントゲンの結果から肺炎の疑いは消え、注射の反応も異常なく、一先ず安心感が湧いて来た。病身ながら泰然として通訳に感謝の言葉を述べ、冗談を交えながら時を過ごしたが、このような高熱はビルマ戦線でのマラリヤ以来であった。

通訳には中国戦線への参加は語らず、専らビルマ戦線の体験談を述べながら、戦争は悪だと日中友好を訴えた。私自身は「狡兎死して走狗煮られる」の身だと字を書いてたが、彼等は故事格言を知らず、「すばしこい兎が死ぬと猟犬は不用になり、煮られて食べられてしまう」ことだと説明した。私は昔、軍に籍を置き、少しは活躍する機会もあったが、平和になった今日では、走狗のように不用になった人物だと話し、結論的には平和に結び付けた会話を続けたのである。

何れにしても「上り大名、下り乞食」に類似した結果となってしまった。

９月２５日～２７日　上海の病院では熱も下り、幸いにも一行と共に帰国した。

中国雑感

中国旅行する度に、当時の中国と日本との情勢を記述する慣習が身につき、今回も後日の参考の為に、今年の最大問題となった「光華寮事件」を書き残して置きたい。

此の事件は京都市内の中国人留学生施設「光華寮」の所有権を決める裁判で、中国が我国の裁判の判決（台湾側の所有権）を不服とし、日本政府に抗議した事件である。

明治以来、我国の制度は司法、立法、行政の「三権分立」によって成立し、総理といえども司法の独立を侵すことは出来ない。然し乍ら、党の首脳の意向によって裁判を左右する事ができる中国側は、中国の意に添うように強要して来たのである。

「光華寮」の裁判の経緯は次ぎの通り。

先ず、昭和２７年（１９５２）、当時我が国と国交のあった中華民国（台湾）の在日大使館が、合資会社「洛東アパートメント」の土地家屋を２５０万円で買い取り、中華民国の名義で所有権の登記を行い、学生寮「光華寮」とした。

ところが八人の学生が卒業後も立ち退かず居座り続けたため、中華民国政府は昭和４２年（１９６７）８月、内容証明の書簡をもって退去するか、改めて使用契約を結ぶよう通知したが、何の返事もなく、やむをえず同年９月６日、被告等に家屋の明渡しを求める訴えを京都地方裁判所に提起した。

審理の途中で、昭和４７年（１９７２）に日本政府が中華人民共和国（これから中国と書く）を承認し、中華民国と断交した。

昭和５２年（１９７７）、京都地裁の判決で【中国との「国交正常化」により、光華寮の所有権は中国に移った】とした。

ところが、大阪高裁は昭和５７年（１９８２）「中華民国は日本が承認していた時期に同寮を取得しており、その後、承認の切り替えがあっても、直ちに所有権を喪失したとはいえない」として裁判のやり直しを命じ、京都地裁は昨年二月の差し戻し審判決で、中華民国政府がいまなお台湾及び周辺諸島を統治している事実から、中国政権は「不完全承認」であり、外交財産でも、国家権力行使のための財産でもない光華寮の所有権は、中華民国に属すと判断、被告等に家屋の明け渡しを命じた。

そして今年２月、大阪高裁の判決は、地裁に続いて光華寮の所有権は、中華民国にあるとの判断を下した。中華民国が日本政府の承認を取り消されてはいても、事実上の政権であるとして、裁判の当事者能力を高裁は認めたのである。

以上の経緯をたどった後、今年３月、寮生が最高裁へ上告した。此の寮生は現在は何れも６０歳前後の社会人であるにも拘らず、学生寮を占拠しているのである。

私が漢口・上海の病院で世話になった同行の通訳に対し、光華寮事件を取り上げた。

明治以来の基本制度である「三権分立」の意味を説き、此の制度は絶対に破ることの出来ない厳然とした制度であり、政府も口出しが出来ない事だと説明しても、全く理解ができない。（中国では通訳は最高のエリートであり、給料も約３倍である）

司法に絶対的な独立性があるとすると、日本には二つの政府が存在するのかと、反対に逆襲されてしまった。そのように教育され、宣伝されているようである。

以上の会話の中から判断すると、日本人とは法に対する観念が全く異なっている。

日本の法の根本は「主権者は国民」であり、法は国民のためのものである。然し乍ら、中国の法の観念では、法は其の時の権力者が、自らの統治の便のために定め、之を行使する観念が強いようだ。此の観点からすると、司法も立法も総てが権力に従属すべきものであり、権力者の統治に役に立たない司法も立法も、存在価値がないと云うことになる。即ち、権力者の考え次第で法はどうにでもなり、権力を以て法に代えるという事になるのではなかろうか。

古来から中国では、権力が絶対的な力を持っており、権力を握る事が総てを得ることに繋がり、人民の保護や利益のために存在する法観念は少なかったようであった。

中国の中でも最高の知識階級である通訳が理解できなければ、果たして誰が三権分立の制度を理解できるのか。結局、体質的に理解する条件に欠け、其の制度を取り入れる思想もないようであり、誠に不思議な国である。

以上は、法に対する観念の相違が何処にあるのかと、私なりに判断したものだが、彼等のような観点からすると、中国首脳は日中友好を阻害するような光華寮判決に対し、日本政府に抗議を申し込む事は、当たり前の行為となり、理解し難いことである。

彼等首脳からすれば、最高権力者の総理大臣の指示で、判決は撤回できる筈であり、裁判の結果をも無視すればよいと、考えているのではないだろうか。権力の頂点に立つ首相が判決を撤回させ、無視しないことは、日本政府が日中友好を重視していない証拠だと、無理難題を押し付けてきている状態が、今次旅行の前後の状況であった。

過去の教科書問題や、靖国神社公式参拝問題も、日本政府が関与したからこそ解決を見たのであり、光華寮問題も政府が関与すれば、解決が可能だと判断していることは、確かだと思えてならない。

光華寮判決という司法権の独立にまで、理不尽とも思える抗議を申し込んだ事件は、日本と中国が仲良くことが「日中友好」の条件ではなく、彼等の要求を入れる事が、日中友好だと決め付けている事を証明している。

日月の流れは速く、蘆溝橋事件から５０年を経過し、真の友好を望んでやまない。

旅のあとに

「人生の福境禍区は、皆念想より造成す」と菜根譚に書いてある。人生の幸せとか禍とかは、自分自身の心の中から起ってくるもので、決して、境遇に左右されるものではない、と云うことである。

旅は人生だと云い古された比喩だが、私は人生が旅そのものだと思って旅をした時に、初めて旅の醍醐味を満喫する事が出来ると思う。其の事が上記の言葉のように感じて、旅を続けてきた。

長江三峡の巍峨とした群峰、逆巻き奔騰する怒濤を、文章や写真で表現し、肌に感じさす事は出来ない。そこに旅の醍醐味があり、山登りの人達の頂上に立つ心境を、窺い知る事ができるのである。

此の醍醐味を味わう時に、生きている貴重さを感じ、そこから喜びが沸き上がり、「謡い長じて舞となる」という道理のように、深入りする事は理の当然である。しかし、知らず知らずの内に深入り事が更に醍醐味を深くし、高くするのである。

（醍醐とは、牛酪の精純なもの、転じて最上の意、仏法では深妙な教えをいう）

昨年以来、体調は整わず、老化を感じて青菜に塩となっていたが、天地に万古あるが此の身は再び得られずと思うと、渇して井戸を穿つ式の手遅れになってはならずと、体力の限界を忘れてしまい、旅に対する「気」だけは旺盛であった。

「気蓋世」、意気の盛んなことは、万物生成の根本である。気宇、気勢、気骨、気根、気韻から、浩然の気、英気、秀気、生気など、「こころもち」が肝要なのだ。

往路は遠の昔に折り返し点を通過し、まっしぐらに復路を進む我が身を回顧すると、戦中、戦後を通じて私の人生航路は起伏に富み、波瀾万丈であり、人とは人生観を異にして生きて来た感じだ。

特にビルマ戦場の体験は、世の煩わしさから開放されたい一念を生み、その積りで生き延びた唯一の「こころもち」は、人生航路の果てだけは、心豊かでありたいと云う念願だけであった。此の事が旅立ちを奨めたのかも知れず、旅の醍醐味から豊かな心に向かって、一歩一歩、近ずきたいものである。

今回、２０００年前後の古い歴史の里を訪れ、過去の歴史の扉を開いて感じたことは、敵、味方の戦いの激突よりも、人間には絶対に勝つことの出来ない敵がいることを、強く感じたことである。始めあるものは必ず終わりがあるように、劉備然り、孔明も然り、即ちそれは「死」である。そして又、死を待つ日月の流れの速いことは、一炊の夢のように速いものである。

幸いにも死生観に就いては、悲惨極まるビルマ戦場や中国戦線で身を以て体験し、その結果、卒業試験の難関を突破し、免許皆伝の一歩手前に到達したと云う、信念だけは持っている積りだ。座禅を組んで修業する禅僧もさることながら、草蒸す屍と骨を曝して剣電弾雨の中に身を処し、責任感に生きたことは、死生観の達成の近道であったと確信している。

自然に身に付いた「こころもち」から今回も亦、旅情を楽しむ機会を求めたが、其の起因は人生観の相違と、死生観の体験が尾をひき、だからこそ、一風変わった人生航路を歩むことができてのであろう。

さらに旅をして新たな友を得て感じることは、人間が生きる必須の条件として、「世に在る」ことは当然として、「共に在る」という事である。「同声相応、同気相求」という旅を愛す人との和は、桃源の別天地を求めるようなものだ。此の事を故事付の論と揶揄しても勝手である。見る人々によって見方が異なり、感じ方の違うのは、「一水四見」の言葉の通りである。

長々と旅に対した心境を述べたが、紀行文の「あとがき」と書かずに、「旅のあとに」と書いたことは、最近の我が心境を書き残しかったからである。

今回訪れた千古に古い三国志の里や三峡は、多くの事を教示してくれた。自ら死山血河の場に身を曝した者のみが、感じ取られる名状し難いことは、三国志中の諸将と相通じるものがあり、古代の歴史の中に身を置いた感覚で眺める事が出来たようだ。

人間社会の反覆、離背は留まるところを知らず、と先ず第一に脳裏に浮かんだ。合従連衡時代を始め、同盟が変じて戦となり、昨日の友は今日は裏切り、千変万化の世相はは今にも通じることである。

我々が殺戮と飢餓の危機の中をくぐり抜けた「戦いの術」とは、一体何であったのか。敵の弱点に付け込み、敵の意表を衝くことだと教えられていたが、三国志は古戦場を通じて次ぎのように教えていた。

「戦いは智を始めとし、仁これに次ぎ、勇は其の下に在り」との教えを残していた。或は又、「戦いに勝利を収め、覇道を進む上で肝要なことは、逸材を集めることだ」と、各古戦場は標本のように教示していた。戦いの勝因として先見性、情報力、決断力、指導力等の諸要素が要求されるが、逸材（智）を筆頭に上げている。

誰だったか、「戦争は最大の企業なり」と述べたが、逸材を集めることは、政財界を問わず勝敗の鍵である。

逸材を集める為の要素は「徳」である。劉備玄徳に徳があったからこそ、諸葛亮孔明が「三顧の礼」に応えて「草廬」を出たのである。我々が戦場に於て指揮官に仕え、

或は部隊を指揮する時に、徳を以て導くこと、即ち「徳化」を考えただろうか。責任の重圧に無我夢中であり、其の余裕さえもなかったが、徳は一日で成らずである。

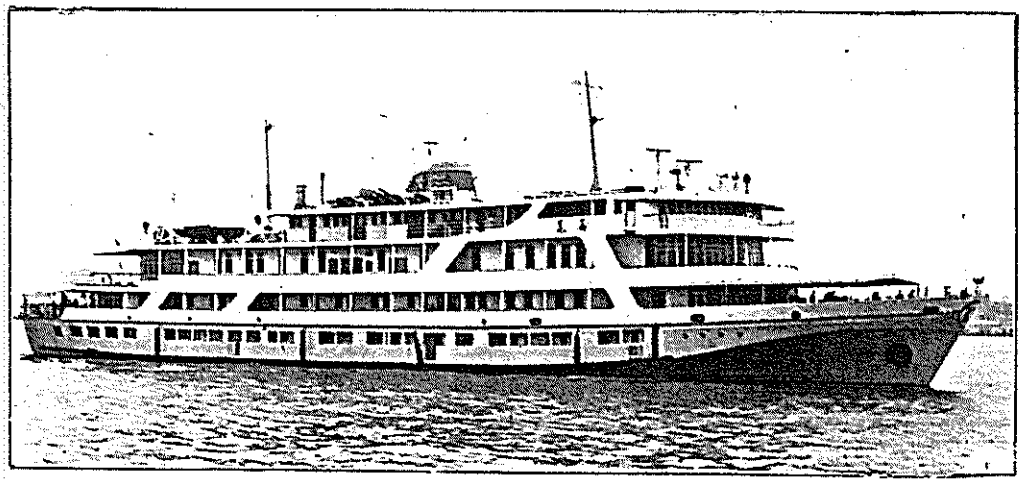
「水魚の交り」。之は劉備の言った言葉である。

三顧の礼を尽くして求めた孔明を、劉備は師として敬い寝食を共にし、孔明も亦、全能力を尽くして劉備に仕えた。これに対し勇将の関羽・張飛は、若輩（当時孔明は２７歳）に対する傾倒ぶりをねたみ、「孔明を敬いすぎる」と劉備を非難した。その時、劉備は次ぎのように言った。

「孤の孔明あるは猶　魚の水あるがごとし、願わくば復　言うこと勿れ」と。

（孔明を得たことを、自分は、魚が水を得たとでも、たとえたいほどだ。二度とそのようなことは言うてくれるな）

君臣の間柄の親密なことをさして「水魚の交り」という言葉が出来たのは、ここからであった。此の事が今では、水と魚との関係のように、特に親しみの深い交りに使われるようになった。

三国志は戦争の歴史物語りだから其の様な文になったが、「兵は国の大事、死生の地、存亡の道」であるから、絶対にあってはならない。また「国大なりといえども、戦いを好めば必ず亡び、国安しといえども、戦いを忘れば必ず危し」の教訓もまた忘れてはならない教えだ。

古い歴史に思いを馳せ、病身を押し退けての旅にも満足感が満ち溢れていた。蛙や蝉のように鳴くだけの「蛙鳴蝉噪」の拙劣な紀行文になったが、後日の想い出に記述した。そして又、これからも旅を続けたいが、幸せの蔭には禍の隠れている事には、充分心掛けたいものである。